雄は皮班にして葉に極なし、三月花をひらく、柳花のごとし、實を結ばず、雌は皮白くして葉極又あり、碎花をひらく、實を結ぶ、楊梅のごとし、南人皮を剝搗き煮て紙を作、又緝練して布とす、堅からず朽やすし、（和漢三才圖會）楮皮今多く紙に造り布を織る、木綿と稱するこれ也、云々○楮は、時珍が說の如く、三月花あり、六月の說にたがへり、故に雜談抄に、花をいはずして楮とばかりを季とすといへらされど紙は常に漉て季としがたく、殊に夏漉は紙臭氣ありて下品也、楮も種類あり、大和木草に、山楮有り一名ガンピ、又山カゴと云ふ、其木も皮も櫻に似たり、葉はほぎに似て小也、四月に葉を生じ、枝長さ高數尺に過ず、深山に有り、花はほぎの花に似て黃也夏の末に咲くその皮を剝て、楮の如くに煮て紙を漉くと云々以ㇾ之夏とするか

蒲の穗　（和漢三才圖會）香蒲の花の狀、頗る鉾に似たり、故に蒲鉾と云ふ又蠟燭に似たり是香蒲の穗なり

芋　（和名抄）芋、和名加良無之○あノ部厩の條に委し

韓瓜　甜瓜に似て大きく、皮こまやかならずして味劣る、通俗志に、熟瓦と訓ず

《よ》【四月】

浴佛　ふノ部、佛生會の條に出づ

吉田祭　中ノ子（廿一社註式）或人曰六十六代一條院永延元年十一月廿五日中ノ申、今年始て祭禮、誓願によりて、公家の御沈沙となる（江次第）四月中ノ子、十一月中ノ申、裏書云ふ、吉田祭永延元年始ㇾ之、山蔭中納言一家これを祭るべき也、○吉田の春日は中納言山蔭卿の建立也、」祭日、幣帛使、内侍の使等立つ倭舞など有り、江次等に委し

餘花　（題林抄）餘花は、春におくれて獨咲ることをあはれみ、山深ければ夏の來るをもしらぬかとおほめき、青葉の中に咲るめづらしきいなどよむべし

よろひ草　牡丹の一名也名義未ㇾ詳食白艸の略言にや

夜白草　（開元遺事）明皇沈香亭の前の牡丹、一枝二頭、朝は深碧、暮は深黃、夜は彩白にして、香艷各異也、帝曰、これ花木の妖也と、楊國忠に給ふ、百寶を以て欄とす○天津人今やくだりて詠むらんよしろいろ草花さかりなり　閑院左大臣

薰原雀　きノ部　ぎやう〳〵しの條にてみるべし

葭剖　（歲時記）端午に菖艾を刻み、小人子或は葫蘆のかたちをつくりて、これを帶れば邪を辟く（荊楚歲時記）五月五日雞いまだ鳴ざる時、艾の、人の形に似たるものを采り攪てこれを取收て、病に灸す、甚驗あり○是らの說より屋擔にも服なるべし

【五月】

蓬服　（歲時記）端午に菖艾を刻み、小人子或は葫蘆のかたちをつくりて、これを帶れば邪を辟く（荊楚歲時記）五月五日雞いまだ鳴ざる時、艾の、人の形に似たるものを采り攪てこれを取收て、病に灸す、甚驗あり○是らの說より屋擔にも服なるべし

【六月】

吉野の蛙飛　九日當山の蓮花會也、吉野郡の內、蓮池と云ふ處より、每年蓮花を藏王權現へ奉る也、この花を筥に植て轅をかけ、九日の早旦に、神輿を舁ごとくして、山中を持ありく、つゞきて在家のもの〻子供に母衣を負たるねり物を渡す、夜に入て、當山の僧徒、藏王堂の前にて行法あり、其刻下づかひのものに、蛙の形を作らせ、堂の後に入おく、その形眞に蝦蟇のごとし、行法をはりて、かの僧四人檜扇にて先の蛙をまねけば、堂より飛出て四人の僧の膝もとをめぐり飛ぶ、是を强く祈り責るに、次第にせめられて、堂內を逃ありくを終に祈り殺す、其後戶板にのせて堂外へ舁出し、湯水をかくれば蘇生すと云ふ

節折　晦日（公事根源）卜部忌の節を庭中席の上におく、節折の命婦竹をもて參りて、御たけよりはじめて、所々の寸法をとり、果て宮主にきりあてがはせて、御祓をつとむる也、あらたへにぎたへとて二度あり、二度はて、祿を給ふ、云々これは主上の御たけの寸法をとりて

共程にをりあてがへば、よをりと云ふ」節折の節は竹のよ也和名抄兩節間（俗に云々）○是即ち、荒和祓の御贖物なり

《た》【四月】多賀祭

伊弉諾會、本地は無量壽佛、鎭座年歷詳ならず、例祭四月二の午（社說）江州犬上郡、多賀の大社は祭祀當日、神輿本宮より艮の方一里ばかりに栗栖村の大宮（御旅所）へ渡御、供奉行裝、鉾十二本、神馬三疋、禰宜四人、神子二人、隨身六人、神主三人、馬上、その外氏子村々より種々の造花を出す、凡六十木ばかり、練物は年々思ふ所にしたがひて定らず、神輿三基渡御、坤の方、賓臺の社まで、大社の御使として、殿一人健兒一人參向、行列先途拂十三人、わつそく六人黃の直垂三十人調度懸六人、神事の警固は彦根の城主より、物頭二人これを出さる、（雜談抄）此ことの頭人を定るは正月三日より、氏子の中豪富のものを撰て、衣に人て神慮をうかゞひて定む、其頭に當る家に神宮榊を立る、其頭人神供米幾許これを捧ぐ、祭の日四位に準じて、衣冠を着し、社頭へ參詣、一族一門風流を盡してこれにしたがふ

當麻祭

上の申○俗にタヘマト○大和國葛下郡、當麻都比古社二座麿子王子命、比賣命、（公事根源）大和國に侍る社也、午日使たつ

龍田祭

ひノ部、廣瀨祭の條にみるべし

鷹の巢入

（和漢三才圖會）鳥の羽毛を易んとするとき草皮を解去て鳥屋の內に放つ餌食意に任す日を逐て脫落て、また新毛を生じて、七月中旬舊のごとし○片鳥屋（初年）兩片鷹（每歲）（鷹百首抄）四月八日鷹を鳥屋へ入て、毛をかへさするなり、此時羽虫の藥を飼て、さて又餌をも飼なり、是をわすれ飼と云ふ也、或は鳥屋踏、鳥屋ごもり、鳥屋鷹、毛をかふる鷹、などみな夏也、又ひむろ山、どろ板など、皆此時のうはさなり、夏なるべし（同三百首抄）鳥屋へ入るとて、動氣の藥を

羽蟲の藥に飼也、此藥は榎木の股にたまる水を、どうけの藥に用る也其水取て置べきやうなくて、紙にひたして置て、後の用の時ほとばかしてつかふ也、竹のとぐひに溜る水も同じ、それを小壺の水と云ふ○ひむろ山とは、同抄に云ふ、むし鳥屋とて、出して塗まはしたるを氷室山と云ふ、其中へ樋をかけて、水を入るゝを下行水と云ふ○どろ板同抄に鳥屋の內に水を流して、古き飼を洗ひながさんためなり

橘

（日本紀）垂仁帝九十年の春、田道間守に命じて、常世の國へつかはし、非時の香果を求む、今橘と云ふ是也、同九十九年の春非時の香果八竿八縵を得て還來る本草樹の高さ丈餘、其葉兩頭に尖り有り緣色光面、四月小花をひらく、色白く甚香ばし、（古今）五月まづはなたちばなのかをかけはむかしの人の袖の香ぞする○古へ賞するところの橘、其種詳ならず、源氏物語、枕草子などに、花も實もひとつに具したるよしにいへり、去年の實の今年花さく迄落ずして、黃熟したりと見ゆ漢土にも、はやく、橘の種類につきては說々有りと見えたり○はなたちばなといへばもとよりにて、只橘とのみいひても、勾の取なしにて夏なるべし、猶春のたノ部、橘の條併せみるべし

玉卷葛

（奧儀抄）玉々まく葛とは、葛かづらの貌玉のやうに卷るたればいふ也、（秋枝折）葛の手を卷たるを玉まく葛といふとなり、云々

玉卷芭蕉

時珍が曰、蕉葉を落さず一葉舒るときは一葉枯る、故に卷葉と云ふ、玉まく芭蕉と稱するものは是歟

筍

たかんなたかうな時珍が曰、筍、俗に笋に作るは非也、竹筍と笋と同性滑利多く食へば人を瀉せしむ、凡竹筍は淡竹を上とし、呉竹次之（紀事）笋は、鹿猪甚好み食ふ、故に夜々人をして追はしむ（和名抄）笋（和名太加無奈）（源氏橫笛卷）たかうな

橘鳥

杜鵑を云ふ（萬葉）橘の林をうゑむほとゝぎす常に冬まですみ

わたるがに、(古今)やどりせし花たちばなもかれなくになどほとゝぎす聲たえぬらん　大江千里

【蚕三夏ノ物】蓼　(和漢三才圖會)按に青蓼、二三月に苗を生じ四五月繁茂す、秋に至て穗をなす、播州津田、每に穗蓼を出す、年中穗有り、亦一異也

蓼喰虫　(孔叢)有三蓼蟲ノ賦ニ言、是蟲幼長二斯蓼一不二以爲一辛〇世俗に蓼食蟲も好々といへるは是より出たる諺なるべし

【五月】端午　五月五日、端午の節端は初也、午は古へ五字と通用す、しかるときは五月初の五日の謂也、(珊瑚鈎詩話)端五の號、重九に同じく、後世五の字を以て午とするは誤れり、(風土記)仲夏の五日を端午と云ふ

竹植日　竹醉日(晉書)五月十三日を竹醉日とす、亦竹迷日と云ふ、是日竹を栽れば必活、(竹譜)竹を種るには蠅を以てす、根よりして上、一節發するものを雌とす、(笠日記)降らずとも竹植る日は簑と及　翁(五元集)五月十三日雨雲や竹も醉日の人あつめ　其角

田植、田植歌　早少女、早苗取、若苗　(紀事)凡五月の尾より六月の首に至て、苗種生長するを玉苗、民間にて苗代と云ふ、これを植んとして、先これを拔を早苗取と云ふ、農民男女混雜して再び苗を挿む是を田植と云ふ、女子苗を種るものをさをとめと云ふ、各音を揚うたふ、是を田哥と云ふ、或は兒童太鼓をうちてこれを勸む、凡苗を種る事半夏生の前に有り〇若苗は、いまだ長ぜざるをいふ〇玉苗は、玉は稱美詞也、小山田に今ぞ玉苗植てけるとめがもすそぬれてかへりぬ

秩百合　(和漢三才圖會)花正白、蕊厚く大にして上に向ふ、或は横に垂る、最愛すべし、もと深山溪谷の間より出、これを得がたし、繩に縋り下りてわづかに一株袂に入て、また縋り上る、故に袂百合と名づく、これを珍重す

【六月】鷹習を學ふ　(月令)季夏鷹乃學習す(注)學習雛の、しばノ〳〵飛ぶ事を習ふなり

瀧殿　いノ部泉殿の條に出づ

竹皮脫　(本草集解)時珍曰、土中苞笋各時を以て出、旬日　籜を落して竹となる、(和名抄)籜、和笋名乃宇波加波筴、和名竹加波

田草取　(本朝食鑑)種て後、二十日前後、田の雜草を除き去り以て其根を固くす、速く田草を除くときは、再び除くの勞なし、〇夏より秋に至迄、三度田間の草を取、是を一番草、二番草、三番草といふなり

簟　(說文)簟は竹席也、竹を以て席とす、云々(和漢三才圖會)簟は竹莚也、暑に用竹鋪レ之ヲ、

抱籠　ちノ部、竹夫人の條に出づ

紙の納涼　みノ部、御手洗の條に出づ

【れ】【四月】鷹爪　(和漢三才圖會)列珠の樹高さ丈ばかり稍に細氣條を出す、綠色略鳧茨の莖に似たり、其葉細く小し四月黃花をひらく、狀微菉豆の花に似て繁く莢を結ぶもまた菉豆に似たり、(大和本艸)二種と云ふ一種木の屬、是を鷹爪と云ふ一種草の屬をゐにしたと云ふ(圖書)花淺色末鋸にして鷹の爪に似たり、云々

【そ】【五月】蠶豆引　時珍曰、豆莢の狀老蠶の如し、故に名づく王禎が農書に謂らく、其蠶時始て熟す、故に名づく、八月種を下す、苗葉を生ず食ふべし、方なる莖中空にして、葉の狀匙の頭の如し、二月花をひらく蛾の形のごとし、莢の狀匙の頭の如し、二顆る蠶の形に似たり、(和漢三才圖會)其莢上に向ふ、故に空豆と云ふ

嫩き莢豆を取て食ふ、五月熟俗にす○この類、熟してこれを取收るを引と云ふ

【六月】相國寺懺法　十七日（紀事）六月十七日、洛の相國寺閣上において懺法を修す、世に閣を、懺法所と云ふ、松風の鈸、小狐の鐃、當寺の珍寶也、是古へ、佐々木氏寄附する所也と○寺中に定家卿の墓あり、但禪宗也

《つ》【四月】筑摩祭　近江國坂田郡、筑摩社、祭祀は四月朔日、或は初午日云々（神社啓蒙）祭る所御食津神、文德實錄曰、仁壽二年三月甲戌、近江國筑摩神に從五位下を授く、按に、筑摩の庄は大膳職の御厨の地也、故に當職祭所の神を以て、此地に祠るか蓋この神は稻食を掌るに依て、里女婚をなすときは、祭禮に必釜鍋を戴て神に奉ず不幸にして少壯の間に孀となるときは、やむことをえず、改て嫁し、再び嫁する者は、二枚を用ひ、三たび嫁するものは三枚を用ひて、神幸の後に候する也、中世、業平の花詞にならひて、里婦笑靨を鬻きて數枚を重ぬ、艶態の故の爲なり、固に苦胡すべき也、（雜和集）俊頼曰、近江國つくまの明神と申神おはします、其神の御誓にて、女の男したる數にしたがひて、鍋をつくりてその祭の日奉る也、男あまたしたる人は、見ぐるしがりて、少し奉りなどしつれば、物のあしくてやみなどして、あしければ、數のごとくして、祈ればなほりなどする也

燕の子　委くは春ノ部、燕の條にてみる可し

王孫花　（名醫別錄）王孫は、海西川谷及ひ、汝南の城廓の垣下に生ず○無膽が曰、王孫和名有うへは、往昔本朝に有る明らけし、今識者無し惜哉特に無毒の草にして療病の功最大也、○今本邦の里俗、王孫花と稱する者は證としがたし

〔兼三夏物〕津波須　（和漢三才圖會）鰤の小なるもの、五六寸の時を津波須と名付、西國にては和加奈と號、九月尺許なるものを眼白と名く、十月二尺に近きものを鰤と名く、江東には伊奈太と稱す、仲冬長三四尺ばかりなるものを鰤と名づく、云々

釣瓶鮨　（毛吹草）和州吉野の釣瓶鮨は、曲物に入、藤にて手を付る、其形釣瓶の如し、故に呼也或說此鮓は、鮎を取て鮓となし、此曲物に入て吉野川の水中へ沈め置て熟する期有りて出す故に、云ふよし侍り

月夜　（雍州府志）飯ずしの一名を月夜と云ふ、六條家に之を製す○異名を月夜と云は其飯の精白を云ふにや

【五月】黴雨、墜栗花穴　さノ部、五月雨の條に注す

辻が花　貞德曰、つゝじが花と云ふこと也、赤き帷子のことなれば、夏也、（犬追物秘傳抄）後土御門院寬正六年八月、將軍慈照院殿犬追物見物、云々射手の裝束の日記云ふ、紅入ざる辻が花の白帷子、云々しかれば、紅染にも揭はらざるか

【六月】月次祭　十一日（公事根源）これは六月十二月、年に二度諸社へ御幣を奉らせ給ふこと也、弘仁年中に始る

津島祭　十四日十五日○牛頭天王の祭也、尾張國海部郡、門間の庄、藤波の里に有り（社家傳習記）欽明天皇元年、これを崇め祭る、天王始め西海の對馬に降る、後に尾張の海部に移る、仍て其舊地の名を表して津島と號す、嵯峨天皇の御宇、其祠を立つ、始の祠は、柏森に有り後居森の地に移し、更に祠を今の地に移す、（神祭記）當社夏祭は、この神島に鎭座の後、神民の夏日に堪ざるを暗にあはれみ給ひ、避暑の爲とて、宵祭より第一に諭しをしへ給ひて、船の上の樂には殊に車樂一成の舞曲、妙音の笛聲、別調を神製し給ひしより、この樂の一成を車樂舞、津島笛と呼初めける、世に車樂の說、舊尻大隅と云ふものを十一黨の武士、計策を以て討取たるより起る由いへれども、社說是を

否して、前說を用ふ、六月二日試樂あり、八日に町毎の車屋にて調樂し、十三日汀口に於て晴の試樂有り、十四日の宵祭、十五日の朝祭、是を黒俗打舞°と云ふ、車樂船上の挑灯、すべて三百六十箇は、一歳の日數に象り、眞柱の挑灯十二箇は月の數也、高欄四方の灯籠三十箇は一月の數也、宵祭を左奇觀として、又翌日昧爽の祭もあり、この時市腰車を先とし、津島の車樂山車その前後に轉輪して、五村前後を論ぜず五村は、米座塘下、筏場、今の市場、下樋是也、社地前に大河あり岐蛆川の末にして、其中數町に及ぶ、大河に大船をうかべ、數千の挑灯を釣る、其影水に映じて恰も星の如し、○蘆の神輿、（社家注進記）每年御葦の神事と云ふこと有り、國中の疫疾變異等を卜す、云々津島社記、神祭式等に蘆の御輿のことみえず、社說に御蘆に神事あり、何年六月十五日の夜、神主これを行なふ、極て深秘とす、しかれども、その爲る處を見るときは、六月祓の餘風にして牛頭天王の修法にあらずと、ある物にしるせり、舊記に云ふ、神翁一人葦の葉に乘じて浮來り、その名をみづから名のる、後に馬津の居森の窟を栖とし給ふ、これらの神緣によりて蘆の神輿と稱するにや

露涼し　露は秋尤多し、故に連俳通じて秋とす、しかれども夏も又あり、故に露涼しといひて夏季とす

釣鐘草　（わくがせわ）花紫色、下にたれて鐘を釣れるに似たり、又白花淡紫のものあり、葉は牡丹のごとし

《ね》【四月】練供養

（紀事）十三日より十四日に至りて、大和國當麻寺にて法會を修す、十四日練供養有り僕射拱佩の女、中將姫の忌日也、中將姫、尼となりて、善心尼法如と云ふ、（練供養緣起）この來迎引接の法事は、惠心僧都なしおき給ふ、この僧都は、和州の良福壽村の人也、雍樂の後、永觀中、叡山にてこの法會をはじめ給ふ、其後當寺護念院、木は紫雲庵とて、法如尼草菴の舊跡也、弘元年の比、僧都幷に寬印と、もに、此處に來り、木尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二年四月十四日、法如の往生の日を以て、迎接會を修し給ふ、是則橫川の花臺院よりうつす處也、○一說に、四月十四日は、惠心僧都はじめて法會を修し給ひし日なりと云ふ

〔兼三夏物〕根芋

（和漢三才圖會）蕷、和名伊毛加良、一に云ふ、伊毛之、俗云、須伊木○俗に根芋と稱するはずいき也

【五月】合歡花

（神農經）合歡（ゴウクワンカリ）蠲（ケンレ）忿（フンヲ）憤（イキドホリ）萱草（ワスレグサ）忘（ワスレ）憂（ウレヒヲ）、○藏器曰、其葉暮に至て卽ち合ふ故に合昏と云ふ、（和漢三才圖會）五年花ひらく、其花、上半は白、下半は肉紅也、散垂して糸の如し、云々（和名抄）禰布里乃木（萬葉）になびきねぶともよめり、又（新六帖）にかうかの花ともよみたり

貙狩

照射、火串、獸狩、（わくがせわ）これみな獸狩にて、夏季也、○ともしは鹿を射る也、闇なる夜、山の木かけに篝を燒、或は小炬を串につけてさす、是を火串といふ、妻戀る鹿、火影につきて寄り來り、牝牡目を見合火にてらされて、鹿の目のきら〳〵とみゆるを、的にして射取る也、哥にも、見合す鹿とよめり、又さつ男のねらひともよみますらをの待とはしらでともつなねたり云々

【六月】練雲雀

雲雀鷹○凡六月毛をかへて舊をあらたむ、俗呼て練雲雀と稱す、毛をかふるとき、其飛こと速かならず、故に鷹を放てこれを捕ふ、これを雲雀鷹と云ふ、○定家卿鷹三百首の內、河內女が手引の哀のねり雲雀一とより鷹をあはせてしかな○或說に、練雲雀といふは、音人雲雀の略語なり、云々

《な》【四月】夏羽織

單、あるひは羅等近來の俗服也

中山祭

中の酉日（神社啓蒙）京三條猪熊の邊にあり、祭る神、豐石竹奇石竹命、（明德記）今六角堂の南、猪熊の東に遷座あり、石上寺と云

ふ、（彙邦百首抄二條大宮岩神に付たまふ、中山大明神と申は、是三井寺北の院にまします、新羅明神これ也（素藁烏帶）（公事根源）永承五年六月十六日、神社を建立し、同六年十一月八日に從三位の神位を授奉らる、後冷泉院天喜元年四月よりはじめて官幣を奉らる、云々是四月の中の酉日にや、三井寺において、五月五日新宮祭を修す、是新羅明神の祭なり

夏木立、夏草　（元帝纂要）夏草ヲ曰ニ茂草ト一木ヲ曰ニ蔚林ト茂林ト〇いづれも、新綠おひしけりたるさまを哥にもよむ也

名取草　牡丹の一名也、（藻鹽艸）昔、ある女、この花を愛して多くふおきて、晝は終日ながめ、夜はよもすがら風に損ふべきことをなけきけるによりて男、他の心ありとて、離別しけり、とがなきよし聞ひらきて、元のごとくすみけるとなん、仍ていへり、（藏玉）折人の心なしとや名取草花みるときわとがもすくなし

生節　（常陸國誌）一人墳水を用て、蒸乾し肺とす、味生よりも美也、俗に醫師と云ふ、毒なし、〇醫師の、いまだなま〳〵しくて枯ざるを云ふ、〇江戸にては、なまりぶしと云ふ也

茄子花　時珍曰、夏より秋に至て、紫花をひらく五瓣相連り五稜纔の如し、黃蕊綠蒂其茄を包む、云々

〔兼三夏ノ一物〕蚰蜒　（說文）附嬴は、皆殼を負ふ蝸牛といふ、殼なきを蚰蜒と云ふ

夏月　明やすきさま、涼しきさまなど、餘情によむべし

夏の霜　（朗詠）月照ニ平砂ノ一夏夜霜云々この詩より、夏の月影を霜に見たて、哥にもよめり

夏雨　五月雨も夕立もおしこめていへば夏の雨ながら、各一種の景物となりたれば、たゞ夏の雨と云ふときは、其けちめをたて、常の雨の趣に夏季のあへしらひあるべきなり、

夏夜　明やすく、みじかきさま第一なり

夏野　百草の茂れるさま專要也、〇秣刈人をしをりの夏野哉　翁

夏山　（郭熙畫譜）夏山ハ蒼翠如レ滴

夏虫　身をこがすと云ふ、卽火蛾の事也、また螢をも、古哥に夏むしとよみたり

夏野の鹿　（宗祇抄）夏野の鹿は、角生初て、短くして、一束ばかりなるをいふ、（萬葉）夏鬱去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎志而念哉　柿本人麿

【五月】永根　和哥に、なかきとよめるは、あやめの事也、根の永きものにて、永承六年五月五日に、あやめの根合と云ふ事あり、其式、哥合せの儀のごとし、左の根、一丈一尺、右の根、一丈二尺のよし、古今著聞集にみえたり、是は後冷泉院の御時也、又郁芳門院の根合なと云ことも、八雲御抄にものせ給ふ

苗　たノ部、田植の條に出づ

南天花　時珍曰五月小白花をひらく、（和漢三才圖會）譜に、闔天竹と名く、其葉儼にして、竹に似たり、子を生じ穗をなす、紅なること丹砂の如し、久しく經るといへども、脫すこれを庭中に植れば、火災を避べし、甚驗あり、近頃白子の南天燭を出す、以て珍しとす、凡此樹長じがたしといへども、山陽の地に大木あり、作州、土州の山に、長さ二丈餘、周り一尺二三寸なるもの有り、枕に作る俗に郎鄂の枕と云ふ（本艸綱目）南燭、また文燭と名づく

瞿麥　常夏（和名抄）瞿麥（和名奇天之古一名止古奈豆）（草花譜）瞿麥、

纍纍なるものを石竹と名づく千瓣なるものを洛陽花と名づく、（蘇頌）苗高さ一尺ばかり、葉尖り小く青く、根は紫黒色、形ち細蔓菁の如し花紅紫赤色、五月に至て開き、七月に實を結ぶ、○大和撫子、唐撫子川原撫子、鷲撫子、藤撫子、等の種有り（榮雅抄）花の姿ちひさやかにうつくしく、色々咲けば、をさなき名、子にたとへて、撫子と云ふ、又盛久しければ常夏といへり、唐撫子は、色々の品あり、大和撫子は紅梅色也、云々鷲撫子は、花の形によりて名とし、藤撫子は、色によりての名なるべし、○石竹、（和漢三才圖會）雅麥卻ち石竹也、今以て二種とす、共に葩の周圍に刻齒ありて切叉あり、剪紅紗に似たるもの翟麥とし、切叉なきものを石竹とす、○から國にありけることはいざしらずあつまのおくにおふるいしたけ　俊頼

夏菊　（本草）菊に、夏菊、秋菊、冬菊の分ちあり、（菊譜）引花史云、四月に開くものあり、張孝祥賞て詩あり、五月に開くものあり、陳子高賞て詩あり、六月に開く者、符離王常詞あり、秋冬に開くものを以て貴としとすべし、夏ひらくものを次とす、云々

生胡桃　（博物志）張騫西域に使してかへるに、胡桃の種を得たり、（本草）此果外に青皮肉ありて、これを包む、其形ち桃の如し、胡桃はすなはち其核也樹の高さ丈許、春初て葉を生ず、長四五寸兩々相對す、三月花を開く、栗の花の如し實を結

茄子　（釋氏切韻）茄、一名紫瓜子、（杜寶拾遺錄）隋煬帝、茄を改て崑崙紫瓜と云ふ、（多識篇）水茄（今按奈加奈寸比）○谷茄黃山谷か曰、茄の老たるもの子堅し、谷の如し、穀子茄と名く（谷と穀と音通す）○白茄子、時珍か曰、銀茄と名づく、云々

【六月】撫物　かノ部、形代の條に出す

名越祓　（神祇令）名越祓とは、名は、夏の略語にて、夏越の祓也、言こゝろは、不祥を解除、夏を越し、千秋に至らんとするの意なり、（八雲御抄）名越と云ふ事は、あらゆる邪神をなごむる故也、」此說にしたがふべし、神を和す祓と云ふ義也、○荒和祓、これも同じこと也、（公事根源節折式）晦日の夜御贖物まゐる、荒節和節の御裝束、云々）此次第（江次第）等にくはし、よノ部、節折の條、見合すべし、○夏祓、名越祓と云ふは、惣名也、荒和の祓節折は天子の御祓に云ふ也、大祓は百官の祓也、を部、大祓の條にいへるがごとし、○御祓大祓形代、小蠅聲神、茅の輪、麁葉流、祓草等、おの〳〵頭字の部に分ち人たるをみるべし、（古今六帖）みな月のなごしの祓する人は千と世の命のふといふなり、讀人不知

夏祓　夕祓夏祓夕祓とは、其時節時刻をさして云ふ也、祓除はいつもあるもの故、夏祓と云ひて季を定め、夕祓も、夏の夕方涼風を得て修する體、和歌にも讀たり、云々

夏神樂　川社（奥儀抄）川社の事、さま〴〵に申めれど皆ひがこと也是は夏神樂のことなり、神樂は冬することを、おのづから俤なることにて、夏なれどする時はきよき川のほとりにてする也、河の瀨に榊一本を立てそれを柱にし、篠竹を棚にかきて、それに神具を備ふ、是を川社と云ふ○俊頼朝臣曰、河社の事、知人なしたゞおしはかるなるべし、人の申は水の上に社を祝ひて、夏は神樂する也、（川社）河社おなじく夏神樂の事、昔より此道の先達、あま〴〵にいへる事也、只古きものを見て心得べし、貫之集第四、夏はらへ、『川社しのにおりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらん、又云ふ、天慶四年三月うちの御屏風のれうの歌、夏かぐら、『行水の上にはへる川やしろかはなみたかくあそぶなるかな、初の哥、新古今集神祇の部に、延喜を御時、屏風に、夏かぐらのこゝろをよみ侍りけるとて入れり、時代はたがひたれど、まことに屏風の哥にて、夏神樂といへるはたがはず、是等に

よれば、夏ばらへの絵、神樂の絵の所に川社とよみたれば、六月祓の時の事也、又右二首ともに、六帖冬の部、神樂の哥に載たり、四季の閏月の哥をも、みな冬につけたる如く、類をもて、神樂に入たれともに冬の哥とするにはあらず、この六帖によれば、河社夏祓は、やがて神樂也、忠見集に云ふ、御屏風に、六月河邊に神樂する處によめる（みなかみの心ながれて行水にいとゞなごしの神樂おもしろこれもなごしのはらへをやがて夏神樂とよめるか、河社とは、延喜式、六月大祓祝詞によるに、天神地祇みな此みそぎをうけ給ひ、河の瀬にます瀬織津媛といふ、神あらゆるものを、大海原にもち出て放ち給ふよしにてこの故に、河原にて祓をするは河をやがて河社と云ふか、もしや、むかしは川中に、かりそめに社のかたを引結ひ、神供など備へて、祝詞などして後別に神樂をもしけるにや、云々匡房卿、六月盡の歌に、「川やしろ秋をあすぞとおもへばや波のしめゆふ風の涼しさ、中將資成朝臣の家の哥合に俊成卿の歌「五月雨の雲間もなきを川社いかに衣をしのにほすらん、風雅集兵部卿成實「川やしろの波こす五月雨に衣ほすてふひまやなからん、これらを、おもふに、かぎりある公事にそ、晦日にはすなれ、私の家はては便りある日にするなるべし

夏瘦　（萬葉）石麻呂吾物申す夏痩吉跡云物曾武奈伎取食（續猿蓑）夏やせも願ひのうちのひとつかな　如眞

夏引の糸　（枝折秋）夏引の糸とは麻也、なつそ同前夏引の白糸は、夏蚕の糸なり、云々

神馬藻　（下學集）神功皇后異國を攻るとき船中に馬秣なし、海中の藻を取て馬を飼、故に神馬草と名く、神馬藻を、なのりそとは神馬にはのることなかれの義、（わくかせわ）濱藻也、是ホダハラなり、名乘菜と云ふときは夏、ホダハラといふとき、正月の飾物にて、春勿論也○今按に濱藻をなのりそと云ふことのもとは日本紀允恭天皇の紀にみえたり、（重之集）ちはやふるいづしの宮の神のこまゆめなのりそよたもぞする是莫鳴菜をよめる也

菜瓜　（和漢三才圖會）本草に、菜瓜といへるものは越瓜也、菜瓜は越瓜に似て小く、背に微毛あり、六七月瓜を結ぶ、胡瓜に似て皮厚く、深青良、縦に白文有り、肉は越瓜に似たり、煮て食によろしからず、糟及び醯に藏む、硬く脆く美也、上品ならず、一種、菜瓜に似て小く鷲の卵の如きものあり、小瓜と名づく、糟につけて食ふ

奈良漬製す　（同上）糟漬の法、六月土用の中に、越瓜の青き物を採て、これを破り、蛤貝を以て核子を刮去り小舟の形とし、灰を盛ること一時ばかりにして、水濕を去り、灰を拭ひ去り、鹽を盛り、凡十（十二舟とす）酒糟三十斤を用て瓜を包み藏む、各相碎しめず、固く封す、大低七十五日にして成る

納豆造る　（同上）納豆数種あり、大低鹹鼓の法より出づ、以て酒肴とす、僧家これを重んず

夏切茶　（紀事）六月の始、宇治の茶人、新茶を新壺に盛て常に茶を賣ところの良賤の家に贈る是を夏切壺と云ふ、凡壺の蓋紙に糊して堅くこれを張り風濕をして壺の内へ入しめず、茶用ることあるときは、小刀を以て、壺◕蓋合縫の糊帒を截て茶を出す、これを壺の口を切と云ふ、冬口を開くの壺、盛夏の間處々の山林清涼の地におく故に、夏中用る所の茶、先づこれを贈る、故にこれを夏切茶と云ふ

夏ぶし　（千梅わくがせわ）に誤て鰹の生節とす（雜談抄）に鬆沸擣とす、暑中に發する小兒の頭瘡也、江戸の俗訛りて夏ほしと云ふ

夏深し　夏の別　夏後、夏の限、夏過て、夏を追、夏の果　いづれもべつ義なし

《ら》【五月】蘭湯に浴す　（大戴禮）五日斎レ蘭ヲ爲ス沐浴（楚詞）浴蘭湯ニ兮沐芳草ニ（本草）蘭は乃ち澤蘭の香草也、今の勾蘭花にはあらざるなり

《む》【四月】向日明神祭　（神社啓蒙）向日の神社は、山城國乙訓郡、西岡の澁に在り（名勝志）當社の額、正一位向日大明神と竪二行にしるす、道風の筆也と、云々西岡の民家の側に花表あり、（雍州府志）一說に、日に向ふものは月也、しかるときは月讀命を祭るものか、或は日向大明神にして、本朝人皇の祖神、神武天皇也と、いつれか是なる事をしらず○當社祭禮の以前、社人、先づ岩倉山三重院へ行て垢離をなし、又祭日必神馬を此瀧に引也、是出現の地なれば也、出現のことは、西岩倉金剛寺緣起にくはしくみえたり今これを略す

結葉　（金葉集）應徳元年四月、三條内裏にて、庭樹結レ葉ヲ、といへる事をよませ給ひける、院御製、おしなべてこずゑ青葉になりぬれば松のみどりもわかれざりけり○諸木の葉と葉と相交り結はれたるをいふなり

麥秋　（禮月令）孟夏之月麥秋至ル註に、秋は百穀成熟の期也、此時に於て夏といへども、麥においては秋也、故に麥秋と云ふ（無邊月令章句）穀は其初生を以て春とし、熟するを秋とす、故に孟夏を以て麥秋とす

麥の秋風　（夫木）御園生に黍の秋風そよめきて山時鳥しのびなく也　俊頼

麥苅　（和漢三才圖會）大小麥ともに、九十月種を下し、皆四月黃熟す其刈ことは、立春より百二十日に至るを旬とす、故に諺に云ふ、麥は百日の中に蒔べし、三日の中に刈べしと也、但し小麥は刈收るとき、大麥より遲きこと十日ばかり、麥は五穀の貴とす○二年草、年越草ともに麥の異名なり、麥は年を隔て種る故に名づくるか

麥藁笛　（同上）小麥稈厚く硬し、小兒用て笛を作り、これを吹く、これを麥わら笛と云ふ（夫木）うなるこがすさびにならすくろく夏の日ぐらし　西行

【五月】六日菖蒲　五師屋撿に賚ところの菖蒲を取て、六日に菖蒲湯となす、是五日の夜の露を受る物を用る、彼金門記にいへる神水の說によるか

室明神祭　十三日○攝州室の津に大社あり、祭る神、上賀茂に同じ例祭五月十三日、是より先、洛の上賀茂の氏人兩人播州に下向して、神事を司ると云ふ、其次第、先づ辰刻裝束帶す、巳の刻の鐘を撞て神主以下出仕す、即拜殿の座につく、御鍋を祝にわたす、社家これを役す、次に神主祝（これ賀茂の氏人なり）御戸を開く、云々氏子素襖烏帽子にて、唐戸の裏、神前の左右につく、次に神饌神酒を供ず（此間事長ければ略す）神子神樂を奏し、次に宝津の遊女棹の歌を發す、次に神主祝詞を申す、是よりさき岡、貴船、太田、若宮、の社の御饌を献拜す、云々神主祝内陣に入て、御饌を撤す、云々内陣の御幣櫃を出す、云々神船着岸の後、神主祝假宮の拜殿の座につく、兩社人御幣櫛を捧て、大床に候ず、次に渡御云々、遊女十二人、三日澄齊して、神事に出づ、内五人の男子のと姿なり、髮を剃り男髷にして金襴の社杆を着、笛二人、鼓二人、大鼓一人、殘り七人、下髮、殘一人天冠を戴きて、萌黃の水干を着し、七人ともに幣を採る、みな棹歌の役なり

【六月】虫干、虫拂　土用干　此月土用中、諸神社、諸佛寺、靈寶の畿拂をす、和俗六月土用中、天日の晴るを俟て衣服幷書籍の類これを曝す、是を涼を取と云ふ、また土用干と云ふ、また書畫衣服の蛮蟲を執棄るなり、云々

《う》【四月】卯花衣

これを着す、云々

梅宮祭　上の申(神社啓蒙)梅の宮は、山城國葛野郡、王城をさる事二里ばかりにあり、祭る神四座、相殿の神四座、酒解子の神、大若子の神小若子の神、酒解子の神○此祭今絶たり、土人わづかにこれを祭るのみ、祭の式江次第にみゆ、橘氏の祖にして、世俗妊娠の婦女、當社の破をとりて、帶襟に佩と云ふ、是檀林皇后嘉窘子の遺風也

卯花　(漢漢三才圖會)按に楊櫨數種あり、空木筥根卯木、唐空木、三ッ葉卯木、ともに山中に有り、人籬根に植るものは山空木也、みな中空なる故に、空虛木と名く、高さ丈ばかり、皮白く、肌深青、空にして、其葉圓く長し、四月小白花をひらく、簇をなす愛すべし、俗に云ふ卯花これ也○十姉妹筥根空木と訓む、花衆には、十姉妹、似てこれ京畿に多し是も卯花と云ふ也○岩木空木、同しからずといへり、岩の傍に唉たるを云にや、(千載集)俳諧哥、うの花よいでことゞゝしかけ島のなみもさこそわ岩をこえしか○異名、はつみ草、垣見草、雪見草、おの〳〵頭の假字の部にわかち入て注す

卯花くたし　(八雲得抄)うの花くたし四五月の雨也、萬葉に春されは卯花くたし、云々とよめり

茨花　(和漢三才圖會)金櫻子山林の門に叢生す、大に薔薇に類し刺有り、四月白花をひらく、夏秋實を結ぶ、黃赤色かたち小き柘榴に似て長し、云々

夏枯草　時珍が曰、原野に多し、苗の高さ一二尺ばかり、其葉微方也葉節に對して生ず、細齒あり背白く莖の端に穗を作す、長一二寸、穗の中に淡紫の小花をひらく、三四月花をひらき實を結ぶ亦穗を作す、五月便ち枯(和漢三才圖會)夏枯草、穗の形矢筒の靭のごとし、故に俗

字豆保草と云ふ、和名字流木是也

鷸實　(和名抄)鷸實(和名阿字之實、一に云ふ、宇久比須乃岐乃美、今案所出未詳)(大和本草)吉利子樹和名宇久比すといふ、所々山林にあり、小木也、葉は山躑躅に似て兩々相對す、臘月より諸木にさきだちて生ず、三月に小花さき、四月に實熟す、兩々相對して、葉の莖より內に有り、葉の莖の本よゞ異の莖生ず、異物也、鶯の始て鳴ときに、此花さく故に名とせしにや、京畿にて臼の木と云ふ、その實の形臼のごとく、上に窪みあり、百草の先がけ也、秋は紅葉して落つ、立花の下草にする也

童子鳥　ほとゝぎすの異名、(灌頂口傳)この鳥冬は、深山の木のうつろに住、かしらの毛みな落て、小童の髮のごとし

〔兼三夏ノ物〕團扇　(五雜俎)大明以前摺扇なし、多く團扇を用ふ(和漢三才圖會)方扇(俗に唐宇知波)騎に似て物を打べく、故に宇知波と稱す(和漢文操)(支考著)園贊の序に、うちはと云ふ和訓は、いかなる故ともしりかたし、さるを俳諧の書には團の一字をも用ひ來れり、云々

宇治丸　(毛吹草)城州宇治の鱒鮨是を宇治丸といふ

鵜飼、鵜舟、鵜繩、鵜遣、鵜匠　(和漢三才圖會)鷀邊(和名之萬豆止利)按に和名抄云ふ、大なるを鷀鷉と云ふ(日本紀私記、志萬豆止利)小なるを鵜胡と云ふ(俗云宇)○弘景か曰、此鳥、卵を生ず、口に其雛を吐○岐阜、長良の鵜飼、六月避暑納涼の爲に、近國より來て見物す、所謂上川七艘下川七艘、合て舟數十四艘長良の渡より小瀨の渡まで三里の間を上川と云ふ、長良より川下三里を下川と云ふ上川の鮎を上品とす、舟一艘に鵜十二羽、鵜遣一人、舳當一人也、舟の舳先に鐵網を下し、篝火を焚き、十二の鵜の繩を左の手の指の股にわかち持也、鵜の魚を追ふにしたがひ

その繩もつれて次第をわけがたし、その時、直なる繩を、もつれたるとぬきかへ持かふれば、もつれたる繩おのづから解て、帶る事なし、さて鮎を十分に呑たる鵜は、船ばたにあがるを、つかふもの、右の手にとらへ、魚を吐しめ、又水中へ追入るる、その手先のいそがはしきことといふへからずといへども次第を追ひて、甚だしつかにみゆ、鵜繩長さ一丈二尺、中の首に鉤を入て、腹中に入らざるやうに設る也、月の入より船をおろし、月夜の間はつかはず、腰簑を着、ちひさき笠をいたゞく、凡三四月よりはじめて、八月三十日を限とす

【五月】馬弓　きノ部、騎射の條にみるべし

宇治祭　八日○離宮の社は、山城國宇治郡宇治の里にあり、祭る所三座（宇治舊記濱千鳥）應神天皇、菟道稚郎子、仁徳天皇也、當社は、宇治の北にありて、關白綱通公、平等院建立の時、離宮を南に移し平等院に向はしめ、此寺の鎭守とす、（神社啓蒙）離宮は、祭る所の神一座藤原忠文也、按に忠文は、宇治民部卿と號す、母は息長氏の女なり、承平三年、秀鄕貞盛等、將門誅伐の功を以て、恩賞を行はるゝの日小野宮左府、忠文を以て賞列に入す、故に忠文ふかく小野宮左府を恨み遂に宇治川に沒す、其靈しばゝ〳〵祟をなして、百姓を斃す、是を以て祭て宇治の離宮と號す○兩說互に異也、この神事そのはじめ賴通公勅して、天下太平の御祈也、五月八日未の刻より九日巳の刻に至りて これを平等院にて修す、太平の御神事と云ふ、青梅莒の兩積を必ず神儛に備ふ、（雍州府志）祭の日、金銀の幣を奉る、供奉の人、金銀の幣あるを誤りて、きんかりく〳〵といふ

鶉の巢　先板の諸抄みな夏季とす、これに從ふべし、さるを年浪草によりて、ふと誤て春の部に載たれば、注は其所にてみるべし

鷺音を入　（月舍）反舌無聲、（藏器）（本神拾遺）百舌、一名反舌、今の鶯也○（醴記疏）に反舌を蝦蟇とす、未だ是非をしらず

羅　細布にて、めの細かき布、越後縮のたぐひ云々○すべて薄織の絹布をいふと心得べし

萍の花　（吳晉本草）水泮、一名鹿、葉圓く小にして、一莖一葉、根水底に入て、五月白花あり○凡荇萍の類、其花水面に開く、或は白、或は黃、五六月盛也

瓜の花　花黃也、胡瓜越瓜の類、すべてその頭字の部にてみるべし

梅漬る、梅干、梅剝　梅剝は、皮肉ともに剝掛晒し乾して、梅醃とするなり、云々

浮巢　みノ部、水鳥の巢の條に注す

蠅　（爾雅注）蠅、一名守瓜、喜んて瓜の葉を喰ふもの也、（和名抄）守瓜（宇利波閇）○和にある者又同し、其形其聲に似て、黃色なる蟲なり

うつ蟬　せノ部、蟬の條に出す

鶯の附子　（貞享式）此式は例の當川也、今按るに、鶯の子は春巢立て、夏侗へば、六月の間に毛を替て、冬至のころ鳴習ふゆゑに鶯の子に鳴の字を結びて冬季とはなる也、しかれば、夏は間習にて或は引鳥の親に附、或は笛を以て引音を教、稽古は夏の間なれば、附子は決して夏といひ、笛を結びても夏としるべし

【六月】打水　（五元集）水うてや蟬も雀もぬる、ほど　其角

《ね》　いノ部に併出す

《の》【四月】殘花　（貞享式）此詞には古今の論あり、しかれども殘の字は其季より此季に殘らねば、殘るといへる道理なし、花はもとより春に決して、殘るは夏と定むべし、云々

〔兼三三夏ノ物〕蚤　（和漢三才圖會）赤色、肥たる身、小き脊、六足

にして能跳る、夏日人家の濕熱の氣より生ず、おのづから牝牡有り○きられたる夢はまことか蚤の痕　其角

【五月】幟　かノ部、飾冑の條に出す

【六月】凌霄花　時珍が曰、紫葳、一名凌霄、俗に赤艶なるをいひて紫葳と云ふ、此花赤艶故に名づく、木に附て上り、高さ數丈、故に凌霄と云ふ、年久しきもの藤大にして林の如し、春始て枝を生ず、一枝數葉尖り長くして、齒あり、深青色、夏より秋に至て花をひらく、一枝十餘朶、大さ牽牛花の如し、頂に五瓣をひらく、赤黄色、細點有り、秋深く更に赤し、八月莢を結ぶ、豆の莢のごとし、長さ二三寸許り

《お》　をの部に併せ出す

《く》【四月】久世祭　中の巳但し巳二つあれば初巳○山城國乙訓町久世の神社、上久我の民屋二町ばかりあり、巳菱妻明神と號す(三代實錄)貞觀八年八月十四日、丙戌、山城國正六位上興我萬代禮神に授二從五位下一

關白賀茂詣　中の申(公事公源)初度には、日次をえらみて此事あり、圓融院天祿二年九月廿六日、攝政右大臣謙德公、かも詣のことあり、是攝關の人の賀茂詣のはじめなるべきに、此事は必ず賀茂祭の前の日あること也、主人は乘車にて、地下殿上の前駈あり、白妙の御幣、神寶の唐櫃やうの物をかたげもたしむ、琴持菅笠深沓と云ふものをめしぐす、上達部軒をつらぬ、社頭にて神拜あり、葵桂を禰宜もちてまゐれば、冠にかく、東遊、求子、駿州舞などあり○菅笠擔、賀茂詣行列の中に、大きなる菅笠を擔ひて渡るを云ふ

國祭　山城國賀茂の祭也、(公事根源)三十代欽明天皇の御宇、四月に吉日をえらびてまつらるゝよし所見あり、又和銅に詔ありて、國司これを檢察す、とみえたり、けふの國祭は、賀茂の本祭なるべきにや、酉の日の祭は公家より使を立られ、走馬を献ぜらる、相かはるべきにや(岷江人楚)賀茂太神は、山城國の地主神にてましませば、中の申の日は國より奉る祭也、中の酉の日は內裡よりの祭也、昔物がたりに多く書たるは中の酉の日也

灌佛　ふノ部、佛生會の條に出づ

草茂る　(元帝纂要)夏草を茂草と云ふ(字彙)茂は、艸の豐盛の貌

草の王　(大和本草)葉は菊に似て大なり、一葉ことに五つに分れたる內に岐あり、四月花をひらく、俗に草の王と云ふ

乳柑の花　(和漢三才圖會)葉橙に似て長し、云々○花もまた橙に似たり

沓手鳥　(新撰萬葉)郭公鳴立春之山邊庭沓直不輸人哉住濫○くつてどりは時鳥の異名也、此鳥前生に沓を作て賣けり、百舌鳥これを買て、價をはらはず、故に百舌鳥は、此鳥の來るときは、木の下竹の中にかくれて見えぬと也、是古き諺なるべし

勸農鳥　これも杜鵑の一名なり、此鳥農業を催さんため、四五月に來り、田をつくらばはやくつくれ時すぎぬればみのらずと鳴といへり、故に名づく

倶伎羅　契沖の說に、くらきは時鳥の梵語なりと云へり○としのはにきゝふりわたる聲なれと猶めづらしく鳴くきら哉　遍昭

蜘の子　時珍が曰、按に王安石字說に云ふ、一面の網を設け物觸て後これを誅す誅議をしるもの也、故に蜘蛛といふ○璧錢蟷蟷蛸蛸絡新婦の數品あり、皆初夏に子を生す恰も罌粟子の如し(藻鹽草)蜘の子は生れ出て風にふかれてちり〴〵にわかるゝよしいへり(新撰六帖)おなじ世にうまれあひても蜘の子のちり〴〵にこそまたわからめを、衣笠

内大臣

【五月】薬玉　五年の玉（天暦御記）延喜十三年五月五日、丙午糸所より薬玉を供奉すること常の如し、去年の九年の茱萸を撒して、薬玉を以て懸替、御杜の前に着る例なり、（枕草紙）五年五日には、縫殿より御薬玉とて、いろ〳〵の糸を組さけてまるらすれば、御几帳奉る、もやの柱の左右に付たり云々（世諺問答）諸病必五月におこる、故に遣ふ薬玉を五色の糸にて調へてひぢにかくれば悪気をはらふと申本文侍るにや（雲州消息）今朝或處より薬玉一流を給ふ、作るに百草の花を以てし、貫くに五色の縷を以てす、草蟲の形を摸して其花房に栖しむ、芳鮮の美興ある感あり、古人の云ふ續命縷を懸る時は人命を益す、云々、ちの部長命縷の條かよはし見るべし

薬日　薬草摘、薬狩、競馬（世諺問答）五月五日を薬日といひて、この日一切の薬草をとるなり（荊楚記）の日雑薬を競ひ採る夏の小正に云ふ薬を蓄て以て毒氣を止除す（宗祇抄）きそひかりすとは、四五月に薬狩とてする也

萱草花　忘草時珍曰、萱本護に作る護は忘なり、詩に憂思不レ能二自ラ遣一、故二欲レ樹二此草一玩味一以忘上憂ヲ也、吳人これを療愁といふ、其葉蒜、恭の葉の如くにして柔弱なり、新舊相代りて四時青翠なり、五月莖を抽んで花をひらく六出四垂朝に開暮に萬む、秋深に至てすなはち盡く、其花紅黄紫の三色あり、李九華が延壽書に云ふ嫩苗を蔬として食へば風を動し人をして昏然と醉るがごとくならしむ、因て忘憂と名づく此も又一説なり、（浦輔奥儀抄）忘草萱草をいふなり、兼名苑には忘憂艸とかけり（大和本草）諸説を引て、本邦の萱草にあらず、然とも五月莖を抽んで、六出四垂といへるは、花の形相似たるものなり一種朝鮮萱草あり、葉冬も枯ず其花紅黄色なり時珍か説に似たり

雲見草　椹の異名○古哥、山遠き軒端にかゝる雲見草、雨とはならでそらぞくれぬる

栗の花　（蘇頌圖經）栗の木の高さ二三丈、葉極めて櫟に類す四月花を開く青黄色條、長にして胡桃の花に似たり

山梔子の花　時珍曰、巵は酒器なり、巵子これに象る、故に名づく俗に梔に作る、佛書に其花を稱して禽蔔とす、謝霊運これを林簡といふ、葉兎の耳の如く厚くして深綠也春桑秋瘁ふ夏に入て花を開く、酒盃の如し、白き蘂黄の蕊あり

車百合　（和漢三才圖會）葉略瀾く對生して車輪の如し、故に車百合と云ふ、其花纔卷轉、横に垂る下野日光山、和州大峯の産、各異色あり

黒百合　（同上）花に黒色のもの絶てなし、惟紺色愛すべし、本奥州より出つ

桑實　（同上）桑は蠶を養ふの地多くこれを栽、實のらざるものあり、俗に男桑といふ、其桑の樹は初青く白く漸く赤色、黒く熟し、味ひ甜く其木堅實にして黄白の色なり

水雞　（同上）竜鳥和名久比奈、按るに大さ鳩の如くにして、頭背翅皆蒼黒の斑あり、淡黄赤色を帶、眼の上に白き條あり、鶏蒼くして長く頸、胸の間白うして黒白の斑あり、尾短く脚長く淡黄なり、夜鳴て且に逢聲人の戸を敲くが如し、蓋水邊に在り、晨を告ぐ故に水雞と名づく（本草）多く田澤の畔に居る夏至の後より夜鳴て秋後即やむ

黒鴨　（仙覺萬葉抄）黒鴨一名なるといふわ、鴨のたぐひなり、田舎の人は黒鴨といふ（和漢三才圖會）輕鴨全體黒色、頸の後に青色を帶、光あり、眼の上に淡白の條あり、嘴黒くして啄端淡赤く白色にして黒

く縦の紋一條あり、脚掌ともに赤し

黒はえ、白はえ　梅雨中の空合をいふ也、譬ばかきくらして今も小雨ふりながら折々はれんとするけしきあるを黒はえといひ、又に暮かゝる空の一しきり晴てあかくなるを夕はえといふこゝろなるべし

【六月】鞍馬の竹切　廿日（親長卿記）文明三年六月廿日、今日鞍馬竹切也、夜に入て護法の儀あり、云々今に至て今月今日これを修す（紀事）峯延鞍馬寺の主となる、夏五月讓摩を修す、日中大蛇北の峯より來る峯延毘沙門の呪を誦す蛇おのづから斬て段々となる、此寺の本願人、藤原の伊勢人、禁闕に奏して、役夫五十人を發し、かの蛇を靜原山に弁俗其地を呼んで、大蟲の峯といふ、今に至りて毎年六月廿日村民藥師堂にあつまり、大竹を縛り立て、又別に竹二本を堂の中間に縛り横たへ、法師廿四人餘白き袴を着し、山刀を佩、庭上に出て、一本の竹を近江と稱し、一本の竹を丹波と稱し、法師各十人、左右に別れ、同時に聲を揚、奔走して、山刀を以てこれを截る、其遲速により兩國の豐凶を占ふ、速なるものを豐を得たりといふ、しかして後その竹を以、毘沙門堂の前に來りて、又段々にこれを截る、これを竹切といふ、是峯延蛇を斬の遺意なり、又夜に入て、寺僧各毘沙門堂にあつまり、其側に僧達中間に一人を置、各肝膽を凝してこれを祈る、件の一人忽に倒れ臥し、しばらくして蘇生す、是疫鬼を拂ふ法也、僧達は寺僧の外下輩なるものといふ（緣起）松提寺鑑禎和尚、寶龜中に居をこゝにトす、雌雄の大蛇あり、鑑禎持念す、一蛇忽ち死す、禎一蛇に謂て曰、此山水乏し、水を施すべしと、蛇誓ひて去、俄にして清泉涌出す、今の閼伽井是也（寺說）竹切の事、具には蓮花會といふ、是中興開山峯延和尚、呪法を以て蛇を斬の遺意にして、峯延の遠忌會なり、夜の護法は開山鑑禎和尚の一蛇を救ひ、護法神となせし遺意也と云ふ

雪の峰　（杜詩）奇峯突兀火雲昇る（陶潛詩）夏雲多二奇峯一（夫木）六月になりぬとみえて大そらに、あやしき峯の雲のいろかな　衣笠内大臣

薫衣香　かの部、掛香の條みる可

葛水　（大和本草）葛の粉、夏月冷水に入かきたてゝ飲む、よく渴を解胃を傷らず、功尤多し

葛の花　蘇頌か曰葛は春苗を生し藤を引蔓一二丈（和漢三才圖會）花豆の花に似て大きく、實もまた黄色豆の莢の如し

海月取　（崔禹錫食經）海月一名水母貌ち月の海中に在に似たり、故に名く、云々（滑稽雜談）泥海に生ず、故に備前筑前等より、多く此月取て槲の葉を多く冪て、海月の肉を包み、鹽を用ひず、只葉を以て淹藏する也

霍亂　（傷寒論集成）正珍云ふ、夫霍亂の病は、夏月暑時、飲食過度の致す所胃中擾亂、上吐し下瀉する者是也、霍と臛と古字通用、說文に云ふ臛は肉羹也、大低人の食の爲に傷るゝ所、肉食居多、故に特臛を擧て一應食物を統る也、凡人其嗜欲する所皆これを亂と云ふ○青藍云ふ、俳諧歲時記に、先板の諸抄香需散霍亂等を六月の季に出といへどもあへて、風流に益なければ今これをせずといへり、愚按するに先板の諸抄これを出せるは、皆附句去嫌ひの用あればなり（炭俵集）（附句）息吹かへす霍亂の針　其角

（や）【四月】山科祭　上の巳○社は勸修寺の南の境内、往還路傍の水の邊にあり、祭る所醍醐帝の外祖、宮路氏夫婦の靈神にして、勸修寺家の祖なり、寛平十年より祭はしまりて、官幣ありしが、今絶て

貝神饌を供するのみ、今土人宮路氏の社と八幡の社と合せて本居神と
し、九月廿七日これを祭る、是を勸修寺祭といふ、今の世に山科祭と
いふは、北山科諸羽明神祭なり、九月九日祭禮なり、神體は大已貴太玉
の二神にして、本朝、補翼の神也

八瀬祭　上の〇八王子天滿宮兩社の祭なり、天滿宮の宮は愛宕郡矢脊
の里辰にあり、八王子の社は、天滿宮の巽二町ばかりの山腹にあり、
傳へいふ、嘗家少年の時、比叡山法性坊の宰に入て學文す、その往來
休息の處に、後人社を建、土人祭の日大竹を切て、その枝に五色の扇
挑灯等を釣り提て囃しながら持ありくなり、其唱哥俚語方言を以いふ
一興あり、矢脊一村凡百軒ばかり、父老或は上たる人をの〳〵と云ふ、
又吾をさしてけらといふ、此俚語も亦他に出ざるもの也

山崎日の使　三日（名勝志）八幡宮寺中讃岐に云ふ、日の使、四月
三日、是也、御萬代の勤役なり、山崎より辨備す、云々晩陰に及て日
の使あり、相列り山崎の孤村より來る、儀式京洛の大臣に同じ、主人
冠に紫藤をかけ、無男の巾子に櫻を挿む、彼等馬に騎ながら、二度神
庭を廻りて下馬せしめ、一面に御殿に相對し、再拜して衣の袖を刷ろ
ふ（神事記）日の使は八幡宮第一の神事也、治承三年まで、猶勅使の義
あり、同四年兵亂によりて退轉す、芹寶瓦屋關戸の院勅裁を申下し、
在地の神人これを勤む、しかる間交野の土民、御先の役たり彌陀寺と
號す、白杖を捧て鳥羽木津より出る者、年頭馬長なり、神巫舞人、次
第司、藏人司、先行す、色掌人笛を吹鼓を打、又細男といふ二つの人
形あり、これ武内高良の神也とそ、此祭も今絶たるにや〇明月記に建
仁二年四月三日、山崎の民家悉く繹營す、每年祭禮あり、その道に
橋を渡す、播磨大路より八幡に參ると見えたれば、往昔此祭に山崎よ
り八幡の山下まで、大河に橋を渡すと也、今の橋未其遺跡なり、此使
を勤るを日の郷と稱し、其人を日の長者と云ふ、一鄉の上首とす、其

齋を長者衆と云ふ、究めて豪富の輩なるべし

山崎祭　八日（雍州府志）山城國離宮八幡の傍にある、祭る所大山祇
の命也（延喜式）山城國酒解の神社一座、注に云ふ亦山崎の神と號す、
（同書）山城國と攝津國との境小疫神を祭ると云々、此社か（山州名跡
志）天神八王神の社、大山崎、北の山にあり、祭る所素盞嗚の命の御
子、八王子、今土人本居神とす〇（俳諧歲時記）今日此使に童使といふ
ことあり、今式に日の使の所に記は誤也、明月記に云ふ建仁二年四月
八日午刻、水無瀨殿に參上す、未の刻出御、この邊の辻祭二社（天王
社酒解社）御前を渡さる、その中一方頗る田樂等の供奉副ふ、土民等
此事を營む、云々これをもて思ふに、土人山崎の神と、武塔天神（牛
頭天皇）とを合して祭るものか

竹數　洛東三十三間堂蓮華王院といふいにしへの得長壽院の遺也、同
所の池の中杜若を、觀肚とす、凡此所の矢數每年四五月永日のうち、
晴天を候ひてなす、射人堂前に居て、今日の昏より翌日の暮に至て、
通す所の矢數、他に超過するを天下一とす

山苣の花　（和漢三才圖會）賣子木今知佐の木といふ、處々山中に
あり、高きもの二三丈徑一二尺、皮粉青白色、老るときは淺褐色、中
心白く、其葉梅嫌木の葉に似たり、長く尖りて二寸ばかり、面青く脊
淡し、冬凋み春生す、三四月花をひらく、碑すして小く、白く單瓣な
り、野梅の花に似たり、朶梢長く垂る、大朶を作さず、但し每二三蕾
生のみ、實を結ぶ、狀小連子の如し、初め青く後黑し、堅くして肉白
色（滑稽雜談）此葉榮類の苣に似たれば名づくといへり云々（新撰六帖）
我として人めまれらにおもふらし白雲ふかき山ちさのはな

數椿　（蘇頌圖經）女貞山海經に云ふ、泰山に貞木多しといふ、是なり
其葉狗骨及冬青に似て、冬を淩ぎて凋まず、五月細花を開く、青白色

九月實なる（倭名抄）女貞（和名太豆乃木又比女都波木）（和漢三才圖會）女貞木の葉海石榴に似て鋸齒なし、故に姫海石榴と名くと云々、俗に是を藪椿といふ、然るに野椿の藪に咲おくれて、初夏の頃花あるものをいふならんといへる（わくかせわ）の說はわろし

〔兼三夏物〕魚簗　魚簗とばかりいへば夏なり、上り簗を春とし、下り簗を秋とす、されども連句にて、其季に連る時は上下の斷りに及ず、三季に用ふと、貞享式にいへり

【五月】山田の御ン田扇　廿八日、是は伊勢山田太神宮の御田植なり（今式）太神宮の寶前にて、神事修行の扇あり、是を御田扇といふ是を以て田を扇ぐ風情をなす、蟲を生ずる患なしといふ、產婦も又この扇を求て、相向ふ所の柱にかくれば、極て產安しとぞ、是蟲の障なきいひなるべし○五月廿八日といへども日定らず、下旬に日をえらみて是を行ふ、當日禰宜數輩、御子羅子これを勤む、神田は高食山とて俗に天の岩戸といふ所の東の麓、豐宮崎にあり、件の人々此所に至り御子羅子早苗を植るまねびをなす、神人祓を修す、太神宮の一の鳥居にて神樂唄をうたひ、笛太鼓にて舞ふ、長官は乘輿、稱宜は騎馬、御子羅子は雍樹にて、高倉山をすぎて鳥居の所に至る、素袍を着たる者長さ六尺ばかりの大扇を捧て、參詣の諸人に戴かしむ、又一說に、丸山といふ所の土人六人、女の形となり、伊達染の帷子を着、赤き襷をかけ、烏帽子をいたゞき、黑塗の棒をふり廻し、扇にてあふぎまふ、內宮外宮ともに同じ、しかれども、山田の名世に高し、其扇を摸して參詣の諸人に與ふ、內宮は七本骨、外宮は六本骨なり、稻を負たる馬の畵、鯛を釣る人形の畫、或は鶴龜等を畵きたるものなり、是を長官宅にて其日の朝與ふる也

藥草摘　くの部、藥日の條に出ず

大和撫子　なの部、撫子の條に註す

楊梅　珍時曰楊梅その形楊子の如くにして、味はひ梅に似たり、故に名づく實を結ぶ楮の實の如し、五月熟す、紅白紫あり、紅は白に勝れり、紫は紅に勝る顆大にして核細かなり

魚簗打　石を堰木を障て魚の往來を通るもの也、上り簗の條に委し

《ま》【四月】松尾祭　上ノ酉（神社啓蒙）松尾の社は、山城の國葛野郡にあり、王都西南を去る事一里餘、祭る所の神大山昨神、（廿二社註式）杵杵島姫也云々（公事根源）亂世以來上の酉の日云々、祭式江次第に出たり、此祭日吉の神事の如く、葵かづらを掛、仁明帝承和四年始て祭るといふ（紀事）宣輿七基、其內一社、每年白木を以て新造すこれを武御輿といふ祭日神幸畢て後、桂川の東に捨つ、翌日兒童再び此神輿を舁、しかして後これを碎き破り、その木片を取て厠に挿むこれ疫をはらふの呪なりといふ、武御輿茂間にネボレの宮と稱すいふこゝろは今日再び遊行す、猶ねぼれたるが如し、神輿七基は月讀の社、櫟谷の社、三の宮は宗像の社、衣手の社、四天神御旅所は七條朱雀の西に在り

當宗祭　上の酉○河內國志紀郡當宗の社は、仁和四年四月始て勸請也（公事根源）午の日使たつ杜本當宗は程近き故に、人の使兩社の祭のために下向す、宇多御門の御外祖父は當宗氏なるによりて、仁和五年四月十四日、祭りをはじめ行はる（姓氏錄）當宗忌寸は、後漢の獻帝より出、四世の孫、山陽公の後なり、云々

松前渡　南部津輕等の商人、產物交易の爲に、蝦夷松前へ渡るをいふ北海凡そ冬春の間は寒氣强く、波濤穩かならず、故に四月はじめて出岸し、九月を限りに歸國す、依てわたるを夏とし、出るを秋とす

天蓼　（和漢三才圖會）藤天蓼、按るに山中にあり、今人家にてこれを植、其蔓蒼黑く、柘及び櫻桃の葉に似て皺あり、三四月小白花を開く、狀梅花に似て小し、實を結ふ、但し雌雄あり、人その嫩葉を取て酸味醬に合和てこれを食ふ、猫常に喜びて食ふ

祭　かの部、神祭の所に註す

【五月】松本祭　朔日（淡海志）江州大津松本村に神社あり、祭所の神、平野大明神也、人皇十七代仁德天皇の廟なり、難波の平野を移し奉ると云々、本宮は往昔六七丁南の山狐谷にありといふ、慶長中今の所に移す、神輿一基あり、今の傍に精大明神を並祭る

豉蟲　（わくかせわ）團く扁き黑き蟲豆ほどあり、水上に浮旋りて止まらず、筑紫にてカイモチカキ江東の俗ゴママイリといふ、按るに是獨樂まはしの訛言なり、脊絶黑く、腹ほ淡赤し、關東にて水スマシ又サウトメといふ是也、然るに得て水すましは水馬也と思へる輩多し去る句合に水馬の題にて藻の花を休み所や水すまし、としたるあり、是件の取ちかひ也云々

菰苅　（蘇頌）水中に生ず、葉蒲葦の輩の如し、刈て馬に秣甚だ肥、春の末白芽を生ず筍の如し、卽菰菜也、八月花を門く、葦の如し、子を結ぶ、粟に合して粥とし食ふ

菽植　（廣韻）大豆は菽也、小豆は答也、（和漢三才圖會）大豆大低夏至の十日以前種を下す、諺に夏至の鳥脚といふは、既に生出る形、鳥脚の如くなれば也、七月花をひらき、九月莢を漢び、十月これを收む

【六月】蠓　（和漢三才圖會蠓蠛一名醢雞、列子に朽壞の上に生ず、雨に因て生じ、陽を觀て死す、爾雅注に飛て磑ひくときは風吹、春つく時は雨ふるといふ、こゝろは風吹んとするときは旋り飛て磑ひくが如し、一つは上り一つは下て春つくが如きときは雨ふる云々形蠅に似て小く、翅、身、皆灰色、脊窄、其大さ一分に過ず

甜瓜　時珍曰甜瓜の味諸瓜より甜し、故に獨り甘甜の稱を得たり○王禎が曰二三月種を下し、五六月花ひらき六七月瓜熟す○美濃國本巢郡眞桑村、これ甜瓜の權輿也故に眞桑瓜と名づく

《け》【四月】罌粟の花　時珍曰一名象穀一名米囊一名御米、其實の形、罌子の如し、其子粟の如し、乃ち穀に象て供御とすべし、故に諸名あり、秋種冬生す嫩苗、蔬になして食ふ、甚佳く、葉白苣の如く、三四月薹を抽で、青苞を結ふ、花ひらくときは、苞脫す、花四瓣大さ仰盞の如し、罌は花中にあり、鬒蘂これを包花開て三日、印ち謝て罌莖の頭にあり、長さ一二寸、大さ馬兜鈴の如し、上に蓋あり、一つに蔕あり宛然として酒罌の如し、中に白米あり、極めて細し、其花變態當にあらず、白き者、紅き者、粉紅の者杏、黃の者、半紅の者半白の者、故に麗春といひ、賽牡丹といふ、又錦被花といふ

蕙　白及（和漢三才圖會）蕙蘭（紫蕙、黃蕙、卽紫蘭）紫蘭莖を立て葉を生ず、秋蘭に似て、潤く薄し、色淡青にして縱理あり、三四月、莖の端に白花をひらく、香なし、又黃紫の二種あり、云々○按ずるに和俗、蕙と稱るもの、白及の類こて、葉大小あり、山中に生るもの、白花黃花あり、又盆に植て愛するものに黑蕙、星蕙あり、此根菱の如く稜あり、蜀本艸に曰白及の屬にや、白及三四月一薹を抽出て紫花を開く、冬凋む、根菱に似て三角あり、白色頭頭に芽を生ず云々、和俗の紫蘭と稱るもの、根菱に似たるものなし、黃蕙、星蕙は蜀本草の說の如し

〔兼三夏物〕夏籠、夏行　安居佛者四月十六日より、七日十六日に至て、九旬の間、禁足安居既にこれを結夏といひ既に終るを解

夏といふ、又七月十六日より、十月十六日に至るを自恣といふ（釋氏要覽）南山抄に云ふ偏に夏月約かにるすは、一には無事遊行は出世の業を修するを妨ぐ、二には物の命を損す慈に違ふ、こと深かし、三には所爲既に非故に世の謗を招く、云々（五雜俎）四月十五日より、天下の僧尼禪刹に就て搭桂す是を（結夏）といふ又これを結制といふ蓋し長養の辰に方て外に出ては、恐らくは草木虫蟻を傷らん、故に九十日安居禁足なり、七月十五日に至て始て盡く散し去、これを解夏といふ、西域記に十六日に作を是とす結夏十六日を以て始とするは印度の法なり、中國は月の晦を以て一月とす、天竺は月の滿るを以て一月とす、則中國の十六日乃ち印度の朔日也○安居（釋氏要覽）南山抄に云ふ形心靜攝を安といひ、要期こゝに任ずるを居といふ、云々

夏斷、夏書、夏經　夏花　夏行は安居也、安居は出家修行の暇を得て私に住す、故に安居の間、他の化益を專らに勤て、三界萬靈に回向等する也、一夏九旬とは、十日を旬とし、九十日なるがゆゑ九旬といふ、在家も志ある輩は夏を修し、九旬の間飲酒魚肉を斷つ、これを夏斷といふ、先祖の聖靈有緣無緣の菩提の爲にする也云々

【五月】削懸の甲　（篋嚢輪）けづりかけは柳を以てこれを作る、元日祇園の削掛を漂格として、甲のかさしとす、是邪氣を祓ふ神呪なりとぞ云々かの部飾甲の條を見合すべし

競渡　鬼車、水馬（月令廣義）楚傳に曰競渡は越王勾踐に起る（歲時記）五月五日の競渡は屈原を求はんとするを以也、後世遂に戲となる（荊楚歲時記）屈原この日を以て汨羅に死す、人舟を以てこれを拯ふ、今の競渡はこれ其遺俗也、南方競渡のもの、其舟を治めて輕利ならしむ、これを飛鬼といふ、又水車水馬といふ、州將、父老、士人悉く、水に臨みて是を見る、蓋越人舟を以て車とし、楫を以て馬とす、故に鬼車、水馬の名あり（和漢三才圖會）唐人來り長崎に寓居して此日に逢ときは、數艘の小舟に、乘競艤を立て先を爭ふ、排龍々々と喚きいひ速なるものを以て勝とす、是競渡なり蓋屈原の爲に龍を逐ふの意か

梟羹　梟炙　（漢史）五月五日梟の羹を作て、百官に賜ふ、其惡鳥の故に五月五日これを食ふ古は梟の羹梟の炙を重ず、蓋其旅類を滅ぜんと欲す

獸狩　ねの部貔狩の條に出づ

【六月】解齋御粥　（江次第）六月十二月十一日後曉十一月中の卯後曉（公事根源）神今食の次のあしたけさいの御かゆまゐる、御座の大床子にて臺盤一脚をたて、供すあかきかはらけにもる和布の御汁をそへたり、三日食て御箸をたつ、云云神今食はて、後齋あるは中ころの事にや解齋の御かゆなどを供しては、神齋あるへからずと也

毛蟲　陳藏器、曰毛虫蘭を作る、形蠶の如し、故に雀蠶と名く、好て果樹の上にあり、大小ともに蠶の如し身面背上五色の斑毛あり、毒あつてよく人を刺螫、老んと欲るもの、口中より白汁を吐疑聚て硬く正に雀の卵の如し、其虫蠶を以て蘭とし、中にありて蛹を成す、蠶の繭あるが如し夏月羽化し出て蛾となる、子を葉の間に放つ蠶の如し

削氷　（枕草紙）あてなるものけづりひのあまつらに入て、あたらしきかなまりに入たる云々○氷室の水をけづりくだきたるを云ふなり

《ふ》【四月】佛生會　八日浴佛、灌佛、龍華會、花御堂、甘水佛の產湯、五香水○凡諸寺院灌佛會を修す、諸品の花を以て、小堂を飾る、是を花御堂といふ其內に小き釋迦の像を安置し、甘草等の香水を灌ぐ是を甘茶と云ふ（事文類聚佛運統記）周の昭王二十四年甲寅四月

八日中天竺國、淨飯王の妃、摩耶氏、太子悉達多を生む、云々（浴佛功德經）清淨慧菩薩、佛に白して言く世尊若佛在世及び滅渡未來世の中、諸の衆生、云何か佛を浴せん、佛言く汝が爲に浴佛の法を說ん、諸の供養の中、最殊勝とす衆の香湯を爲り淨器の中に置き先力壇を作りて、妙牀座を敷き、上に佛を置き、諸の香湯を以て、次第にこれを浴し、香水を用ひ舉て復淨水を以て、其像を淋洗し、人各洗像の水を少しばかり取て、自らの頭上に置く初像上に水を淋ぐの時に此偈を誦して云也、我今諸の如來の淨法身を證せん云々○龍華會（彌勒下生垢を離れしめて願くば如來の淨法身を灌浴す淨智功德莊嚴五濁の衆生成佛經）時に菩提樹あり、名て龍華といふ、慈氏（彌勒翻して慈氏といふ大慈尊下において正覺を成と、云云是は龍華樹といふ木の下にて彌勒始て正覺をとなへ給ひ、此處に三度、說法の會あり、是を龍華の三會といふなり、四月八日は釋迦降誕の日なれば、釋尊を浴し奉り、當來彌勒に迎奉る結緣とすれば四月八日をすぐに龍華會といふなり

深見草　牡丹の異名）和名抄）和名布加美艸

富貴草　（周茂叔愛蓮說）牡丹花富貴者也（書言故事）多く富貴の家、彫欄丹檻の中にあり、故に花の富貴なる者といふ

不如歸　ほと、ぎすをいふ（格物論）啼き花むときは、樹に懸りて、謝豹思歸樂とよぶ、その音不如歸と云ふ

蕗　（崔禹錫食經）蕗葵に以て圍く廣くその蒸喰ふべし

「兼三夏一物」風爐茶

（茶湯秘傳抄）四月朔日は更衣して、よろづ夏かまへする日也、三月まで圍爐裏の茶を服し、爐をふさぎけふより、風爐を立て茶を煎ろ、數寄屋の窓障子なども簾にかへ、よろづ涼しくかまへて客をもてなす、惣じて風爐の茶は、朝茶湯多し、適には晝もある事なり、風爐は奈良風爐を用ふるなり、（毛吹草）常の俗猶四月より九月まで用ふ

蚋　（和漢三才圖會）蚋子、蚋蟆子俗にいふ布止、夏月　山谷にあり、蚊に似て小く、脚もまた黑色、晝多く人を螫、腫痛む事最烈し

蚊子木　**蚊母草**　**蚊母鳥**　（五雜俎）嶺南に蚊子木あり、葉冬青の如し、實、枇杷の如し、熟するときは蚊いづ、塞北に蚊母草あり葉の中に血虫あり、化して蚊となる、江東に蚊母鳥あり、蚊を吐事一二升、云々（滑稽雜談）和俗蚊母鳥を呼て、つゝ鳥といふ、今聞に都々都々と啼ものなり

海蘿干　（和漢三才圖會）鹿角菜（和名豆乃末太）本草に東南の海中石崖の間に、三四寸鐵線の如く、鹿角の狀の如し、紫黃色、土人采て曝し貨海錯とし、水を以て洗ひ、醋に拌まぜれば、眼起して新しきもの、如し、味極て滑かに美也、若久しく漫すときは、化して膿の狀の如し女人以て髮を梳るに、粘ありて亂れず、云々

【五月】鼠事

（天寶遺事）唐の宮中端午一に小粉團、角黍を作りて金盤けの部競渡の條に出づ

粉團を射　中に釘す、纖妙愛すべし、乃ち小角、弓を以て、是を射る、粉團にあたるものは食ふことを得、蓋粉團滑膩にして射がたし、都中盛に此戲をなす（歲時雜書）端午に水團を造る、又白團と名く、或は五色の人獸花果の狀を雜ふ、最精しきものは滴粉團と名く、或は麝香を加ふ、又乾團水に入ざる者あり

藤の森祭　五日（神社啓蒙）山城の國紀伊郡、深草山の南にあり、祭る所舍人親王○延喜式に載る所の眞幡寸の神社二座是也（別雷神旗毒神）後に三所の皇子を合せ祭る、三所の皇子とは、早良親王、伊豫親王、

井上親王、又祭る所三座、舍人親王、神輿三基遊行、社家藤野井氏甲冑を着し、馬に乘て供奉す、歸路おの〳〵稻荷の社樓門の西、並に藤の杜の馬場に於て走馬す、祈願ある所の人あれば、これも又おの〳〵、甲冑を着し、馬に乘て馳駈すること前に同じ、一說に藤の杜は早良親王也、故に弓矢神と稱す、今日供奉の人、甲冑を着すること、是蒙古征伐早良親王歸陳の粧ひ也、供奉甲冑を着すること、此神に始る

富士垢離 （紀事）五月廿五日より六月二日に至て、富士の行人每日河邊に出て垢離をなし、富士權現を遙拜す、是富士參詣におなじといふ、その間男女行人をたのみ、病を祈り、福を索む、行人そのもとむる處の紙符を願主にさづく、又祈願の人みづから行人に交りて、垢離を修す、曾長を先達と稱す、其會する處を富士小屋と稱す

藤撫子 なの部、撫子の條に出づ

【六月】富士詣 （紀事）六月朔日より廿日に至りて、諸國の民人富士山に攀登る、凡富士山に登る四道めり、駿遠豆甲是なり、山に登るもの其方角により、その便に隨ふ、その麓の領主多く人力の及ぶ所は坂路を修せしむ、四道の麓行人止宿の家あり、これを坊といふ、山伏先達なり、參詣の人これを糞導して登山す、日午坊を出て、その夜明けるに及んで山上に至る、凡行程八九里、山腹三四の間大木森蔚也、こゝより上樹木なし、晝は登るに堪ず、故に半夜に入て登る、土人坂路中間の岩窟に小屋を構へ、これを篠小屋といふ、少し風烈しき時はしばらく此室に入り、屋主雪水を以て茶を煎じ、これを饗ぐ、山上所々に靈地靈社あり、絕頂に池あり、周二里餘、池の中常に烟ありこれ壇硝硫黃の氣あるゆゑなり、登るものこの池をめぐる若風雨に逢ふときは、巡ることあたはず繚躋を得るを富士山上といふ、今略して山上といふ、又或は禪定といふ、後世菩提を祈るを以てしかいふ、その人を行人或は道者といふ、はじめ登る處の坂路の外、別に沙石の道あり歸る時はこの坂より下る、行人脚底に草鞋を縱橫にして穿がくの如くせざれば、足のいたみに堪ず、しかして沙石に乘し、下ること八九里の間、二時ばかりにして麓に至る、近世山の腰を巡る者あり、これを橫行道といふ、又橫出、山上と稱す、その行程、攀躋に比すれば道を倍にして且險岨堪難いふべからず、これを苦行といふ、凡山上七月以後、既に雪ありて登ることかたし、故に諸方より來りたるもの、六月を以て限とす○一說に富士山は、人皇七代、孝靈天皇五年、淡海國の地折て湖湛ふ、時に富士山出現す、故に近江の國人、富士を以て吾國の土とす、これによりて、近江の人垢離に及ばず、他邦より來るものも近江の土砂を携て山上に登れば、近江の人に准じて平安を得るといふ、（緣記）延曆二十四年託に曰、我を淺間大神と號すと、平城天皇大同元年、社を立て是を祭る、本地大日如來、云云（神社啓蒙）淺間の社は、駿河國不盡郡にあり、（一宮記）富士權現と號す、大山祇女木花開耶姫なり云云

麝草爲螢 （月令）季夏麝草爲螢、云云註云ふ暑濕の氣を得るが故に變じて螢となる、云々

舟遊 暑を避んが爲に此遊びをなす、江戸大坂の者、妓女及酒肉を携へ日午より舟を泛、曉に歸る、歌舞最興あり

風蘭 （濟確類書）一名桂蘭、名花譜に曰小にして蘭に似たり、枝幹短かうして勁し、砂土を用ひず竹の籃に取てこれを貯へ、露ある處に懸て朝夕水を洒くと、云云此物山石の傍に生ず、取來て棱櫚の皮を以てこれを包み、これを樹下及び簷の下に掛く、風を好で茂盛す故に風蘭と名く、花葉蘭に似て靭橫に垂る、五六月花を開く、微香あり

振舞水　夏日市井の間に、瓶をわたして、これに柄杓及び茶碗等を添へ往還炎暑に苦しむ人をしてこれを飲しむ、是を振舞水といふ、（五元集）まはらばまはれ振舞水の下向道、其角

《二》【四月】衣更　（公事根源）けふは衣がへなれば、宮中所々の御裝束掃部寮あらたむ、御殿のかたびら麦生絹に胡粉にて繪をかく、壁代みな撤す、御疊などもあたらしきを敷たまふ、御服は御直衣、御すこしのあやの御ひとへ、御張袴内藏寮より奉る、女房のきぬ、袷のきぬとも衣がへのひとへから衣すゝし也、裳は上﨟、薄裳小上、﨟、薄色常の如し

氷を供　（延喜式）主水式に云ふ凡御氷を、供するは、四月一日に起りて九月三十日に盡云云氷を貢ぐ處々、同書云ふ山城國葛野郡、德岡の氷室、愛宕郡小野の氷室、栗柄野の氷室土坂の氷室、堅木原の氷室同郡石前の氷室、大和國山の邊の郡、都介の氷室、河内國讃良郡讃良の氷室、近江國志賀郡、部花の氷室、丹波國桑田郡池邊の氷室、此十ケ所なり云云

江州八幡祭　中ノ卯（神社啓蒙）法華が峯八幡宮は淡海國蒲生郡八幡村にあり、祭る所の神石清水に同じ、（社說）一條院の御宇勤請長德二年放生會を行はる（寺說）慶長年中、關白秀次公、この法花が峯に城廓を構ふる時、上の宮を移し、下の宮に合せ祭る、其後御當家御陣所となる、其時今の杉山に移さる、別當願成就寺、往古聖德太子開基の寺院、江州に四十八ケ所あり、其四十八の終りに此寺を建給ふ、故に願成就寺の名あり、神社の傍にある を普門院といふ、成就寺兼帶也、いにしへは坊舍五十五ケ寺ありしが、織田信長の兵火にかゝり悉く滅亡す、氏子すべて十三ケ村、外に新鄕とて、舟木上田林の二ケ村を加ふ、例祭四月中の卯、夜宮に躍あり上の宮祭兩日下の宮祭兩日、その中間一日を御旅祭といふ花表と樓門との間に於て、凡十二三間の炬火を立、高さ六七間ばかり七度半の使を合圖に炬火に火を點じ村々の祭太鼓にも、一二間の炬火を點じ、三社の兒三人を拜殿に座せしめ、この兒をいさめの太鼓とて、拜殿の邊にて拍士躍あり、エイ〳〵サハヲキヤウと拍子（紀事）八幡祭の神輿五基越宮川を渡る（紀事）

五香水　ふの部、佛生會の條に出づ

高野花供　廿一日（元享釋書）弘仁年中紀州に遊びて勝地を相る、高野山に登りて、金剛峯寺を創す、紀伊國伊都郡高野の峯において、人定の所を乞はるゝ表、性靈集に見えたり、（又曰釋觀賢）醍醐寺の座主職聖寶の上足たり、延喜二十一年、醍醐帝の夢中に、弘法大師奏して曰、我衣弊れ朽ぬる、願くは忝くせんと、これによりて釋法の徒、尤き者に勅して、紫衣一襲を野山に送る、觀賢選に中りて山に入り入定の扉を開くに、雲霧隔るが如くにして儀容を看ず、覺賢禮して日少年より道を修し梵行玷なし、況て遺法を奉じ、歲月を累ぬるにおいてをやと、默許することを、須臾にして、貞儀漸く見はる、霧欵りて、月の彰るゝが如し、觀賢順禮して仰ぎ膽るに鬚髮甚だ長ず、便ち剃り落して衣を換るに、諸衆これを見ることあたはず、後世疑謗致さんとて觀賢胥議して、石を重し固く封す○今高野山寶龜院の住持代々此事を預る、ひはた色の御衣を奉る、是を花供と云ふは、金堂にて學侶方の僧藥師會を行ひ、花を供するの日と、大師の御衣きかふる日と、同日のゆゑなり

駒牽　（公事根源）是は四月に待つ事なり、八月も名は同じけれど心はかはれり、天皇武德殿に幸す、王卿以下床子につく、左右の御監御馬の奏を執る馬の頭庭に渡り、御馬を引渡す、白馬の節會の如し、近衞兵衞の射手南にわたり、四府騎射の文を奏、左右の大將これを奏聞す

近衛少將以下番長以上六人東遊ひを奏す右近衛納曾利狛犬を奏す、雅樂蘇芳菲駒形を奏す、この駒牽は來月の騎射の馬、射手人等を御覽ぜらるゝなり、貞觀の頃より初めらる、小の月の時は二十七日、大の月の時は二十八日に行はるゝ也、云々

下木闇　茂林して暗きをいふ萬葉には木の晩とよめり、木晩の暮闇有爾雀公鳥何處乎家登鳴渡良之

柑類の花　柚、金柑、蜜柑、すべて其頭假字の部にて見るべし

鉅　（和名抄）鉅（和名伊師布之）（崔禹錫食經）鉅魚、性伏沈して石間に在もの也（遊覽志）石首魚毎歳四月海洋より來る、數重を綿直して、其聲雷の如し海人竹筒を以て水底を探り、其聲を聞乃網を下し、流を截てこれを取る云云

戀し鳥　ほとゝきすの異名也、（拾遺）伊勢の御うみ奉りたるみ子のなくなりて、又の年ほとゝぎすを聞て、「しての山こえてきつらんほとゝぎす戀しき人のうへかたらなん」此哥より戀し鳥と異名せしなるへし

【五月】五綵絲　ちの部、長命縷の條に出づ

今年竹　若竹時珍曰土中の包笋、各時を以て出、旬目、籜をおとして竹となると云云是即ち今年竹、若竹なり、六十年に一たひ花咲實を結ふ、其竹則枯るゝを紂といひ、竹實を結ふを覆といふ、小なるを篠といひ、大なるを蕩といふなり

苔の花　（本草細目）地衣草大明日華本艸曰此乃陰濕の地、日に晒されて起る苔蘚也○石蕊、時珍曰、其の狀花蕊の如し○王柏（弘陶別錄）石上に生す松の如し、高さ五六寸花紫なり○桑花（日華本艸）桑の樹の上に生する白鮮也、地錢花の如し○本邦にも亦屋上庭園石上樹上に多く苔を生す、五月淋雨降時毎に繁茂して花の狀の如きものを生す、倭名これを苔の花といふ

胡麻蒔　（和漢三才圖會）胡摩三色あり、ともに夏至半夏生の交ひに種を下し、六月花を開く、七月實熟す、最早晩の二種あり

【六月】氷餅祝　（毛吹草）勝尾寺の氷餅（滑稽雜談）和俗今日（一日）に至りて、舊臘雪水に製したる扮餅或は勝尾或は富士山より出る氷餅等を祝ひ食して、今日を呼て、氷室の節句とす禁裏堂上には承らず

御躰の御卜　十日（江次第）御體の御卜、六月十二月十日此日官奏あるべからず（弘仁式）神祇官中臣卜部等を率て、六月十二月一日齊をはじめ、これを卜ふ、九日卜ひ畢て、十日これを奏す、（公事根源）神祇官の官人、一日より本官にこもりて是を卜ふ、上郷けふまいりて内侍につきて奏聞す、是は主上の玉體に御つゝしみあらん事をうらなひ奏する義なり、白鳳四年にはじめておこなはる

黄雀風　（五雜俎）六月中に東南の風あれば、是を黄雀風といふ

極暑　梁ノ元帝ノ詩云季夏煩暑流レ金　燦レ石、

香薷散　時珍曰香薷は夏月解表の藥、冬月の麻黄を用ふるが如し、氣虚の者尤多く服すべからず、今人香需の元氣を傷るをしらす、有病無病に拘らず、概用て藥に代て謂らく、よく服して暑を避くと、云々○（五元集）香需散犬がねぶつて雲の峯　其角

香薷　宗樊曰圃を作りて香需を種暑月蔬菜とす、葉は菌蔯に似たり、花紫にして邊に連りて穗をなす

心太　ところてんとの部みるべし

《えゑ》【四月】えびす藥、えびす草　芍藥の異名なり（御傘）梶原性善が萬安方等をみるに、えびす藥と名付たり、云々（えびす花はえびすくすりの誤なるべし）（和名抄）芍藥（和名衣美須久須利）

烏帽子魚　豆相の海邊、磯、先寄らんとするときに一物流れ来る、大さ二尺ばかり形烏帽子に似て左右に紐の如き物あり、その色瑠璃紺にして光澤あり、是を磯のえぼしといふ、漁者この物の漂流するを期として、海上に檜を構へ、磯の寄るを見る、是を磯見といふ、兩三日すぎて果して大に鰹を獲るとぞ、烏帽子魚と名る事こゝによれり

蠶簿　（和漢三才圖會）蠶曲、和名衣比良、槌は蠶簿を架す柱なり、蠶薄は兼名苑に云ふ蠶を養ふ器也其上に施し蘺を作らしむる者也

枝蛙　あの部雨蛙の條みるべし

【五月】豌豆　（和漢三才圖會）花擬蛾の如し、形外白く内に淡紫あり、中心黒色其實褐色六月是を、收め取る

【六月】江戸淺間祭　朔日○江戸淺間の社は淺草砂利場の後にあり、是を淺草の富士と云ふ、又駒込にも淺間の社あり、又本所六ッ目及高日の馬場、又鐵炮洲等にも同社あり、祭る所いづれも駿河におなじ、今日麥藥にて龍蛇を作り是を篠につけて驚くもの多し、參詣の人又是を買ひて土産とす

江戸天王祭　相傳ふ、元祿のはじめ大に流疫す、よりて官に請奉りて、神田明神の社地に勸請ある處の祇園三社の神輿を出して、街に渡御し奉る、これより後、每年祇園會を修す、先大傳馬町御旅所、神輿一基五日出輿、八日還輿、小船町御旅所、神輿一基七日出輿、十四日還輿なり、いづれも神輿還幸の時、そのもよりの町々を渡御、社人騶東馬上にて、供奉、鉾三本氏子是に隨ふ、神輿渡御の町々は一日廢務也、或は門に忤を植る家あり、是忌竹の意なるべし、其外淺草御藏前、千住、品川四ッ谷等にも此祭あり、中にも品川の御輿は、海汀を渡御す、天王祭

とは、牛頭天王の祭といふ義也、祇園會といはずして、天王祭といふは、江戸の俗の方言なり

江戸山王祭　十五日○神社江戸永田馬場にあり、祭る所近江日吉の神と同じ、別當勸理院僧正、神主樹下采女正、その外社家多數あり、乃ち官より神領六百石を附せらる、當社いにしへは入間郡川越仙波にありて、仙波山の山王を勸請して、江戸の城護神とす、その地今の紅葉山なりといふ、御當家御在城となしたまふによりて、城西の貝塚に移さる明曆回禄の後ふたゝび濠池の上にうつさる、是今の社地なり、江戸第一の大祭也、神田明神と隔年に行はる）凡祭祀に預たり、祭禮六月十五日官祭也、社神殿巍々として、石の鳥居、五十三段の石階松柏枝をつらねて上久ろの町、南は芝を限り、北は内神田を限りとす、神輿三基、祭禮の番組四十餘番各花だし（山鉾の類也）一本練物等を出す、神輿渡御の町々は宵宮より棧敷を構へ、幕を張り毛氈を鋪つらね、軒に多くの提灯を釣る、十五日未明の先榊渡る太鼓是に添ふ、其次猿の造り物ある引山その次諫鼓に鶏の引山わたる也、其外の番組は例年の定あり、此祭に麹町より、朝鮮人來朝の形に出立ち、布にて造りし大なる象の練物を出す、（近年引山の外にこれを止らる）神幸の道、本山を出て、永田馬場より、御堀端を歷て麹町御門に入上覽所を渡り、竹橋より神田橋鎌倉阿岸を過ぎ（今は竹橋より常盤橋へ出る）本町壹町目へ出、本石町三町目小傳馬町、大傳馬町、旅籠町へ渡る、傘鉾大吹貫幟屋臺、引山甲冑の法師等なり、氏子に預る處の諸侯も、又警固の武士をいだし、長柄繩をつらねて群行す、茅場町藥師堂に（山王別當の別院なり）の

境内にて、神饌を献じ畢りて、八丁堀日本橋筋を中橋へかゝり、夫より、本山へ還幸也

炎天　極暑の天を云ふ

《て》【四月】手安天神祭

午の日〇江州野州郡江邊の庄にあり、永原村、北村、三ケ村の氏神也、鎭座、年月詳ならず、明和年中までに七百餘年なりといふ、又永保年中ともいふ、四百年以前、延久五子年十一月十六日、永原越前守再建す、その後應永廿六年亥年、六月、永原越前守雅行修補す、又明應七年四月十四日同氏重秀、改め造る、この重秀も越前守に任じ、廿八萬石餘領す、京極佐々木の同流にて、永原に住す、依て本居補とす、四月午の日祭禮、神輿二基渡御あり、例祭正月十一日より十三日まで、連歌十句興行あり、卷頭は時の地頭の句を定例とす、此所北村季吟出生の地なり、又平清盛の妾妓王も此地に出生す、故に平家の奉行、判物の大繪圖、氏子三ケ村に傳來すといふ、別當實光坊の說也とぞ、祭式未詳

繡毬花　（和漢三才圖會）粉團木の高さ五七尺葉は箱根楊櫨に似て圓く皺文あり、四月花をひらく、初は淡青色、後正白たり、小き花攢族て圓さ二三寸、一種小粉團といふあり、木の高さ四五尺、葉狹く長し、棣棠の葉に似て粉團に似て小く白し、大さ寸半ばかりをすぎず

【五月】天中節

（提要抄）五月五日午の刻を天中の節とす

天師を畫　かの部艾虎の條みるべし

天南星　（蘇頌圖經）天南星は處々の平澤にあり、三月苗を生ず、荷梗に似て其莖高さ一尺以來、葉蒟蒻の如く、兩岐相抱く、五月花を開く蛇頭に似たり、黃色、七月實を結び、穗をなす、石榴の子に似たり、紅色〇時珍曰一名虎掌葉の形これに似たるに因るなり、南星とは根團く白く、形老人星の如くなる故に、南星と名く、云々和名抄虎掌（和名於保保曾美）

鐵線花　（和漢三才圖會）鐵線花、按るに苗宿根より生ず、一極に三葉微芍藥の秋に似て、小く、莖細く靭甚勁し、故に鐵線といふ俗稱也、蔓無く其葉架に寄て繁衍四月花を開く、蔓の下に六葉あつて莖を抱く、亦一異なり、其花、白色六の瓣平に開て、蘂圍く、紫色最鮮美其蘂綻れば、天蠶糸を綟て總をなすに似て、其もとに子あり〇千葉鐵線は外六の瓣にして白色常の如し、內の瓣もまた白色、千葉短く細く隨ひらく、青き蘂あり、外の瓣既に落れば、內の蘂ひらく

【六月】天滿御祓

廿五日〇當社は攝津大阪、西成郡、天滿にあり、祭る所の神、天滿天神（攝陽詳談）社家說に曰、天滿宮の權輿は、人皇六十二代村上天皇の御宇、天曆年中この地（いにしへは天滿山といへる大なる松原也）に於て、一夜に松茂生ず、その梢に靈光赫々たり、人これを怪みて、帝都に告て、奏聞を遂く、帝即日勅を下したまふ、時に神託ありて云ふ、難波の梅をしたひ、築紫よりこゝに來ると驚き覺て、その由を奏す、依て菅靈を此地に鎭らる、云々〇例祭六月廿五日練物車樂等、水陸ともに渡の訖りて、神輿夷の御旅所に出、往還川舟にて、數萬の提灯群集す、遊船又多し

天貶節　（書言故事）令要に云ふ、宋の眞宗祥府四年、詔して六月六日を天貶の節とす

《あ》【四月】袷

（文選秋興賦）御袷衣（李善註云袷無裏〇凡四月朔日を更衣とす此日より袷を用ひ、端午に至て布衫を用ふ

網鳥　ほとゝぎすの異名也、（藻鹽草）是は時鳥を網にて取て、明年の夏鳴せんと云ふ心也、云々

靑簾　靑葉の簾（藻鹽草）靑葉の簾とは、翡翠の翡翠の簾々とて、四月

朝日新しき簾をかくるなりと、云々、一設に加茂の祭を四月朔日葺簾にかけらる、故　青葉の簾のいふ、云々、一説に、夏山の翠なるをいふ云々〇青簾云ふ、元禄年間の勺に『客は誰乳母か所に青簾　などいへるたぐひの作例あまたあれば、天子の御簾をのみいふ、といへる説はなづめり

扇を賜、扇の拝　もの部孟夏旬といへる條に見るべし

甘水　ふの部佛生會の條みるべし

葵祭　葵蔓　かの部加茂祭の條下みるべし

雨蛙　枝蛙（和漢三才圖會）背青くして腹白し、大なるもの寸半に過ず最も小なり、色青く木の枝にすむと云々是枝蛙なり雨ふらんとするとき鳴、故に雨蛙と名く（大和本草）土鴨雨蛙といふ

青ざし　（枕草紙）五月五日の事をいへる條に青ざしといふものを、人のもて來るを青きうすやうを、艶なるすゞりのふたに敷てこれまぜこしにさふらへば、とてまるらせたれば、云々李時珍云ひ青ざしは、青麥にて謂じたる菓子なり

蜀葵（あふひ）　草葵、タチ葵、此二名亦蜀葵をいふ也〇持珍曰春の初め子を種、冬月またおのづから苗を生ず、纖なる時茄ふべし、五六尺にして花さく、木槿に似て大きく、深紅淺紅紫黒白色單葉千葉の異なるあり

〔兼三夏一物〕扇　かはほり（五雜俎）大明以前摺扇なし多し、團扇を用ふ〇扇車、扇引扇すまひ以上（枕草紙）こぞのかはほり云々河海に云ふ蝙蝠を見て扇を作り初ける也、依て夏の扇の名物也

汗衫　（釋名）衫は袖の端あらず云々（昭潭志）立山縣の皇嫺繽續に長せりよく竹を以て衫を爲り、署服に充つ、衫は小襦也〇按ずるに和俗にいふ襦袢、管襦袢のたぐひなるべし

汗巾　長さ一二尺の布の兩端を縫ひこれを用ふ

暑　（山堂考索）陽、事を用ふる時は則日進で北にす、晝進て長し、陽勝る故に温となり暑となる

編笠　（和漢三才圖會）蓑笠今莞を編てこれを作る、竹の骨を用ひず、呼て編笠といふ、以て暑を禦ぐべし

泔鱸　和俗夏月其肉を魚味に作り、洗ひ淨め、煎酒に浸し、これを食ふ、これを洗び鱸といふ

青鷺　（和漢三才圖會）蒼鷺和名（美止鷺）言こゝろは綠の下略蒼鷺、鷺に似て小く、色蒼黒し、（以上和名抄）今蒼鷺と稱ふる者鷺に似て大く頭翅皆蒼黒項冠毛も亦同色、頭上胸に至て、黒毛斑々とし、翅の端正黒、背の外黒く、內黄、腹白く、脚綠なり、毎に水邊を歩みて魚を食ふ、飛ぶときは高く擧り遠く翅る、その肉最も美也、夏月これを賞

す

安居　けの部夏籠の條に註す

青山椒　（和漢三才圖會）本草に秦椒蜀椒の二種ありて、秦椒は其葉對生、尖て刺あり、四月細花を生じ、五月實を結ぶ生は青く熟すれば、紅なり、蜀椒は釘の如き刺あり、葉硬くして消なり、四月實を結ぶ花なく、俱枝の間に生す云々、其實いまだ紅熟せざるこれを青山椒といふ

藜　時珍曰青藜四月苗を生す、蔬とす、藜は青藜の紅心なるもの也、葉葉稍大なり、嫩きとき亦食ふべし老るときは莖杖になるべし〇やど

りせん蓑の杖になる日まで　芭蕉

鮎　若鮎、小鮎といひて春なり、たゞ鮎とばかりいへば夏也、落鮎淡鮎といひて秋季なり

【五月】菖蒲を献　（和漢三才圖會）仁徳天皇三十九年辛亥五月始て菖蒲を献す、（續日本記）聖武天平十九年五月、天皇南苑に御して、騎射走馬を覩たまふ、是日太上天皇詔して曰、昔は五日の節常に菖蒲を用ひて縵とす、このいろ此事やみぬ、今よりして後、菖蒲掛ざる者は、宮中に入ことなかれ、云々

菖蒲の輿　（公事根源）六府あやめの輿を、南殿の階の東西にたつ、四日は朝餉の庭に是をたつ、主殿寮所々に菖蒲ふく〇菖蒲の御輿の料木は、梅か畑より供奉人、今出川家に納む、即衛士に遣す衛士これを作る、其法根菖蒲を連ねて棟梁とし細木を以て柱とす廻ち小殿の形を作り、檜の葉並に菖蒲を以殿宇を葺、衛士禁裏に献るとそ

菖蒲葺　時珍曰菖蒲は、蒲の類の昌盛なるもの、故に菖蒲と名く、（和漢三才圖會）菖蒲屋の檐にふくものなり、或は件の日菖蒲に浴し、或は石菖の根を以て酒に漬し、これを飲ば邪氣を祓ふと云々

菖蒲人形　此人形は力士の形を摸して作れる多し、江戸にて元禄のころまでは市中を賣ありきしにや、（炭俵集）端午の部に「五月雨や傘に付たる小人形、其角とあり、今は十軒店尾張町其外便りよき街にて是を賣也

菖蒲引　沼澤江池なとに下り立て引心を哥によめり〇まこも草末はの露も五月雨にまさる水野のあやめひくなり　資任

菖蒲の髪　菖蒲を献すといへる條下をみるべし

菖蒲の案　（延喜式）典藥寮式に云ふ五月五日菖蒲、生薑黒木の案四脚、苧六兩、黒葛四斤を進る省輔以下寮頭ともに執る、人進み訖りて即退出す、輔留りてこれを奏す、云々

菖蒲の枕　（續拾遺）あやめぐさひと夜ばかりの枕だに、むすひもはてぬ夢のみじかさ」前中納言雅具（後水尾院當時年中行事）あやめの枕（薄やうにつゝむ）一對ゆひ御枕もとにあり、うすやうは極薄調進す、御枕は匂當の內侍よりいたす也、其樣あやめをたけ五六すばかりに切て、五すばかりにあとさきを、紙ひねりにて結ひて、兩方の小口にさしはさむ云々

菖蒲湯　（同年中行事）五月五日の條に云ふ、けふはさうふの御湯まるる、よべのさうぶの御枕一對を、うすやうにつゝみながら寵殿紙をひねりを引ときて、御湯に入る、（大戴禮）五月五日蘭をたくはへ沐浴す云云、是菖蒲を以て蘭の葉に代るものか

菖蒲の占　（三潮草）女兒の戯にあやめを結び唱へていふ、おもふ事軒のあやめに事とはんかなはゞかけよさゝがにの糸」如此いひて一事を祈る、願ふ所成るものは、蜘蛛あつて網を菖蒲のうへに曳く云々

菖蒲の衣　京師の俗、端午に菖蒲浴衣、同帷子を與ふること、必家々にありとぞ、官家には菖蒲重とて朝服あり、花田萌黄のよし、根菖蒲といふは、表白裏紅、又樓衣といふは素紫、裏薄藤、又菖蒲重紅梅も用ふるよしなれど、五月五日着する處の常の浴衣帷子を菖蒲浴衣菖蒲帷子といふのみにて當季の色を用るに非ず

菖蒲酒　（荊楚歲時記）端午に菖蒲の、山の澗中に生る、一寸九節の者を以て或は鏤め、或は屑として、酒に泛め以瘟疫を辟く、（本草）石菖蒲一切の惡を除く、端午の日菖蒲を切て、酒に漬てこれを飲む、或は雄黄を少しばかり加ふ、云々

楝を佩、楝葺　（證類本草）五月五日、俗人楝の葉を取て、これを

佩れば、惡氣を逐ふ○時珍曰按ずるに羅願か爾雅翼に云ふ棟の葉を以て物を練べし、故にこれを棟と名く、其子小鈴の如し、熟する時は黄色、金鈴と名く、形を象る也、(增山の井)今も片田舍には端午にあふちの葉を軒にすく所侍り、今せんだんの木といふもの是なり

有無日　廿五日(公事根源)これは村上天皇の御國忌也、宮中にありなしの日とや申にや、廢務日にあらざれども、政おこなはれ侍らず、又急などあれは、俄に政事あり、さてありなしの日とは申也

棟の花　蘇頌か曰棟木の高さ丈餘、葉密にして槐の如く長し、三四月花開、花紅紫色、芬香、庭に滿り(花彙)石茱羅その樹高大數抱に及ぶ葉厚く光り、夏月花著枝に滿つ色淡紫觀るに堪たり一朶數蕚、數百群をます、頗る芬芳あり、長き實を結ぶ、桃葉珊瑚の如し、一穗數十顆、枝の間に垂糸す、生は青く、熟すれば黄色味甘し、一種圓き實の者は味苦し、川練子是なり、日本古來罪人を梟首するに此水を用ふ、故に他材に用ひず、倭俗誤て旃檀とよぶ、旃檀は檀香也、又樗の字を用ふ(枕草紙)木のさまはにくけれど、あふちの花こそをかしけれ、はなもかれ〳〵に、さま異に咲てかならず、五月五日にあふもをかし

紫陽花　四葩花(韻語陽秋)唐の招賢寺に山花あり、色紫氣香しく、穠麗愛すべし、人其名を知る者なし、白樂天これを過て標をなす、其名を紫陽といふ、(和漢三才圖會)其莖叢生す、莖は手毬の葉に似て五の花をひらく、云々其花もまたてまりの花に似て、淡碧色一名四葩の花(夫木)あぢさゐのはなのよひらはおとつれて、なといなのめのなさけばかりは　俊頼

朝菊　(花彙)花苦菅、救荒本草に云ふ人家園圃に好事の者多く栽、冬苗を經て長生す、高四五尺莖細く、柔かにして、蔓延する如し、葉苦菜に似て光澤なし、青色にして淡碧を帶ふ、初生莖の梢を抱、葉每一曲で、葉を穿形の如し、四五月葉の間に紫碧花を開き初て綻る時野菊の如し朝にひらき夕に萎む

あざゝ　池澤の中に生ず、葉も花も萍蓬草に似て別也、あざゞは莖河骨より長く、水中に横はたりてよわく、葉は水面にうかび、水上に上らず、花の形色はかうほねに似たり、五六月水面に黄花を開く、叢菜をあさゝと訓するは誤也

粟蒔　(和漢三才圖會)中古粟をしらず、近世粱をしらず、大低粘るものを糯粟とす粘らざるものを粟とす、穗大にして毛長く、粒粗きものを架とす、穗小にして毛短く粒細きものを粟とす、苗ともに茅に似て種類凡て數十、青、赤、黄、白、黑諸色あり、早、中、晩あり、三月種るものを上時とす、五月熟す、四月種るものを中時とす、七月熟す五月種るものを下時とす、八月熟す

青梅　嬉しさは葉がくれ梅のひとつかな　杜國○梅とばかりいひても實のさまにいひとればよし

杏子　(本綱草目)杏は葉圓くして尖あり、二月紅花をひらく、沙あるものを沙杏とす黄にして酢を帶るものを梅杏とす、青くつて黄を帶るものを奈杏とす、大さ梨の如く、黄にして橘の如きを金杏といふ○和名からもゝ俗あんずといふ

荒布苅　(和漢三才圖會)本草綱目に海藻に似たりと、按ずるに昆布に似て狹く、黑色長きもの四五尺縱の皺文あり、柔かに靭て株あり、堅實にして乾けば小刀の柄となる、其葉煮食ふによろし

鰺　(大和本草)東南の海に生るもの形、肥大たり夏秋肉多く味美なり冬春美ならず又室鰺島鰺あり味劣る

【六月】蘆の神輿　つの部津島祭の條下みるべし

熱田祭　神社尾張國平魚市郡、江崎、松姫島千竈の鄕にあり、正殿五座、第一天照太神第二素盞烏尊、第三日本武尊、第四宮簀媛命（日本武皇妃）第五建稻種命（宮簀媛の兄大宮司の祖神）右五座西より次て是をかそふ○土用殿は神體草薙の寶劍なり、又熱田七社と云ふは大宮、八劍宮、高藏宮、大福田宮、日割宮、水上宮、源大夫宮是也、此外攝社末社、一百餘座あり、當社は人皇十二代景行天皇の御宇鎭座也其後天智の御時、故有りて皇都に移し奉りしが、十九年を經て、天武天皇朱鳥元年ふたゝび當國に還座したまへり、其砌は例祭勅使下向有りて、官幣を奉られしなり、抑當社の神事、年中數度あり、まづ正月十一日辰刻踏哥の神事、大福田の社より始て、政所、大宮、八劍、又大福田にて終る、此社は倉稻魂を祀る、故に五穀豐登を祈る神事なり、舞人十二人、高巾子一人、笛一人、陪一人各櫻山吹を揷頭とす、同十四日は步射の式、十五日は步射の的、廿二日は兩宮の步射會、二月初巳午未の日祈年祭○同月末の日午刻、御田神社の供御此日烏喰の神事あり、俗に烏祭といふ、是は神事いまだはじまらざる前に、大宮祭文殿の前にて、祝座の長、外に一人平餅をもて烏を呼ぶ也、此餅を烏のくはざるうちは、神事をはじめずといふ○五月五日は神輿鎭皇樓門上へ神幸（古質おほし）○六月九日山鉾祭禮あり、熱田八ヶ村より是を行ふ、（車二輛山一輛）○同月晦日夏越の祓あり、鈴の社前の川岸において是を修す、又○七月七日は大宮の大掃除、十一月初寅卯辰の日新嘗祭、十二月廿九日兩宮外院煤拂ひ等あり、此外諸社の供御は月々數度是有り。今要を摘て略記す

愛宕の千日詣　廿四日（神社啓蒙）丹波國桑田郡、水雄の北にあり祭る神二座伊弉冉尊、火產靈神云々（神祇拾遺）愛宕權現、嶋の御前、軻遇槌命、奥の御前伊弉那美尊（紀事）六月廿四日愛宕詣、是平日の千度に當るといふ、俗これを千日詣といふ、寺僧六坊にてこの日參詣の人に酒食を饗す、これを坊著といふ、火札を買て歸路檐の枝を求め、粽を付、これを肩にして歸る、檐の枝は竈の上に揷む、かくのごとくするときは、其家火災を免るといふ、凡六坊國每に權越あり、貴賤を擇ず、每年札を贈り、贄を贈る、この使を勤るものを中衆といふ、この山嵯峨の西にあり、延喜式に載る所、丹波の桑田郡に屬す、今は山城の國なり、本殿祭るところ、愛宕權現、垂跡本地勝軍地藏菩薩、是則慶俊法師再考勸請する所なり、當社はじめは城北の鷺が峯にあり、光仁天皇元年今の地にうつす

荒和祓　なの部夏越の祓の條下みるべし

麻の葉流　祓草（年中行事）夏引の麻の大ぬきとりそへても、のつかさのみそきすらしも」大藏卿○麻の葉を切て幣とするゆゑに、はらへする川に流すなり、祓草といふも麻の事也、麻の葉にてしでをする故に名づく

暑日　（字彙釋文）暑は者なり、熱して物を煮がごとし云々○暑き日といへば六月の季なり、暑とばかりは三夏を兼ぬ

青嵐　夏木立の梢の綠を吹あらすをいふにや、一說六月土用中の空に一點の雲なく青みたる天氣に、東風のくはゝりたるを青東風といふ、無類の天氣なり、是を青嵐といふと云々

赤草　飽文曰赤草一名山酸漿、高さ七八寸ばかり、一莖一葉棠吾の如くにして薄く小さし、夏日其莖葉眞紅となる、其苗山澤にあり、故に山酸漿と名く、立花を好める人、夏日これを愛して花瓶に揷む

青田　（杜詩）六月青稻多千畦碧泉亂と、作れる意にて風景みるべし

藍苅　（和漢三才圖會）四月苗を植て、凡七十日ばかりにいまだ穗をな

さゝ時、晴且に露に乘しで拔採り、曝し乾すに按ずるに拔採るもの稀にして、刈とる者多し

麻、同苅　櫻麻苧（和漢三才圖會）苧麻大麻ともに皮を剝て絲とす、通して苧と稱す、苧麻を以て眞苧とす、羽州最上の產を佳とす、奈良瀑を織るもの是なり云々（陸機草木疏）紵は宿根土中にあり、春に至て自生す、栽種る事を須ひず、荊楊の間、歲に三たひ刈る、諸國これを種て歲にふたゝび刈る、便其皮を剝取、竹を以て其表を刮る、厚き所おのづから脫し、裏の筋の如きものを得て布を緝す○蘇頌か曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして、面青く背白く短毛あり、夏秋の間、細き穗青き花を著く○櫻麻、櫻花のさゝころ栽る故の名とも、又麻の花の櫻に似たる故ともいへり○麻刈を夏とし、二番刈を秋とす

青番椒　青鬼灯　青しといひて夏季とす、くはしくは秋の部に註す

青瓜　時珍か青色瓜といへる是か、江戸にてこれを本田瓜といふ、丸漬瓜に似て長大なり

阿古陀瓜　阿古陀は宛も南瓜に似て今人好まず、此瓜京師に多し、味美ならず、其蔓長く葉蜀葵に似て花黃也

麻地酒　（諸國名物記）豐後國の製也云々（和漢三才圖會）南都淺茅酒云々（毛吹草）豐後國麻地草云々又朝生酒との書、或は土かふりとも云ふ酒方の書に云ふ麻地酒は、豐後國より出、其造法糯米、粳米等分に合製して、冬月寒水を用て是を釀し、土中に埋め、草茅の類を以て是を覆ふなり、冬春を經て夏月土用に至て則土中よりこれを出すに、既に熟せり、よりて二かふりの名あり、夏月の飮とし賞翫す

洗飯　すの部水飯の條に出す

雩　（紀事）六月旱する時は、民間請雨の法を修す、是を雨乞といふ、民人鉦をうち太鼓を鳴らして踊躍、或は笠を戴き、簑を着雨中の粧をして是を祝し、諸神を祈る云々

秋隣　秋近し、秋を待　いづれも別義なし

《さ》【四月】下帶　（御湯殿記）五月五日より女房上下帷子をいろいろに染て着し、附帶なり、是は洞中の御事也、凡俗にも地白帷子下帶を用ふ、又四月よりも用ふ

山王祭　申の日、但し二つあれば二の申、近江國日枝の神社は滋賀郡坂本に有り、祭神大己貴尊也、所謂上の七社は大宮大國主命（十一面觀音）二の宮麻多羅神及び金比羅神これ天臺山青龍寺の鎭守に准す、（藥師如來）聖眞子八幡大菩薩（阿彌陀）八王子灌頂大法王子（千手觀音）これ被陀落山を表す、客人の宮、白山明神の靈尊、去來諾の大神也、山王の行化を助け、北陸を出て此山に來現ある、故に客人の宮といふ（十一面）十禪子は地藏の應化也、大師此山を開き、成就の後上定心院を創む、叡山東の堂にあり、十禪師を置たまふ、九人をえらび得て一人を缺く、安慮を得て、數に滿り、十禪師の才器を歡抃して忽然としてみえず、故に社をその所に建て祭供す、これを十禪師といふ、（普賢）中の七社、牛御子は大威德、大行事は毘沙門、甲尾は不動、氣比は聖觀音、下の王子は虛空藏王子の宮の珠聖女は女意輪なり、下の七社小禪師は彌勒、龍樹、惡王子は夢染、新行事は吉祥天、岩瀧は辨天山、末は魔利支天、劍の宮は不動、竈殿は大日、以上廿一社なり○三月十八日、山王祭の榊をその所に於て、伐取り、四月三日に至りて西敎寺の側の松の木に寄せかけて又山王の社前に置、夜に入り諸人是を取、大津の四の宮に立つ祭の日神幸の書大津より大宮の拜殿に返し入奉る○申の日江州東坂本の山王祭り午の刻過て、田樂法師、獅子

舞、比叡辻の人、並に衆徒前駈して神輿を迎へ、七社の神輿山を下る時、前後をあらそひ競ひすゝみて舟にのせしむ、山門の僧徒棧敷を構へ、桟簾をたれて是をみる、これを横棧敷といふ田樂法師等この前に於て藝をなす、この日京の山王町より、供物を日吉の社に献ず、前日天臺の當座主の御宝に至てこれを加持し、翌日、東坂本に至りて供す又江州膳所の地人御供を献ず祭の日縛船二艘湖上に浮め、音樂を奏して件の供物を献備す是を御供船といふその船に乘るもの、多くは猿皮を着て、猿の假面を被る、猿は元來日吉の使令也、云々その中、六社の神輿へ、假りに供するまねして後、湖水に撒つ、大宮一社の神供は神輿の前に置、云々その後神輿船を陸地に寄せ、神馬相むかへ得て、輿中の神躰たまふを、本社に入るゝといふ、七社の空輿は、坂本の地人これを昇きて神輿屋へ入るゝ、今日山門に屬する所の供人甚だ猛威をふるひ、神幸を警護す、俗諺に山王祭に礫るものあれば寒の語は、今日の事也とぞ、これ人を害するに及ぶの語也、祭りの前夜、いまだ八王子の神輿を祭らず、急に山坂を下りて、七社の神輿、各本社七ヶ所の拜殿に居う、抑山王祭は七ヶ年詣てずしくては、盡見つくしがたしといへり、古老傳へていふ、二月中の申の日、八王子三宮の兩神輿を八王子の山上拜殿に昇すゑおき、四月未の日に至て、件の二社を神輿に遷し奉るを、午の神事といふ、八王子拜殿は元來山嵓に造り、出して階下遙に低し、神輿半は拜殿にあり、半は拜殿の欄干を越て外に出し、神輿の先の方の棒に柱をたて相圖を待て柱を拔とれば、神輿さかしまに落つ、その下に神輿舁數十人並居て、中にて受取、直ちに山坂を下す、誠に生死をこの一時に究む、これ八瀨の土人預り役する所なり、これを神輿落といふ下し終りて、兩社を二の宮の拜殿に安置す、二の宮の神輿を、拜殿に遷し奉る事は、近年未の日の晩となる、十禪師の神輿も又同じ、未の日二の宮、十禪師、四社の神輿を大政所

にうつし奉る同時警固の式あり、大宮、聖眞子客人の宮は大宮の拜殿にうつし奉る、也々（此間長ければ略す）公人各白素絹紫の剌ぬき五條袈裟を以頭をつゝみ、太刀を偃、その餘數十疊甲冑を着し、鎗長刀を持てその所を警固し、神前に武器を立つらねて、終夜警固の勢ひをなして、各下山す、此日京祇園の社より、御供を捧け來りて酉の刻献備す、これを未の御供といふ、暮に及て宵宮落しといふ事あり、大政所四社の神輿を石垣の際へ出し、石壇の下より柱にて、神輿の先の方の棒端を持せ置て、これも又合圖を待て、四社一同に落さんと設けおく也、神事の役人その所々に來集りて、時刻に至れば獅子舞大政所に來り、二の社三の宮と次第に舞て退く、次に田樂法師裝束に菅笠を被り藝を施し、神輿を拜す、この時公人、頭取狂言さしおきてしめのうり仕れといふ、田樂笠をぬぎ立烏帽子を着てうたひ舞ふ、この舞の扇を肇るを相圖に神輿を落す、四社の神輿舁、中にうけとり、先をあらそひて走る、收納所の前、鼠の宮にて前後ともに相揃ひ是より次第の如く神輿を並へ大宮の拜殿へ迂幸七社合せ奉る也、當日申の日山門の大衆棧敷人の裟あり云々公人甲冑にて衆徒を警固す棧敷の前において獅子舞田樂あり、是は宵宮に勅使御參向、當日まで御滯留勅使への饗應の遺意也といふ、人皇七十一代後三條院延久四年四月廿三日始て祭の官幣を立らるゝよし、廿二社注式に出、或は六十四代圓融院貞元二年四月廿六日、始て上卿辨外記史諸司を遣はさるゝともいへり○凡神馬の催し、一番の鍾に應じて、參詣の輩石の鳥居へ來り集る、三塔の公人人數をあらため、未の刻ばかりに四の宮より榊を渡す磯成束帶濱成、女官、唐裝束にて各馬上、七度半の使至て榊を渡す也、云々（此間も長ければ略す）社家春日祭といふ事あり社家の拍掌を持て、大宮前の廐を動かすを合圖として、神輿各先をあらそひて舁出す、前後の勝負石の鳥居までにあり、云々神輿は飛ぶが如く八ツ柳にいれるこ、

において神輿を船に乗せ奉るも又先後をあらそふ、この神輿船は、湖邊七浦より毎年これを出す。是より辛崎の社にて神供の饗あり、七社神輿の鳳輿丁、例年潔齋精進してこれを勤む、今日の勝負の手柄を褒美して祿を賜ふ事あり、谷々勝手よりこれを出す、日次紀事に七社唐崎より、神馬にて陸地遷幸といふ誤れり、日吉錄座記祭儀に云ふ、卯年の祭禮は琴の御舘大樫木を以て神幸の祝詞を奏し、唐崎にて先盟の如く恒世か爲衆の御供料を奉る也神輿を出し祭る事は、桓武天皇延曆十年と云々又御舟祭始る事は延元年中供水以後の例也云々七社の神輿へ御供を献る事各七膳、献供の式畢て神輿舁たる輩は唐崎へ上り、陸地を本社へ歸る、西は高野、矢脊、修學寺、佛格寺、田中、山中の人東は大津、志賀、河野、坂本、苗鹿、雄琴、仰木、乳母、眞野等の土人也、神輿舟は若宮の濱へ着岸、是より上ヶ濱といふ所の土人、神輿を舁ぎ炬火挑灯にて本社へ遷御あり、翌酉の日廻の神事といふ者大坂より來り、神樂を奏し終りて後神輿を納るなり

榊取　かの部神祭の條に注す

三枝祭（さえぐさ）　吉日撰びよし拾芥抄にいづ、〇大和國添上郡率川の阿波神社の祭也、式說に率川と三枝は別社也、率川の社の南に三枝御子の社あり、諸神記に件の社は右大臣是公の建立なり、これによりて南家の苗裔この祭を行ふ、又一說に、三枝の花を折て酒樽にかざる、故に、三枝の祭とは申とぞ、顯昭の說に、三枝はからすあふきなり、末廣ければ祝によする也、云々（公事根源）是公の建立と申口備あれど、令といへる書は淡海公の撰ばれて、養老年中に奏覽せらる、是公の大臣は淡海公の曾孫也、この事既に令にみゆれば是公の再興にや、覺束なし

嵯峨祭　中の亥〇丹波國桑田郡水雄の北、白雲寺愛宕權現の祭なり、（滑稽雜談）例祭神輿三基清涼寺にありて、祭日の送り迎へも此地より

なす、寺は山の下にありといへども神地に屬す、ゆえに清涼寺の櫻川に籍して愛宕山といふ、蓋故あるか、この日一基神輿に寵らする金鳳は愛宕山より下す、此金鳳下るを期として神幸を催す、一基は野山大明神と申て野宮より遷幸と、云云いづれも土人本居神とす、この祭に土人嫁を妓女の如く蓼をならはせ、勾欄に於て舞しむ、近年引山或は傘鉾を出す

櫻の實　（和漢三才圖會）清明の前後花をひらき實を結ぶ、大小大豆ばかり、生は青く熟すれば赤黑し、仁あり、小兒好でこれを食ふ、味ひ甘美、よく魚毒を解す、俗に此子を櫻坊といふ

【五月】さ月の玉

五月の鏡　（異聞集）唐の天寶中揚州より、水心鏡を進る、背に盤龍くの部樂玉の條に出づあり、五月揚子江心に於てこれを鑄る、これを祈れば則雨ふる、（搜神記）金銀の性は一なり、五月丙子日午時鑄るを陽燧とす、十一月壬子の日子時鑄るを陰燧とす〇時珍高濠錄を引て云く陽燧一名陽符、火を日にとる、陰燧一名陰符、水を月にとる蓋銅を以てこれを造る、これを火水の鏡といふ、（五雜組）唐より以前みな楊州より鏡を貢す、五月五日を以楊子江心の水を取てこれを鑄る凡鏡は他なし、水清冽なれば則佳なり

左近の眞手番　ひをりの日（公事根源）五月三日は左近の荒手番、四日は右近の眞手番、五日は左近の眞手番、六日は右近の眞手番也、むかしは左右近の馬塲にて、騎射のみありしにや射手などは大將の申さだむる事也、云云此日隨身褐の屁を折て着る故、ひをりの日といふなり、荒手番も同じさまながら、眞手番正月なれば五月五日をひをりの日といふなりひをりは引折の略也、（河海抄）左近の馬塲は、一條大宮に在り洞院右近の馬塲は、一條西

最勝講　（公事根源）先、かねて日をさだめらる四ヶの大寺（東大、興福延暦、園城）最稽古の聞えあるをえらみて、さだむ、（譯義講師聽衆などとあり、最勝王經を清涼殿にて講ぜらる、也、（元亨釋書）永延皇帝（一條）寛弘六年六月十九名德を宮中に延て、最勝王經を講論する事五日、立て式とす、先代或は行ひ或は止む、今より後例となる云云

五月雨　梅雨、人梅、黴雨、霉雨、桑花穴（和訓義解）さみだれさつき雨降るの略也○梅雨（埤雅）四五月の中梅黃み落んとする時、水潤土溽して杜礎みな汚、蒸鬱として雨ふるこれを梅雨といふ、故に三月雨ふるこれを迎梅といひ五月雨ふるこれを送梅といふ○人梅（四時纂要）閏人立夏の後、庚日に逢ふを人梅とす、芒種の後、壬日に逢ふを出梅とす雨をうれば耕作によろし○黴雨（紀事）立春後百三十五日、大概黴雨とす、諸物黴腐る、此節陸地處々に水かならず涌出る、俗に津井穴といふ○霉栗花穴（紀事）撫州夫川郡丹生山田の庄、原の村、辨才天の祠のほとり、毎年水かならず涌て期を愆たず、是則中將姫の娣白瀑前を祭るものなり、霉栗花左衛門といふもの世々に家す云云

早苗、早少女　たの部田植の條下見るべし

榊の花　（和漢三才圖會）坂樹（日本紀）賢木（本朝式）龍眼木（漢語抄）和名佐加岐、正字未詳按ずるに本朝神社必用の木、なほ浮屠の木密を用ふるがごとし、葉小さく色深青にして香なし、四時凋まず、小白花をひらき實を結ぶ、生は青く熟すれば紅なり日本紀に八百萬の神たち天の香久山の坂樹を取て天の窟戸の事を祈りし以來、神の緣木たり、云云

柘榴の花　（濟確類書）石榴種甚多し、千葉深紅にして實を結ぶもの、を寶珠と名く、單葉のものを火榴と名く、甚だよく花をひらく赤千葉のもの一種白花をひらく、白榴といふ黃花をひらく、黃榴といふ（博物志）漢の張騫西域に使す、塗に林安石國の榴の種を得て歸る、故に安石榴となづく

さるとりの花　（わくかせわ）祓契さるとりいばら也、山野に多く生ず、葉は柿に似て刺あり筑紫の俗かめいばらといふ

五月躑躅　（花史）杜鵑叉石巖花と名く、此花杜鵑の鳴とき、莢をひらく故に名く、（和漢三才圖會）山躑躅、山石榴、杜鵑花和名阿伊豆豆之今云さつき、木草綱目に云ふ處々山谷にあり高きもの四五尺、低きもの一二尺、春苗を生じ、葉の色淺綠、枝にして花繁し一枝數朶二月始めて花をひらき、蓮華躑躅の如くにして、石榴の花の如し、紅紫五出千葉などのものあり、按ずるに品類三百餘種に至る、四月はじめて開き、五月を盛とす、俗に五月と稱す、攝州須磨一の谷より二の谷、權現山に至て、凡三四里ばかり、遠州秋葉山の麓、乾川の兩邊もまた三四里ばかり、躑躅杜鵑花甚だ多し、夏月には滿山錦のごとし

鷺撫子　なの部撫子の條みるべし

早松茸　（和漢三才圖會）松茸は八九月の交を盛とす、他月これなし、五月出るものを俗に早松茸と名く、其味香未可ならず

蠁子　（和漢三才圖會）倭名抄に云蠁子（和名）佐之酒醋の上にとぶ小虫なり、按ずるに醬醋腐肉の中に初めて蛆を生ず、羽化して小蠅となる、身黑く豹黃色、大さ一分に通ず虫眼鏡を以これを視るに蠅と異なる事なし、然るに蠅の子にあらずして、一類二種卵生化生異也とす

五月闇　李沈カ愁霧ノ歌ニ云葉破　菅異未レ休レ滴　觸光透　長庭沙ノ色恨ノ無二長釵一千仞一割二斷　頑雲一看二晴碧一二藏玉一さみだれの晴間もみえぬ空よりや月みす月といひはしめけん　顯昭

【六月】西京寺殿妙音講　十六日(紀事)六月十六日十七日西園寺家妙音講を修せらる、今日種々の珍菓を、家の妙音天へ供す、堂上並に樂人相集りて、管絃を催す、又西園寺家の外、琵琶を彈ずるの家又此式あり、近世故ありて、十六日此を修す(體源抄)妙音院相國師長公妙音天を四條の北、室町の東に造らしめたまひ、毎月十八日妙音講を行はる云々○妙音天は辨才天也

座頭の涼　十九日(紀事)六月十九日盲人納涼會あり、是を涼といふ在京の檢挍及勾當上首一人、清楽巻に會り心經を轉讀す、頭人檢挍饗應を設け、六浪の中瞽者四人を撰みて平家を談ず、暑氣甚しく座席狹し、故に檢挍の外勾當上首其以下並に遠方の人來會するに及ばず、其外は粗二月十六日の式に同し

座摩の御祓　廿二日(社號)攝州西成郡の總社、座摩太神宮は十五代神功皇后三韓より歸陣したまふ時、神武天皇の古例によりて、御船雜波の岸浮見石の邊に寄す、神壐安鎭の爲齋したまふの地なり、神功皇后十年庚子、雜波大江の岸、田蓑の島に鎭座(浮見石は、今の御旅所の鐵坐石也といふ)祭る所、生井の神、福井の神網長井の神、右の三津井の神に竈の神、名波比祇の神、阿須波の神、二座を加へて五座とす(神名傳)に例祭六月廿二日、夏越の大祓あり、神輿御旅所に渡御なり、鎭座の舊跡、八軒屋の南石町にあり、今猶鎭座石あり、俗これを神功皇后の憩息石といふ、此邊をすべて渡邊大江の岸といふ、今の天神橋一名渡邊橋といふ、大江の岸にある故に名く、南は城内に屬す、北は免餘野、南北を田蓑の島といふ、いにしへ江口の邊まで、當社の境内にして、末社あまたあり、天正年中、圓江の側に遷しおく云云(延喜式)座摩の社○祭禮當日氏子の市民種々の練り物を出す、社司西横川の川上に床を構へ、氏子の形代を流し祓を修す

小蠅聲祠　(神代巻)然れども彼地多に螢火光く神、及び蛍聲邪神あり徴草木、戚能言語あり、云云(奥儀抄)さばへなすといふ事譬ば夏のはへの、ちりみだれたるやうにあしき神のあるよしなり、これをはらへなごむとて、六月はらへはするなり

三伏　(陰陽書)夏至第三の庚を初伏とす、四の庚を中伏とす、立秋の後、初の庚を末伏とす、是を三伏といふ

さらし井　いの部井戸替の條下に出づ

鯖釣　時珍曰青魚亦鯖に作る色を以て名くる也、大なるものを鯨魚となづく(和漢三才圖會)能登の海上に四月多し、數萬浪の爲に漂ふ所を釣せず網せずして亦獲べし

鷺草　(和漢三才圖會)奥州處々に鷺草あり、昔苗を生ず、麥の蕎苗の如し、高さ尺ばかり、六月莖を抽んで花を開く、正白色形鷺の如し、故に名く、蓮鷺草といへる一種あり、高さ五六寸葉略大く萬年青の嫩葉に似て、花白色、鷺千有餘群飛に似たり云々

櫻麻　あの部麻の條みるべし

豇豆　(和漢三才圖會)十八豇豆長大なる者本草に相混じて其莢長きもの二尺に至るといふ者是なり、夏至の前に種を下す、蔓長く籬に延、其莢尺餘りその子凡十八ばかりあり、故に俗呼で十八豇豆といふ、六七月莢の擧きものを煮て食ふ、味甘美赤白の二種有り

《き》【四月】擬階の奏　七日(公事根源)四月七日これは二月の列見の時の、成選の短册を、一省よりもてまゐるを、大臣奏聞する儀あり、列見延引の時は是も延るなり、事はてぬれば短册をもとのごとくひつに入てかきて退出す、さしたる事なし、(頭書)擬階の奏、擬は議也、誰々を加階させられよと議する奏なり

桐の花　時珍曰桐は花筒をなす、故にこれを桐と名く、其葉圓大にして尖り長く角あり尖り滑かにして毛あり、最生長し易し、花を先にし葉を後にす、三月花をひらく、牽牛子のごとし、白色花心微紅なり其木輕虛皮の色粗白し、故に白桐と名く○梧桐一名青如狼狸○宗奭か曰梧桐四月嫩葉小花を開く　蘗花の如し、云々（大和本草）梧桐又青桐といふ、古人詩歌に詠ぜしは、是なり、世に白桐多く梧桐稀也（和名抄）椅桐者三月花紫也、琴瑟に作るに堪たるもの是なり

金柑の花　時珍曰其樹橘に似て甚だ高大ならず、五月白花をひらく

枳殻の花　時珍曰木　樹の如くにして小く、高さ五七尺葉　橙の如く刺多し、春白花を生ず

鴨足草　一名ゆきの下ゆの部見べし

木芍藥　牡丹の異名也（賈躭花譜）天寶中禁中初めて、木芍藥を重んず四木を得たり、紅紫淺紅、通白、興慶池の東沈香亭に移し植と云々○時珍曰牡丹は其花芍藥に似て宿幹木に似たり

羊蹄花　羊蹄根　時珍曰羊蹄は葉の長さ尺餘、午の舌の形に似たり、夏に入て臺を起し、花を開く實を結ぶ、夏至即枯る、羊蹄は根を以て名くる也、根長蘆簇に似て莖赤し（和訓義解）俗しねの又きし〳〵といふ夏に至て小黄花をひらく、其根大黄に似たり○和俗大黄といふ者是なり蓼花ともに黄赤の二種あり、其實枝なから振り動せば、その音きし〳〵といふ

剖葦鳥　蘆原雀、蘆鷺、葭剖（和漢三才圖會）蘆虎（兼名苑）蘆原雀葭剖剖葭鷺（以上俗稱）按するに狀倭の鷺に似て大さ雀の如し、青灰の斑色、長き尾、田澤、芦葦の中に在て好んで、葦中の虫を食ふ、其鳴聲喧く亮也、云々故に此名あり

〔兼二三夏一物〕切麥　ひの部冷麥の條に出す

木布　曝賣（紀事）夏日、奈良瀑布、八講布、高宮布、木布の類を賣る云々麻布、葛布、藤布等の、いまだ瀑さるを生布といふ、木布とは生布に同し

【五月】儀方を書　（五雜組）五月五日すばかりの紙に、儀方の字を書きこれを家の四方に粘つくれば、其年蚊蠅を退く

競駈　くの部葉日の條に出す

騎射（年中行事歌合）五月五日豐樂院にて、昔は騎射を御覽じけるなり、是を馬弓といふ、天子群臣みなあやめのかつらを冠りにかけて節會の儀式ありし也、續命縷たまひける事にや、いと興ある事にこそはへれ

祇園の神輿洗　晦日（紀事）五月晦日、祇園の社に詣て、各杉の葉を受て火災を祓ふを茅祓といふ、夜に入て神輿洗あり、凡其式神輿三基所謂素盞烏命、大政所と號す、西は稻田姫少將井と號す、東、龍王女今御前と號す、大政所今御前の神輿、二基は神輿屋を出し、直ぐに拜殿に入る、少將井の神輿一基は、神輿屋より南門を出て石の鳥居より松林をすぎ、祇園町より目病の地藏堂の前を過り、鴨川の邊に臨みて、いにしへ河水に神輿を灌てこれを洗ふといふ、今その義なしといへども、舊きによりてこれを稱すしかして後再び祇園町より西樓門に入り、二基の神輿と共に拜殿に安置す其供奉四條芝居の役者、竿の先に提灯を張り外面に各姓名をしるし、高く是を舉ぐ祇園の町々も家毎に高く提灯を張る、又六月十四日祭禮終りて後、神輿三基社頭に在す、同く十八日の夜、二基の神輿は直に神輿屋に入れ少將井の神輿は今夜の式の如し、凡神輿三基黄衣の法師三人、各常にこれを預りて主宰す

金銀花　にの部忍冬の條みるべし

胡瓜　時珍曰胡瓜張騫西域に使して種を得、故に胡瓜と名く、按ずるに、拾遺錄に云ふ、隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黃瓜とす正月二月種を下し、三月苗を生す、蔓を引て葉冬瓜のごとし四五月黃花をひらき瓜を結ぶ

玉簪　（和漢三才圖會）此者葉圓く濶くして、末橋の欄干の形に似たり故に俗呼てぎぼうしといふ、五月花を開く（本草）時珍曰玉簪、一名、白鶴仙、共に花の象を以て名を命す、人家栽て花草とす、二月苗を生じて叢をなす、高さ尺ばかり、柔なる莖白菘の如し、其葉の大さ掌の如し圓くして尖あり、葉上の紋車前の葉の如し、青白色頗嬌瑩六七月莖を抽んづ、莖の上に細葉あり、中に花朶十數枚を出す、長さ二三寸、本小に末大なり、いまだ開ざる時は白玉の搔頭簪の形の如し、開く時微綻ぶ、四出中に黃なる蕊を吐き頗香し

秬蒔　（和漢三才圖會）稷いにしへは餅として每に食ふ、今は唯磨末とし團子餅として賤民用ふ

【六月】祇園會　七日、十四月（神社啓蒙）二十二社註式に、人皇六十四代圓融院、天祿元年六月十四日御靈會を始め今歲よりこれを行ふ（紀事）先七日の朝、己の刻、大鉾六本、各四條通りを東洞院の西に出づ、これを渡るといふ、六本の鉾、各稱號あり其中長刀鉾、鬮をとるに及ばず、每年魁首たり、この鉾四條通り、東の方の先にあるによりて、此鉾行ざる時は、次の鉾過る事あたはず函谷鉾を第二とす洲濱鉾或は放下鉾と稱す、ともに西の方の終にあり、故にこの三本鬮をとるに及ばず、その間に鷄鉾、菊水鉾、月鉾三本、船鉾一本並、大神山、飛天神山、古手山、太子山、山伏山、孟宗山、琴破山、白樂天山、郭亘山、芦苅山、蟷螂山、笠鉾山二本花盜人山、木賊苅山、岩戸山、舟鉾以上十七本、凡鉾一本、後山三本連行す、きのふ六角堂において、取ところの鬮の次第のごとし相傳ふ長刀鉾の長刀は三條宗近が作なりと民間瘧を患ふるもの、これをいたゞくときは病癒といふ、凡鉾每に長さ十餘丈餘、下に車輪二双を施し、左右に大繩をつけて數十人これを引、その年役に從ふ小兒、その上に乘り、首に寶冠をいたゞき、腰に羯鼓を繫ぎ、躍りをなす、左右、侍立の小童、團扇を以てこれを揮揚す、笛、銛、大鼓等の物にてこれを拍す、凡鉾每に一本一箇うしろよりゆく、その大なる物車にのせてこれを引京極を下り、五條松原通りより、各本所に還る神輿旅所に至て神を假宮に遷す、十四日巳の刻はかりに山渡る、第一辨慶山その次鈴鹿山、觀音山、八幡山、役行者山、黑主山、淨明山、鯉山以上八本昨日とる所の鬮の次第に因てこれを渡す、第九鷹野山第十船鉾鬮をとるに及ばず、此鉾三條通、西の終にあるによりてなり、西は三條より東は京極を歷四條通りを過て、各本所に還る、同日午の刻ばかりに、三社の神を神輿に移し、旅所を出づ四條通りの西を歷て大宮通御供町に至り、三社の神輿を安置し、御供を獻ず、終りて後東の方三條通りを過京極を歷、四條通りより本山に入る、兩日前後の祭式古例あまたあり略之ヲ

祇園臨時の祭　十五日（諸神根元抄）天延三年圓融院の御宇、六月十五日始て走馬を奉らる、勅樂東遊御幣等の使、左少將藤原理兼左右御馬五疋あり、左右近衞の官人供奉、この後中絕す、崇德院天治以後每年相續す（慈覺大師傳）圓融院天延二年甲戌感心院を以て師に附す、（二十二社註式）天延年中祇園の社を以て日吉の末社とす○この臨時祭は、慈覺大師寺務の翌年はじめて行はる、今猶祇園宮殿の傍に大師の尊像を置

北野九度詣　九日（神社考）北野の聖廟は天慶三年七月十六日右京七

條坊の婢文子に託して、右京の馬場に棲んと欲す、其女甚た賤して營構する事あたはず、家の側に祠す、天暦元年六月九日始て北野に移す、（滑稽雜談）當世に至て毎歳、今日九度詣と稱して、南門の外并慶松の邊、或は東向觀音の堂前より、神前まで往返九度して、神拜をなせり、是聖廟此地に遷座の日なるによれり、九度は九日の義を用ふるにや

木耳取　時珍曰木耳朽木の上に生ず、枝葉なく、濕熱の氣に生る所、木耳木蛾といふ○按ずるに此物多く梅雨の前後に生ず六月に至て木耳堅く備るこの時取ならじ

麒麟草　漢名未詳高さ尺はかり、莖葉景天に似て小く、其葉淺綠にして鋸齒あり莖の端に花を生ず、花もまた景天に似て色黄なり、夏より秋に至て其花猶あり、景天の別種か

金瓜　攝州兎原郡、田邊小路村よりこれを出す、其色黄金の如し

銀瓜　參州の產、其色銀の如し

《ゆ》【四月】雪見草　卯の花の異名なり（藏玉）おとりけりわか袖ぬれし雪見草名にこそ雪よつゝけふれゝば

鴨足草（きんすう）（本草綱目）螺鬻、虎耳草陰濕の處に生ず、人亦石山の上に栽、高さ五六寸細き毛あり、一莖一葉荷蓋の狀の如し、葉の大さ錢の狀の如し、初生小葵の葉及虎の耳の形に似たり、夏小花をひらく、淡紅色

〔兼三夏物〕内衣　（和名鈔）温室に云ふ澡浴の法、七物其七つを内衣といふ、和名由加多比良論語註に明衣は布を以て沐浴の衣とす○今は夏月平服する所の木布なり、以てゆかたと云ふ、ゆかたびらの略也

【五月】百合　時珍曰、百合の根、衆瓣を以て合成す、或は云ふ百合病を治す、故に名く、其葉短くして潤く、微竹の葉に似たり、白花四垂の者百合也○姫百合、鬼百合、袂百合、黑百合、博多百合、透百合、鹿の子百合等の數品あり、各々其頭字の部にわかち入たればたずねみるべし

【六月】夕祓　なの部夏祓の條に出ず

白雨　よたち（月令）此月土潤溽暑、大雨時行る（漢字和訓）五色線に云ふ、夏の雨、これを錦雨といふ（御傘）白雨と書ことは、天滿の森由已法橋、山谷の詩にありと申されしかば、丸、執筆の時書始し文字也（離騷註）凍雨は夏天の暴雨也

夕顏　（和漢三才圖會）彼岸の中に種を下し、立夏前後に種を移し、五六月正花をひらく、日午は凋み暮に盛也、故に夕顏と稱す、實を結ぶ早晩の二種あり○夕顏や秋はいろ〳〵のふくべかな　翁

《め》【四月】冥途の鳥　ほとゝぎすの異名（十王經）閻魔の卒、三魂を縛めて關の樹下に至るに二の鳥棲掌る一を無常鳥と名ずく、二を拔目鳥と名づく、我汝が舊里に化して、鷗鷄鳥となす怪語を示して別都頓宜壽と鳴ん我汝が舊里に化して烏鳥となり、怪語を示して阿和薩迦とならん、云々（倭名抄）鷗鷄和名（保度々木須）

〔兼三夏物〕めに見ぬ鳥　これ蟭螟をいふとぞ、證歌未考

飯鮓　（毛吹草）和州南都飯鮓○世俗また夏月これを賞する也、其製多しといへども、京の六條南都の製に限る

《み》【四月】水屋の能　四日、五日にあり（紀事）南都水屋川の南に水屋の社あり、祭る所の神二座、素盞烏尊稻田姫なり、云々此祭は伏見院の御宇、疫病流行によりて始めて行はる、いにしへは神樂等

ありけるにや、今は申樂四番あり、地人能藝を施す也、四月四日五日にあり

御形の日　かの部賀茂祭の條みるべし

三月過鳥　ほと〻ぎすの異名（躬恒抄）四月五月六月ばかりあれは、みつきすご鳥といふ○さみたれの雲間を鳴てすぐる也おもはず貌のみつきすご鳥　大伴黒主

都草　（大和本草）細草也四月黄花をひらく、花の形豌豆の花に似て色よし、葉小にして三つにわかる、仙臺萩の如くして小なり、實は莢ありて兩々相對す

蜜柑の花　（本草綱目）樹の高さ丈餘、其葉兩頭尖り、綠色にして面光る、四月小花をひらく、色白うして甚だ香し（大和本草）其花を、花橘と古哥によめり

〔兼三夏物〕短夜　明安し（月令廣義）夏至の節晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分○（古今）夏の夜のふすかとすればほと〻ぎすなく一聲に明るしのめ　貫之○寢入らぬに飯焚家也明安き　冬松

水ゑぞ　（和漢三才圖會）惠曾魚正字未詳按ずるに鯒に類して、灰色に黄を帶、頭略蝮蛇の如し鱗硬く鬣短し、下に碧の線文二三條あり、大さ五六寸より尺半に至る（糸切齒）水鰊水鱧、此節を賞す、ひらきて潮にひたし、一夜を越て生脯とし用ひ、又潮に漬たるを其儘用るを畿内にて切流し、漬流しといふ、これを水鱧といふ

水鱧　（和漢三才圖會）海鰻慈鰻鱧、狗魚和名波無、俗に波毛、唐音の略か俗に鱧の字を用ふるは甚だ非なり（糸切齒）五月の頃は潮も自然と多し、此時礎邊へよるを網にて取る也、これを水鱧といふとぞ、又一說に鰊鱧の兩種を、大阪より大和へ送るに、桶の水を湛へ、魚を漬る大和川を船にて引のほる、大和の土人鰊を第一と賞し、鯛よりも勝れりとす、彼水に浸し、大和へ送るゆゑ名とすとぞ

蚯蚓出　（月令）孟夏の月蠮螺鳴、蚯蚓出（本草綱目）木龍、地龍子、歌女等の諸名あり○時珍曰術家に云ふ蚓雲を起すべし、又陰晴を知る、故に土龍、地龍子の名あり其鳴こと長吟故に哥女といふ

海松　みるふさうみまつ（崔禹錫食經）水松狀松のごとくにして葉なし（土佐日記）おほつかなけふは子の日かあまならばうみ松をだにひかましものを（源氏葵の卷）はかりなき千ひろの底のみるふさのおひゆくすゑはわれのみぞ見む　渡氏

【五月】みづすまし　（通俗志）（糸切齒）（年浪草）等みつすましは水馬虫也とす（わくかせわ）には鼓虫の事とす、青藍按ずるに今も關東にては鼓虫をみづすましといへば、わくかせわの說にしたがはんか猶まの部、鼓虫の條、すの部水馬虫の條、たがひにかよはしみるべし

水鳥の巣　浮巣（字彙）鳥、穴にあるを窠といひ、水にあるを巣といふ（本朝食鑑）菰の集解に云ふ、菰の葉、蒲葦に類して蔓茂す、夏月、水鳥此中に宿して以て乳す

【六月】御手洗詣　十九日より晦日まで、糺の納涼山城國愛宕郡糺或は只洲に作る、下鴨の社是を糺の宮と云ふ、蓋地名に因て是を稱す、社の東に御手洗川あり、其水清冷にして溢れ流る、是祓を修る七瀬の川也、諸人此水に臨て暑を避く（紀事）下鴨の社司、川合の社の住吉の東の川邊において六月祓を修す、十九日より晦日に至りて諸人參詣し、納涼の遊びをなす、林間に假に茶店を設け、酒食及び和多加の鮨、鯉のさし身、鰻の樺燒、眞桑瓜林檎等の果を賣る、或は竹串を以て小團子、數ヶを貫き燒て、これを賣る、是を御手洗團子といふ

御祓　（神代卷）諸の神たら罪を素盞烏尊に歸て科之に千坐の置戸を以て、遂に倪徹髮を拔しむるに至て以て其罪を贖ふ、云々亦曰其手足の爪を拔てこれを贖ふ、己にして竟に逐降す、云々故に夏祓をみそぎともいふなり

御祓川　御祓をする川、古より七瀨あり（拾芥抄）川合、耳敏川、東の瀧、松ヶ崎、石影、西の瀧、大井川

道饗祭　晦日（公事根源）是は疫神の祭なり、毎年に必行はるべき事也近ごろは絶て侍るにや、鬼魅の他方より京路に入ざらん爲に、路上に供物をそなへて祭る也、鎭火、道饗の祭を、四角四境の祭と申也

水かけ合　（通俗志）にこれをいだす、是は卑賤の者、夏日炎暑に堪ず、木練のまねびにて、大勢集り、其興に乘じ左右にわかれて、互に水をあびせかけて、勝負を爭ふをいふ

茗荷笋　蘇頌曰茗荷春初て葉を生じ、甘蕉に似たり、根姜芽に似たり其葉冬枯る、根葅とするに堪たり、其性陰を好む、木の下に在て生るもの尤美也

水芙蓉　（貞享式）此名は新撰なり、芙蓉は和漢ともに秋の部に入たれども、水芙蓉といふ時は、漢には蓮の一名とす、倭には和らけて水芙蓉と讀ずとも、芙蓉に水を結びたるか、散るといふ詞をそへては、決して夏に用ふべきなり、秋の芙蓉は陸に咲て、凋てちらぬ物なれば也云々（猿蓑集）（付勺）芙蓉の花のはら〳〵とちる云々、らると云ふ言をそへて夏の句としたり、證句とすべし

水葵　（わくかせむ）本名苓、又梟葵とも水鏡ともいふ、葉は蓴に似て夏黃花をひらく、又白花のものあり、水中に生立て潔し、人家近き池には生ぜず、依て見しれる人稀なり、こなぎを水葵とおぼえたる輩まゝあり、浮蕃は秋なり、碧花なり、混ずべからず

（し）【四月】白重

（桃花蘂花）白重、表裏白瑩平絹更衣の時上下にこれを着

薔薇　時珍曰營實墻蘼此草蔓柔に靡き墻に依て授て生す、故に墻蘼と名く、其莖棘刺多く、其子簇り生じ、營星の如し、故にこれを營實と名く、又曰春軟き蕊を抽んで、既に長ずるときは、叢を成す、蔓に似て莖硬く刺多し、小き葉尖り薄く細なる齒あり、四五月花さく四出、黃心白色、粉紅の二色あり、實を結び簇り成る、生は青く熟すれば紅なり、人家に栽玩ぶもの、莖粗葉大は延長ずる事數丈、花も又厚く大に、白黃紅紫の數色、百葉八出、六出のものあり（大和本草）野薔薇花白く單也野に多し

新樹　わの部若葉の條に出す

茂り　（元帝纂要）夏草を茂草といひ木を蔚林茂林といふ

椶櫚の花　時珍曰三月木端莖中に於て、敷の黃苞を出す、苞中に糊子あり、列をなす、乃花を孕める也、狀魚腹の孕子が如し、是を棕魚亦棕笋といふ、漸く長じ、苞を出すときは花穗を成す、黃白色、實を結び、纍々として大さ豆のごとし

芍藥　蘇頌が曰芍藥春、茅を生じ、叢をなす、莖の上に三枝五葉、牡丹に以て狹く長し、一二尺、夏のはじめ花をひらく、紅白紫の數種あり、子を結ぶ、牡丹の子に以て小也、秋時根を採る○時珍曰芍藥は婥約の如し、婥約は美好き貌、此草花の容婥約たり、故に名とす○董子曰芍藥一名將離、別んとする時、くれを贈る○花の宰相、えびす草貌好草、等の異名あり、其頭假字の部にわかちて註したり

胡蝶花　（和漢三才圖會）烏扇是今云ふ胡蝶花なり、四月花をひらく、

狀鳶尾の花に似て小し、灰白色黃の紋あり、實を結ばず、一種小著我あり、小にして長六七寸、石菖の葉の狼のごとし、花もまた小し、淺紫略蒲菖の花に似て小く美し、愛すべし

白及　けの部蕙の條に註す

羊蹄根　きの部羊蹄花の條に註す

四手の田長　ほとゝぎすの異名なり、或書にいふ此鳥農業を催さんため、四五月のころ來る、田を作らば則作れ時過れば熟せずと啼云々田長の名是による○越谷吾山いふ、凡諸鳥皆三指、只杜鵑のみ四指あり、その樹上に宿するときは、二指前に向ひ、二指後にむかふ、四手の田長は是をもて名づく或は死出となすものは非也（古今）いくばくの田をつくればかほとゝぎすしでの田長を朝な〳〵よふ　藤原敏行

蜀魂　ほとゝぎすの異名なり（蜀玉本紀）望帝其臣鼈靈が妻を淫して乃ち位を禪り亡去ぬ、時に子規なく、故に蜀人杜鵑の啼を見て望帝を悲む

謝豹（五雜俎）虫也、羞を以て死す、人をみれば足を以て面を覆ふ、羞る狀の如し、此虫杜鵑の聲を聞ば則死す、故に杜鵑を又謝豹と云ふ

賤鳥　ほとゝぎすの異名なり○名にものみ山里になくしづ鳥は卯花ばかり都とやおもふ

鹿の袋角　（漢和三才圖會）鹿茸俗にいふ、袋角茸字草の生る貌、俗に似て麼菌の字とす、鹿の角初て生ず、未開かざる時に相似たり、故に然り、長さ二三寸、尖らず堅からず本草云ふ鼻にて嗅くべからず、小白虫あり、これを視れども見えず、人の鼻に入て額を虫くふ、藥も及ばず

「兼三三夏ノ物」新茶　古菜（紀事此月ノ茶を製し了て諸方の人、壺を携へ、新茶を傾納し、然後に壺を山岑清冷の地に寄て、盛暑土川の暑濕を避く、洛外愛宕山宜とす、凡茶を製するに前後の次第あり、故に摘茶の時、焙爐の時擇茶といふ○古茶とは新茶に對するの名、新古とも夏季とす

紙帳　紙をもて作りたる蚊帳なり、貧しき者是をもて蚊を避

紙帳賣　（川捨箱）飛鳥川に云ふむかし夏近くなれば紙帳うり、冬になればてんとくじ（紙衾なり）といふ物を商ひたるが、今はすくなし、云々此飛鳥川は享保出生の老人の筆記なれば、元文寛保の頃までは、此商人來りしなるべし○（同の岡）（延寶八年刻）『夕立やあるが中にも紙帳賣　立澤

虵鮨　（毛吹草）越中の松皮鮨、俗虵の鮨といふ、龍に似たる故也

鹽鳥賊　（南越志）其性鳥を嗜み、自ら水上に浮ぶ飛鳥是を見て死せりとし、これを啄む、乃ち巻取て水に入これを食ふ、因て烏賊と名づくいふこゝろは烏を賊害へば也（わくかせわ）夏季に用ふるは、邊土山中などの、海濱に遠き田舍の事なり、江戸大阪等の繁花には、生烏賊春より四五月に至り、最中ありて、鹽烏賊を用ふる事なし

新麥　（本朝食鑑）早きものは三四月熟し、晩きものは五六月熟す、是新麥の候なり

純菜　（和名抄）蓴（和名沼奈波）（齊隆類書）水中に生ず、葉鬼葵に似て水上に浮ぶ、花黃白子紫色、三月より八月に至て、莖細く釵の股の如し、黃赤色短長水に隨て深淺あり、名づけて純菜といふ、啜ふにまたり、味甘く寒なり、十月漸く粗硬し、十一月蔕泥中に有り

紫蘇　時珍曰蘇は葅に從ふ、音酥、舒暢なり、酥の怯飾暢にして氣々行り、血を和す、これを蘇といふ、紫と云ふは白蘇を分つ也

蟭螟　蚊の睫に巣をくふ虫なりといふ（傳燈錄）仰山洪恩禪師に問ふ、如何にして見性を得ん、師の云たとへば蟭螟虫の蚊の睫にあり、巣を作るがごとし

【五月】續命縷、朱索、條達　ちの部長命縷の條下みるべし

菖蒲刀　黑川道祐曰、端午に用ふる處の木刀、或は菖蒲刀といふ、其形の相以たるを以て、節物に准へてこれを稱、兒輩腰間に横たへ、端午石戰の戯の後に、多くこの、刀を以て相戰ふ、これを菖蒲切といふ菖蒲と勝負と和音相近し、一戰勝負の義に寓ずるか

神水　（金門記）重五の日午の時、雨ある時、急に一竿の竹を破れば、竹節の間に必づ神水あり、雫を取て獺の肝を以て丸ずれば、心腹の積聚を治す（紀暦撮要）今日雨ふるときは來年大に熟す

新宮祭　五日三井寺の山中に於てこれを執す、祭る所の神、新羅明神なり（元享釋書）新羅明神は、天安二年、圓珍師（智澄大師）船を浮て唐より歸る、洋中忽に老翁船絃に現て曰、我は是新羅國の神也、誓て師の教法を護持し、慈氏の下生に至らん、語已てみえず○三井寺山下の土人、これを新宮祭といふ○大津所々祭多き故にこれを關祭と誤りおもへる者あり、關祭と稱するものは、貴船明神の祭なり、貴船の祭、關明神の祭ともに、逢坂山にありと其說迭に異也、猶考ふべし

賑給　（公事根源）これはいやしき民に米鹽などを給ふ也、京中の條理小路を分て撿非違使承りて是を引、米鹽の勘文なと申ことの侍る也、大臣陳につきて是をさだむ、明欽天皇の御宇よりはじまる、貧窮の者給ふこと禮記月令にも侍るにや（西宮記）東の手は愛宕寺、此の手は右近の馬場、西の手は右兵衞の馬場

諸鳥毛を革る　はの部羽拔鳥に條に註す

麥門冬の花　（大和本草）葉厚く五月に莖立て、頭に穗の如く、長く連りたる紫花をひらきて實なる秋熟す

下毛の花　（大和本草）繡線菊小木なり、叢生す、臘月早く萠生す、四月花をひらく、あつまり開きて盛久し、眞紅あり淡紅あり、愛すべし、葉はすゝかけに似たり、漢名未詳、

越瓜　時珍曰越瓜地を以て名くるなり、俗に稍瓜と名づく南人菜花と呼ぶ、三月種を下し、苗を生し地に就て蔓を引、青葉黃花は秋の間に實を結ぶ

新茄和　世人茄子の料和、豇豆の棒和といへり、其形狀粹に似棒に似たる故名とす、しんきしんこ、五音相通なり

白ばえ　くの部黑ばえの條に註す

【六月】勝曼參　朔日（元享釋書）推古天皇十四年秋七月、太子（聖德）御に對して勝曼經を講ず太子曰吾昔勝曼夫人たる時釋迦世尊此經を說く、故に吾よく此經を講ず、講已て蓮花を雨らす大さ三尺、乃ち義疏を製して世に傳ふ○當寺勝曼院の號、太子此道場に於て又此經を講じたまふ故に寺號となる、攝州四天王寺の西門、西北、百步ばかりにあり、本尊愛染明王、每年六月朔日開帳、これを愛染參と云ふ

神今食　（江次第）六月十一日神今食（其式略す）行幸あるときは中和院にて行ひ、行幸なきときは神祇官に於て行はる（公事根源）神今食年に兩度なり

志渡寺祭　十五日より○讃州十七日迄寒河郡、補陀洛山淸光院志度寺（眞言宗）（緣記）本尊十一面觀世音、是補陀洛界觀音の御直作なりといふ、本尊の御衣、木繼體天皇十一年、近江國高島郡三尾崎山白蓮華谷より流出湖水に漂ふ事七十年、崇峻天皇御宇、湖水より又宇治川に

流出、山城國淀の津に止る事三ヶ月、夫より海中に流出、漂蕩する事數十年、推古天皇三十三年、當浦の高島と云ふ小島の磯邊に流れよる圖子尼官法といふ者、彼木に瑞光あるを見て引あけ、旬月を經て觀音大士童子と化現し、十一面の尊像を刻玉ふ、暮より子の刻に開眼等の事終と、云々寺說に云ふ、この堂は、藤原不比等(淡海公)當浦の海人に契を結び給ひ、不背の珠を龍宮城よりとり返したまふ、その海人の死體を葬りし所也、故に志渡寺いにしへは死渡寺といふ、天武天皇十一年(辛己)その暮に、精舍を建立し、死渡道場と名づく、抑志渡祭は房前大臣、天平九年丁丑四月十七日薨ず、房前公當浦に下り給ふ時、庶民に慈悲をたれ玉ふの所に、庶民その恩澤を報ぜん爲、六月十五日より十七日まで三日夜の間、かの海人の墓に於て、水祭をなす、此日諸人交易して市をなす、これを祭といふ、房前大臣の薨去は四月なれども、農業の障ある故に、六月に祭る也、今日國主警固の義あり

溽暑 (月令)季夏土潤ひて暑し、注に云ふ海は濕なり、土の氣潤ふが故に蒸鬱として濕暑となる

清水 (說文)岩間に出るを瀞といふ、瀞は清徹る小石間にある也、(御傘)清水は雜也、結ぶといへば、夏也、堰にも夏也、云々(貞式享)清水はむすぶといへる詞をそへて、古抄には夏となせれど、水の清涼を稱すれば、其詞にも及ばざらん、云々堰結ふの詞に及はず、清水とばかりを夏季とせしは、例の蔗門の新撰としるべし

白梵天 和州田村の梵天瓜、此種南都にもまたあり

醬油造 (和漢三才圖會)醬油、倭名比之保、本邦の俗油の字を加ふ、醬油は本草に載る豆油なり

《ゑ》

《ひ》【四月】翡翠の簾 あの部青簾の條に注す

平野祭 此祭今絶たり、祭る神五座にして、北野天神の西にあり、貞觀元年十一月九日始て祭祀あり、寛弘元年四月十日臨時の祭ありしとぞ

廣瀨祭、龍田祭 四日○廣瀨の社は、大和國廣瀨郡河合村にあり○龍田の社は同國平群郡龍田にあり(公事根源)祭の日は慶務なり、月に二度行はる、使は前日たつ大忌風神の祭といふ是なり(增山の井)廣瀨は大忌の神、龍田は風神なり、風水の難を除き、豐年の祈に公より祭らる、云々

日吉祭 山王祭なり、さの部みるべし

美人草 (名花譜)花四辨色艷曙栗に類して小なり(古文前集)曾子固か歲美人草の詩の題注に云ふ、項王亡滅して虞姬自刎ぬ、其墓の上の草を人呼で美人草とす、同く詩に云ふ青血化爲二原上一草一〇一種虞美人草といふ者ある異種也

〔兼三三夏ノ物〕單物 (釋名)衣の裏ふきを單衣といふ

日傘 夏日日を禦ぐ傘は山紙或は青紙を以てこれを張荏の油を用ひすこれを日傘といふ

冷麥 きり麥(青箱雜記)湯餅温麵也、凡麵を以て食とす、これを煮るを皆湯餅といふ(貞享式)吟麥冷汁この二品は、京家の式目に多くは秋の季となせるは、察るに冷の字の惑にや、夏は涼を好み、秋は冷を惡む、天地自然の道理にして、此等は夏と決すべし

冷汁 煮冷夏月羹を調和して、其器ともに冷水に漫し、氷のごとくならしめてこれを食ふ、是を煮冷冷汁といふ

干鱧 (和漢三才圖會)鳳海鱧、海鱧、十頭相聯て白燕に作り、形片板

の如きもの夏秋これ賞す、繊く刻み酒醬に和して膾に代ふ

干河豚　（同上）名護屋河豚なり背黄赤にして白點あり、棘鬣なく腹白し、味美ならず、惟皮を剝てこれを乾し、皮河豚と名づく夏月羹として是を食す

蛭　（同上）蛭は水中の濱に生ずる也また海帶昆布を、久しく雨水に浸すときは、共によく化して蛭となる、性石灰食鹽を忌む、試に鹽を蛭に點れば盤縮て死す

蟾蜍　蘇頌曰、蟾蜍多く人家の下の濕處に在り、形大きく、背上に扉磊多し、行事極めて遲く緩し、跳躍事あたはずまた鳴ず（抱朴子）蟾蜍千歳、頭上に角あり腹の腹の下の丹青を肉芝と名づくよく山精を食ふ人これを食ふ事を得れば仙となるべし、術家取用ひて霧を起し、雨を祈り、兵を辟け、縛を解く、今技ある者蟇を聚て戲とする、指使をきく

晝寢　（笈日記）ひや〳〵と壁をふまへて晝寢かな　翁　支考評曰、此句、いかに聞やと翁の申されしかば、是は只殘暑とこり承り候へかならず蚊屋の釣手などとらまへゐながらおもふべき事をおもひゐける人ならん、と申侍れば、此謎、支考にとかれたりとて笑ひてのみはてぬよかし云々

【五月】辟兵繒　ちの部長命縷の條みるべし

鬪百草　（劉公嘉話）唐の中宗の朝安樂公主、端午に百草を鬪はしむ、其物の廣きを欲し馳驛してこれを取らしむ又他の爲に得らしむ事を恐て其餘を剪棄○歐陽公鬪レ草、詩ニ云共ニ鬪フ今朝ノ勝盈レ檐ニ百草香シ

ひをりの日　さの部左近の眞手當の條に注す

未央柳　（園史）金絲桃その莖幹二三尺、叢生す其葉柳に似て梅雨ふる時黄花をひらく、桃に似て蘂長くして金糸の如し

姫百合　時珍曰、山丹、其葉長うして狹く尖り、柳の葉の如し紅花六瓣四に垂ざる者山丹なり、四月花を開く根少にして瓣少し

菱の花　時珍曰芰一名、蔆其葉支、散故に字支に從ふその角稜峭し、故にこれを蔆といふ、三月蔓を生じて延引、葉水上に浮ぶ、扁にして尖あり、光面鏡の如し、葉の下の莖に股あり、蝦股の如し一莖一葉兩々相差ひて蝶の翅の如し、五月小白花をひらく、日に背きて晝合し宵炕す、月に隨づて轉移す

穆蒔　時珍曰穆は乃粘ざるの稱、山東河南も亦五月これを種

枇杷　（廣示）枇杷は冬華さき、實黄にして鷄子の如し、小さきものは杏の如し、味甜く酢し、一書に云ふ其本隱密婆娑として愛すべし、四時凋まず、葉驢耳の形をなす、毛あり、盛冬白花をひらき、三四月に至て實をなす、毬を作して黄梅の如し、皮内甚だ薄く、味甘く核小栗の如し

【六月】氷室　（日本紀）仁德天皇六十二年五月、額田の大中彦皇子鬪鷄に獵す、時に皇子山上より望て野中を膽玉ふに物あり其形廬の如し仍て使者を遣はして視せしむ、還り來りて曰、窟なり因て鬪鷄稻置大山主を呼んでこれを問て曰、其野中にあるは何の窟ぞ、啓して曰、氷室なり中略、皇子に其氷を將來りて御所に献ず天皇、これを歡ぶ、是より以後、毎に季冬に當て必氷を藏め、春分の始に至て氷を散る

氷室御調　（公事根源）三水司四月一日より、九月の月盡まで、是をたてまつる

氷のおもの、氷水　氷のおものとは、熱月なれば、御膳にも氷を用ふるをいふ氷水とは源氏物語にもみえたり、註に云ふ氷水也と、

云々（枕草紙）いみしてあつきひる中に、いかなるわざをせん、扇の風もぬるしひみづに手をひたして、云々○室の氷のとけたるを、ひみづと云ふ

氷室の雪　氷室の雪とは、氷室にかこひおきたる雪をいふ也

氷室の櫻　青藍按ずるに、氷室作る山のいと寒ければ、季夏の、暑氣をうけて漸く咲いでたる櫻をいふなるべし（千載集）小野の氷室山のかたに、殘りの櫻たづねける時『下さゆる氷室の山のおそざくらえのこりたる雪かとぞみる　仲正（奥の細道）（芭蕉紀行）六月九日湯殿山に登られたる條に云ふ、腰かけて暫時やすらふほと三尺ばかりなる櫻のつほみ半ひらけるあり、降つむ雪の下に埋みて、春を忘れぬ花のこゝろわりなし

氷室守　六月を櫻にしるや氷室守　蕉太

一夜酒　（公事根源）一夜酒とはけふつくれはあすは供する也一夜をへたる竹葉のさけなれば、一夜ざけと申也、又こざけとも申也、あまざけ同事（本草綱目）竹葉酒は、諸の風熱病を治す、心を清くし意を暢の如く酒を醞して飲むの延喜式醞酒は米四升淡竹の葉の爽汁にて、常の薤汁二升を和合して醞し造り、醞九升を得、此を以　奉とす、日に造る事一度六月朔日起て七月三十日に盡く、日に供事六升

鎭火祭　（公事根源）ト部氏の人、火をうちて宮城の四つのすみにて祭る事あり、火災をふせがんためとかや、此祭禮の間秘術多く待る

日盛　杜甫苦熱行ニ曰祝融南來、鞭二火龍一火旗焰々、燐天、紅、日輪當午ニ凝ネ不レ去萬國如レ在ル紅爐中

雲雀鷹　ねの部練雲雀の條に出づ

火蛾　（和漢三才圖會）燈蛾、燭蛾俗云ふ火取虫、按ずるに蝶の小なる者を蛾とす、其種類亦多し、蠶の羽化するものを蠶蛾とす、燈蛾多く雀の糞より出づ、大さ五六歩黄蝶に似て色枯倦くもの也、夏の夜燈燭をみる時は、火を奪はんとほりするがごとく數回りて終に燈油中に投て死す、故に愚人、色欲貪欲の爲に、身命を抛つ、以て燈蛾に譬ふ

百日紅　（格物論）紫薇花俗に怕痒花と名く、樹身光滑也、高さ丈餘、花瓣紫鬚蠣跗茸萼、赤き蓼葉相對す、四五月始て花さく、開謝接續して六七月に至るべし（三才圖會）紫薇俗に百日紅と名く其皮を搔くときは自ら動故に怕痒花と名く（大和本草）紫薇花を以て百日紅とす、又猿滑と號す

皷子花　時珍曰其花、瓣をなさず狀軍中に吹所の鼓子のごとし、故に旋花鼓子の名あり（和漢三才圖會）此花牽牛花の如にして、粉紅色、日干に盛んにして且暮に萎む、故に俗牽牛花を以朝顏と稱するに對して此を晝顏と名く

未草　本草に時珍曰段公路北戸錄云ふ睡蓮あり、萍蓬草のたぐひ也、其葉荷の如くして大なり、其花蕊に布て數重、夏の晝に當りて花をひらく、夜は萎みて水に入、晝亦これを出す○和俗ひつじ草と稱す、上の說のごとく、未の時より花萎む故ともいへり、汀湖に多し

射干　からすあふき也かの部みるべし

瓠花　時珍曰壺盧數種あり名狀一ならず其實一類、各色あり、並に正二月を以て種を下す、笛を生ず、蔓を引て延縁す、其葉冬瓜の葉に似て稍圓にして柔毛あり、軟きとき食ふべし、故に詩に云ふ幡々瓠葉采之烹之五六月白花をひらく實を結ぶこと白色、大小長短、各數種色あり、大なる者は甕盎とすべく、小なるもの瓢樽になすべく、要舟として水に浮ぶべく、笙として以樂を奏べし

莧　（和漢三才圖會）莧藍に似て微圓く皺あり、六月細花をひらき穗を

なす子扁して光り黒く鷄頭子に似たり、人莖葉を採て蔬とす、赤莧は莖葉赤紫色、高きもの三四尺略雁來紅に似て美也、五色莧亦十葉錦に似て共に庭園に種て愛へし(箋繡輪)黍、莧此二種は夏季の柔菜也

姫瓜　(和漢三才圖會)姫瓜は俗稱、葉瓜五六月小く瓜を生ず、大さ二寸はかり、圓して淺青色、味苦く食ふべからず、熟するときは稍く黄微甘しといべとも食ふに堪ず(雍州府志)九條の田間より出づ、大さ梨のごとし其色至て白し、故に姫を以てこれを稱す、女兒この瓜を求て少し莖をとゞめ、白粉を其面に傳、墨を以て鬢髪眉目口鼻を畫き、水引を以て其莖を結ひ提携て玩具とす(續猿蓑集)姫瓜や袖に入てもおもからす　至曉

醬造　時珍曰大豆の醬按ずるに劉熙が釋名に云ふ醬は將也、よく食物の毒を制す、將の暴惡を平ぐるが如し○製法略レ之

引飯　ほの部ほし飯の條に出す

冷水賣　江戸の街頭に手桶一荷をおろし、炎暑に冷水をうる

《も》【四月】夏孟旬　扇を賜、扇の拜(年中行事歌合)夏冬季あらたまる始に、臣下に御酒をたび政をきこしめす也、旬とはすへらぎの政にのそみ玉ふ也、旬にはさま〴〵の義あり、内裏あたらしく造られて初て南殿にて行はせたまふをは新所の旬と申にや、此四月の旬には内侍扇をもて上達部にたまへば、ひさをつきて、請取作法など有にや

杜本祭　上の申○河内國安宿郡、國分村、祭る神二座齊大人神、經津主の命にして、香取大明神是なり(公事根源)杜本祭四月上の申日也、神社河内國にあり、午の日使たつ、仁和五年四月に祭初る(河内志)杜本の神社は、いにしへ古市郡、駒ヶ谷村にあり、式に安宿郡に屬すとあれども、一向その所しれず、駒ヶ谷村と國分村と領續きの故にや或人云ふ國分村火の谷と申ところを、當時杜本の宮と唱へ來る也、古代は杜本千軒とて、坊舍千軒ありて勅使參向ありしよし申傳る也その近邊土中より、古瓦を折々堀出すといへども、社頭と申事もみえず、大木の樟あり、その木に藤かつらまとひ春は花咲きたれ、常ならぬ木立ゆゑ神木と申傳るのところ、四五十年以前山田の日蔭となるを以て、山の持ぬし善九郎といふ者、件の樟を伐かゝりしに斧はぬけて柄ばかり殘り、俄に山一面に燒出、件の斧は善九部が家のうちへ飛來る程なく善九郎か妻病死す、火の谷明神の、影向したまへるにやと村中騷動してとりあへず、小祠を建て、神樂を奏し、神慮を慰め奉りぬ、この祟りによりて、杜本の宮の事、穿鑿するの所、善九郎方に古き書物の證とすべきあり、件の善九郎も、この節次第に死果やうやく九歳の孫一人殘れり、よりて親族どもうち寄書物穿鑿して、とり出したるなりその木を伐にやとはれたるものゝ末孫、今に明神と異名を呼來れり、近年國分村の枝鄕ひかん所と云ふ處より信仰し奉り、小社の上に覆ひをしつらひ九月九日御酒燈明を捧げて祭ると也○延喜式に杜本祭夏四月冬十一月並に上の申の日、之を祭るよしみえたりいかさま古き神社ながら今考ふべき物なし善九郎より取出せる筆記はいかなる事が記しありけん、見まほしくそおほゆる

諸蔓　かの部加茂祭の條に出ず

文字摺花　(大和本草)莖の長さ尺にみたず、葉は百合のごとくして狹し、四五月に花をひらく、紅白色、花連なりて小也、一莖に十餘つらなりひらく、紫蘇のごとし、園に植て賞翫す

【五月】もとゆひ草　或人云ふ粽也と、證哥未考

藻苅、藻舟、藻の花　時珍曰藻は水草の文あるもの、潔淨澡浴するがごとし、故にこれを藻といふ、二種あり、葉の長さ二三寸、兩々

相對す、卽馬藻也、葉細かにして、絲及び魚の鰓の狀の如くにして、節々に連り生ず、卽水蘊なり、俗に鰓草と名づく(和漢三才圖會)時藻水蘊、和毛毛、一に曰毛波海人船に乘り出て、繩を以て腰に繫ぎ、水に沒てこれを苅取て田に投稻を養ふ

餅梅　名義未詳、梅子は梅雨の時熟す、其肉黃、熟して更に滓なく、液多きもの、疑らくは是を餅梅といふへくや、和俗果穀の類の粘るものを呼で餅とす此を云ふか

揉瓜　越瓜胡瓜ともに、縱に切劈、横に割て、鹽を糝て、これを洗ふ水を去りて、酣に和して食ふ、これを揉瓜といふ

《せ》【四月】千團子　十六日〇一本に千誕子に作る、江州三井寺の鬼子母神へ、今日諸人參詣す、この神一千の子あるを以て、亭るに餌一千を供する也、故に千團子といふ

石薢　一名いわしのねいの部みるべし

【五月】赤靈符　抱朴子曰、或人兵をさくるの道を問ふ、答て曰五月五日を以て赤靈符を作り、心前に着

蟬　初蟬、空蟬(格物論)蟬兩翼啄長くてて、腋の下にあり、或は以爲口なし、腋を以て鳴者也、云々種類多し、枚舉するに遑あらず略之、〇空蟬すべてこの蟬をもいひ又もぬけたるをいふ事古歌ともに多し

石竹　なの部撫子の條に注す

栴檀の花　楝也、あの部みるべし

石菖　時珍曰石菖、水石の間に生ず、葉に釧脊あり、瘦根密節、高さ尺餘あるものは石菖蒲也、人家砂を以てこれを栽ること一年、春に至て剪洗ふ、愈剪ば愈細になる也、高さ四五寸葉韮の如し根匙の柄の如し、粗き者亦石菖蒲也、甚しきときは、根の長さ二三分、葉の長さすばかり、これを錢蒲といふ是なり、按ずるに、曜仙神、隱書に云ふ石菖蒲一盆を几上に置、夜の間書を視る時、煙を取て目を害するの患なし

【六月】施米　(公事根源)施米、東山西山北山などいふ所の山寺に侍る、たつきなき法師ばらに米鹽を施さるゝ事なり、五月賑給、六月施米は、みな貧窮孤獨の者に米をたまふなり、試にありがたき事なり

蟬の諸聲　多く鳴たつるをいふ也(玉吟)鳴立てをやみもなくや木隱れの雨よりしげきせみのもろこゑ　後柏原院

蟬時雨　蟬の多く鳴立るをいふ也、按ずるに蟬の鳴聲の多くかしましきを、時雨になぞらへていふなるべし

蟬の脫　脫は虫の皮を解をいふ也、是を蟬退、梧蟬といふ

せごし鱠　をの部沖膾の條に註す

《す》【四月】住吉卯の祭　初卯(紀事)四月卯の日、攝州住吉祭、相傳ふ卯の日此地に垂跡なりと、この神輿一基瑞籬の外より、三の門に至りて遷幸す、神主及禰宜各卯杖を持、これをわすれ草といふ〇祭の日竹馬、煎餅を鬻く者多し

菅の宮祭　中の午(神社啓蒙)小津の神社、近江國野州郡に在り、祭所の神三座所謂大宮二の宮三の宮是なり〇神體は宇賀魂也此を世に菅の宮祭と稱す

菅笠擔　くの部關白賀茂詣の條に注す

篠の子　(和漢三才圖會)篠は小竹、叢生して草の如し、俗に笹の字を用ふ、凡篠に數種あり、馬篠、兒篠、燒葉篠、五枚篠此等の筍、皆篠

の子なり、又一種長間竹俗に奈伊竹といふ長間竹、篠笹諸州ともにあり、味ひ苦み多くして甜み微なり、多く食ふに耐す

〔兼三三夏物〕涼し　（風土記）仲夏長風扇ぐ暑注云此節東南の風常にあり、俗に黄雀長風と名づく

鮨　（和漢三才圖會）鮨を醸る法鹽少し糝しこれを壓す事一二日にして熟る○字治丸、蛇鮨、はたゝ〳〵鮨、釣瓶鮨、早鮨、一夜鮨、飯鮨、月夜等の鮨あり、其頭字の部にわかちて註したり

雀鮨　（毛吹草）攝州福島の雀鮨是江鮨といふ魚なり、その大さ雀ほどありて、魚の腹に飯を多く入たるが、膨にて雀の形によく似たり、依て名とす

馬歯莧　（倭名抄）馬莧（和名宇萬比留○時珍曰、馬齒莧、其葉比蚑して馬の齒の如し、園野にこれを生す、六七月細花をひらき、小く尖る實を結ぶ（和漢三才圖會）性剛強して倒擡の間に懸るに、日を續て猶活す、景天草の強が如し（大和本草）此草を軒にかくれば、馬虻内に入らずと云々

〔五月〕住吉の御田植　廿八日（攝陽群談）攝州住吉神田を植る以て神事を行ふ也、相傳ふ、神功皇后三韓を征したまひ、歸陣のとき長門國より植女をめして、五穀農業の事を世に廣くしたまふ、その季乳守の遊女となりぬ、これによりて遊女今に早をと女をつとむといへり（紀事追加）泉州境乳守の妓女のうち約するところの、奉公年季明けたる、女三人來りてこれを植、今日神田を植てのちは妓院の暇を出すといふ云々住吉の御田は、古き畫にもみえて、紅染の千早に似たるを著し、赤き袴に市女笠をいたゞき、是古代の姿の残れる也、今はたゞ植る眞似をなすのみなり

水馬虫　漢名水黽（わくかせわ）其身細長く五六分ばかり黒き虫也、長さ四足あつて、身は水につかず、水上を馳る事馬のごとし、依て水馬と名づく、幾内西土にて飴賣江東の兒童シヤンシホといふ、筑紫にてアメカクといふ、其臭地黄煎の臭也、關東、ケンボツホウ○其色黒赤にして鼈條に似たり、故に鼈虫といふ、一説に此虫味甘く、飴に似たり故に飴賣○今江戸の方言にアメンボウといふ

忍冬花　忍冬也にの部みるべし

透百合　（和漢才圖會）白黄紅の數種あり、上に向ひてひらく、花瓣肥明にして美也奥州より出づ

末摘花　への部紅藍の條に注す

李　（八閩通志）食貨の部云ふ、李其名一ならず、白李赤、鶯黄と名づく、實清く脆し、五六月熟す「臙脂李」は皮肉共に紅なり、味甘く夏熟す、琥珀李は皮紅にして肉黄臙、味徹澁し秋熟す

〔六月〕住吉の御祓　同火替　晦日攝州住吉の社僧御祓を修する也（紀事）六月小なれば二十九日を用ひ、大なれば晦日を用ふ、當日毎年神輿の舁の輩、住吉の松原に宿し、潮に浸る垢離をなし、今朝神輿（一基）を宮前に寄す、社僧祝詞を誦して神をうつし、しかして後社司六七十員騎馬にて奉供す、既にして神輿堺の御旅所に到る、是より先社僧六七輩、素絹を着し、茶麈笠をいたゞき、騎馬にて神に先だちて堺にいたる、卽神を旅所に遷して、又祝詞を誦す、夜に入神輿住吉に還幸、堺の市民、手毎に炬を點してこれをむかふ、迎送相連りて、白晝の如し、これを火替といふか、この日大和國神妙寺山の土をとつて神輿にそなふ、これを堺の宿院神事、あるひは名越の祓、または荒和の祓といふ也

菅貫　ちの部茅の輪の條に詳す

納涼　夕すゞみ橋すゞみ(嵯峨集)すゞみあふなき石にのぼりけり　野坡　(五元集)千人の手を欄干や橋すゞみ　其角

涼臺　(開元遺事)長安の富人暑、伏の中ごとに、林亭の中に於て、畫柱を植、錦を以て結び涼棚とて、座具を設け、名妓を召で、同しく座せしめ、遞に相避暑會をす

すゞしき玉　(秘藏抄)空はれていさごをてらす月の色をすゞしき玉の影かとぞみる(聞詠)燕ノ昭王招涼之珠當三沙月一分自得一〇すゞき玉は燕の招涼珠といふ也

菅苅　(和漢三才圖會)菅、本綱に載す、蓋荊三稜の屬ひにして、根異なり香附と蚊張釣草との異がごとし、按するに、菅の葉は茅に似て滑澁にして莖に白紛あり、云々〇今云ふ菅は葉に劍脊ありて硬く靭す莖の本白し、別に一莖を拔んで穗を出す、六月葉を苅て乾せば、白色笠に縫ひて美なり

蟭　時珍曰其狀蠶の如し、大さ身短く、節促り、足長く毛あり、樹根及び叢土の中に生ずるもの、外黄内黑舊き茅屋の上に生ずるもの外白内黑皆濕熱の氣、薰蒸て化生す夏より秋に入、蛻て蟬となる

水飯　洗飯、源氏物語〈常夏卷になほみきまるり、ひみつめして、するにんなど、とりゞ〳〵にさうどきつゞくらふ、云々〇善〇云、千飯などの類水つけ〇或御說にするはんとてひめとも云ひ飯をあつくしてあらひで食ふ物也

〔追加〕《い》【五月】犬仙茱　(月令博物筌)和州の山中にあり花なくして實を結ぶ、枇杷に似て小さし、小兒好んで喰ふ

《は》【四月】樊噲草　(大和本草)〈和品〉是亦俗の名つけし處なり葉路の藥に似てまたあり黄花さく

《ち》【四月】茶筅草　麥の事を茶筅草といふ、穗の形を見立いふにや

【五月】朝露草　(糸切歯)下學集の錢明露草と出す、一名銀錢花といふ、花の形楮に似て小く、色白く青くうるみあり、底に黄紅のきほひあり、葉は三出五出にして西瓜の葉に似たり、高さ二尺ばかり、朝に開き夕に凋む

草仟蠶　異名を甘露子、土蛹、滴露、地瓜子といへり、五月根を堀蒸して食ふ、味百合の如く、根老蠶の如し、故になづく

《る》【四月】盧陀草　月令博物筌及び四季部類等、これを四月の部に出す、是はヘンルウダ也、唯ルウダといふは、秋のはじめ花さき、秋の季みのる(大和本草)ヘンルウダ近來紅夷より來る、是紅夷ルウダなり、葉は細にして莖のもと木のごとし、三四月黄花をひらく、四出にして一片の間、おの〳〵一蕊を出す、花の心に實あり、岩梨の實に似たり、夏實のる、その年子をまけば來年花咲實なる、その葉莖根おの〳〵枯ずこの草常のルウダの性に似て、性猶すぐれたり、常にルウダより惡臭甚し

《を》【四月】車前草の花　秋の部に注す

《た》【四月】橙の花　喜祝に用ふるを以て正月の部にも載たりその條下に注したり

《ね》【五月】鼠もちの花　數珠をいふ

《な》【五月】刀豆の花　秋の部に注す

《む》【六月】葎茂る　(和漢三才圖會)木綱に葎故壚、道の旁に生ず、二月苗を生ず莖に細き刺あり、葉節に對して生ず、一葉五尖

微莨麻に似て細き齒あり、八九月細き紫花を開く、子を結ぶ（續虛栗）甲斐山中山賤のおとかい閉る葎かな　芭蕉

《う》【五月】茴香の花　秋のうの部茴香の字の條下に注したり

《く》【四月】草下毛　（大和本草）木にも下毛あり其花は相似たり、初夏細き紅花を發く、一朶に群り開くこと、敗醬の如し○しの部に出せる下毛は木下毛なり

苦草　此詞（四季部類）にみえたり、青藍按ずるに、苦草は苕草の誤りくきははゝきゞの欠畵せる也、よりて爰に贅して初學の惑ひを解く、但し苕草ははの部に注したれば、たづね見るべし

《や》【五月】蛇狀子　（本草啓蒙）蛇床子、古說ヤブシラミを充つ、自別也、ヤブシラミ卽竊衣爾雅竊衣、注に云ふ芹に似て食ふべし子の大さ麥の如し、兩々相合し毛あり、人の衣に着く

【六月】金龜子（たまむし）　（大和本草）北戸錄甲蟲也、五六月草蔓に生ず、南人收て以粉に養ふ、本草蟲蠡の付錄にのせたり、婦人白粉の器中に入おく、雄は綠色光あり、雌は灰色光なし、形狀は飛蛾に似て長し、翼あり、額に兩角ありて長じ、六足あり、俗玉虫と云ふ

《あ》【四月】青木の花　花紫黯色にて美ならず葉は桃の葉に似て大なり、實を結ぶはじめ青く熟すれば紅なり、故に漢名桃葉珊瑚といふ

【五月】あつめ汁　五日そら豆燒豆腐干河豚などさま〴〵の物を汁に燒て食ふ、これをあつめ汁と云ふ

【六月】蘆茂　しげりあひて江の水細き芦間かな　紹巴

《さ》〔兼三夏物〕曝　きの部木布の條下に注す

《み》【六月】水の粉　水の粉は、麥をこがさず、水飛して製したるを、暑中砂糖に和し、冷水に浸し飲

《し》【五月】神曲製　（本草）主治、水穀、宿食徵結、積滯を化す、時珍曰、葉氏水雲錄に云ふ、五月五日或は六月六日、或は三伏の日、白麪（百斤）青蒿の葉汁（三升）赤小豆の末杏仁泥（各三升）蒼耳の葉の汁、野蓼の葉の汁（各三升）汁を用ひて麪豆杏仁を和して餅に作り麻の葉或は楮の葉に包み、掩、醬黃を造る法の如し、黃なる衣の生ずるを待て晒しこれを收む

蕺菜の花（どくだみ）　花四葉にして白し、葉の臭甚わろし、家圃に植れば繁茂して後は除きがたし、篤信翁曰、駿州甲州の山中の村民、どくだみの根を堀り、飯の上におきむして食す、甘しといふ

《ひ》【六月】日向葵（ひまはり）　（大和本草）一名西番葵、花史には文菊と云ふ日向葵も漢名也、葉大に莖高し、六月に花さく、頂上に只一花のみ、日につきてめくる、花よからず最下品也只日につきてまはるを賞するのみ（猿蓑）日の道や葵傾く五月雨　芭蕉

《せ》【四月】錦葵　（大和本草）冬葵に似て別也、冬葵は葉に岐ありて五ツにわかる、錦葵は葉圓にして岐なし錦葵は其花紅、紫、白數色あり、四五月に開く、錢の大さの如し實をうゑて翌年莖高からず花さく、三年をふれば莖高く枝多くして惡し

千日紅　（花鏡）木の高さ二三尺莖淡紫色、枝葉婆娑たり、夏深紫色を開く花千瓣細碎、圓整にして毬のごとし枝の抄に生ず、冬に至て葉萎むといへども花薦まず、婦女採て鬢に簪す、最能久に耐ふ

增補 俳諧歲時記栞草 夏之部終

五月雨に隠れぬものや瀬田の橋　芭
五月雨や龍燈あぐる番太郎　同
五月雨れて此笠森をさしも草　同
涼しさやほの三日月の羽黒山　同
松風の落葉が水の音涼し　同
すゞ風や猶ながらへば小石川　宗一
涼しさや彌陀成佛のこの方は　一
暑き日や青草見るも錢次第　宗因
夕立や岡部にかかる御迷惑　茶
夕立ちの目利は山のあなた哉　茶
夕立の又やいつくに下駄はかん　因
有明の油ぞ殘るほととぎす　貫
ともかくも申さば古し郭公　因
聞ぬやうに人はいふなり時鳥　貫
雲枕花の氣さむるほととぎす　宗因
津の國の玉川知れず不如歸　同
時鳥啼き〳〵とぶぞ忙はし　鬼
時鳥聲横ふや水の上　同
やれ壺におもだか細く唉に鬼　蕪
澤潟は水のうらかく矢尻なか　芭
夕にも朝にもつかず瓜の花　蕪
雷に小家は燒かれて瓜の花　宗因
東寺瓜や南かしらにむいてゆく　芭
花と實と一度に瓜の盛りかな　蕪
瓜の皮むいた處や蓮臺野　村
頬べたへあてなどしたる眞桑哉　貫
むだ花にけしきとられて青瓢　因

增補 俳諧歲時記栞草

秋之部

秋 (漢書律曆志)少陰ハ者西方、西ハ遷也、陰氣遷、落レ物、於レ時ニ爲レ秋ハ秋、修也、物秋斂乃チ成熟、

少皞 帝(禮月令)其ノ帝ハ少皞、注ニ云少皞ノ白精之君、金天氏也

蓐收 神(月令)其神ハ蓐收、注ニ云、蓐收ハ金官之臣、少皞氏之、子該也

白藏 (爾雅)秋ヲ爲ニ白藏一ト一ニ曰收成、注ニ云氣白而收藏萬物一故ニ曰ニ白藏一ト

金商 秋ハ五行屬レ金ニ五音屬レ商ニ故ニ有ニ金風素商之稱一唐高宗九日ノ詩ニ云、端居臨ニ玉衣初律啓ニ金商一

明景 (元帝纂要)秋景ヲ曰ニ朗景一ト朗明義同シ

爽籟 謂ニ秋聲一也、(增韻)爽ハ清快也、(爾雅)吹レテ有レ聲曰レ籟

夷則 (月令廣義)夷ハ傷則ハ法也、言ハ金氣始ヲ肅、萬物于レ此ニ凋傷猶レ被ニ刑戮之法一

【七月】立秋 節(月令廣義)孝經緯ニ云大暑十五日斗指レ坤ニ爲ニ立秋一ト

七月節、

新秋 (韓文)是時新秋七月ノ初、金神按レ節ヲ炎氣除ク

盂秋 (廣韻)盂ハ勉也、始也、又始ハ初也、共ニ謂ニ新秋一也

初秋 中院通茂公御說の和歌にわ、初秋は、七月十四日までをいふべし

處暑 中(月令廣義)立秋十五日斗指レ申ニ爲ニ處暑一、漬暑將ニ退伏一而潛

處也、處ハ上聲止也、暑氣ニ止息也、是七月ノ中也

文月（ふみづき）（清輔奥儀抄）此月七日たなばたにかすとて文どもをひらく故に、文ひろげ月といふを略せり、（藏玉）七夕のあふよの空のかげみえて書ならべたる、文ひろげ月　有家○文月を略してふつきともいふ

機棚月（藏玉）誤のよりはのはしもこゝろせよたなばた月のころ待えたり　家隆

女郎花月（藏玉）たなばたのちぎりのいろにたとへてや、名をえし月もをみなへし月　顯昭

涼月（月令）孟秋ノ月涼風至ル

盆秋　經ニ曰每年七月十五日、爲ニ父母ノ設ケ盂蘭盆ニ供ニ十方自恣僧ニ

相月（爾雅）七月ノ爲レ相、疏ニ云七月得ハ庚則曰ニ窰相ニ

桐秋（淮南子）一落落ヲ而天下知ルレ秋ヲ（道甲書）梧桐立秋之日一葉先ヅ墜ツ

蘭月、蘭秋、肇秋（纂要）七月曰ニ首秋ト秋窮秋蘭秋ニ（月令廣義）提要抄ニ云蘭月云々

親月（和爾雅）此月諸人詣ニ親ノ墳墓ニ故ニ曰ニ親月ト

餞月　餞字彙曰送レ行ニ燕、說文送レ去也、餞ト訓ズ、暑の去を送る意なり

【八月】葉月　此月肅殺の氣を生じ、百卉葉を落す故に、葉落月と云ふ、今略して葉月と云ふ

南呂　律（禮記）律中ニ南呂ニ高誘註ニ云南ハ任也、言ハ陽氣内ニ藏レ陰侶ニ干鍾ニ任ニ其成功ヲ一

白露　節（月令廣義）孝經緯ニ云處暑ノ後十五日、斗指レ庚ニ爲ニ白露ト言ハ陰氣漸々重ク露凝而白シ也

秋分　（同上）白露ノ後十五日、斗指レ酉ニ爲ニ秋分ト陰生ニ於午ニ極ニ於亥一故ニ晝夜均焉、

仲秋　（月令）八月ヲ爲ニ仲秋ト、

壯月　（纂要）八月ヲ爲ニ中商ト、又曰ニ壯月ト

桂月　（同上）八月亦曰ニ桂月ト、桂月の花のひらく月なれば也

中律　（禮記）律中ニ無射ニ高誘註ニ云、無射ハ陰氣上リ升ル宮ニ宮ハ中也、言ハ萬物入ニ藏ニ中ニ考ヘ

難月　孕環に出せり（唐類函）八月ニハ乃チ僅ノ以達ニ秋ノ氣ニ云僅はおにやらひなり僅月の誤にや

秋風月　風の月　定家

月見草（藏玉）名にしおはゞ秋の半の空はれて、ひかりことなる月をみるかな　長明

雁來月（月令）仲秋之月鴻雁來ル

【九月】無射　律（禮記）九月律中ニ無射ニ高誘註ニ云、無射ハ陰氣上リ升ル宮ニ宮ハ中也、言ハ萬物入ニ藏ニ中ニ考ヘ陽氣下リ降リ萬物隨ヒ陽ニ而藏無レ有ニ射出見一スルコト

寒露　節（月令義廣）孝經緯ニ云秋分ノ後十五日、斗、指辛ニ爲ニ寒露ト言ハ露冷寒ニ而將レ欲ニ凝結一也、

霜降　中（同上）寒路ノ後十五日、斗指レ戌ニ爲ニ霜降ト言ハ氣肅露凝結而爲ル霜ト矣、

季秋　（月令）季之秋月云云

紅樹　（通俗志）に出せり凝ぶらくは紅梅月の誤ならん（藏玉）たつた山

まなくしぐるゝころとてや、紅葉の月の色をそふらん　後音羽院御製

○朱熹詩云秋山有紅樹、忽憶田野中　○韓退之詩云春風紅樹鶯眠處、似妬歌章作艶聲、云云とみえたれば、紅樹とばかりは、九月の異名にはなるべからず

玄月　范蠡曰王姑待之至于玄月註云玄月九月也

長月　夜長月といふ義也

素秋　素秋は九月に限らず、秋の總名なり、素は白なり、四時を五色に配するに、秋は白に中るゆゑに、素秋の名あり

菊月　又菊秋といふ、(月令)季秋月菊有黄花故曰菊月

晩秋　對草秋曰晩秋

梢の秋　季吟云紅葉する故也、木染月ともいふ

紅葉月　證歌紅樹の下に出つ

寐覺月　(藏玉)幾たびかおなじ枕のねざめ月、秋にはたへぬ長き夜すがら　家隆

小田苅月　(藏玉)さびしさは鴨たつくれの露しげく、袖うち拂ふ小由かりの月　顯昭

色どる月　梢の月といふにおなじ

《い》【七月】糸織姫　棚機七姫の内也、(異名分類)舊事紀に令下天ノ棚機姫神織神衣云云是によるべし

犬飼星　しの部、二星の條に出づ

石枕　(仙覺抄)いそ枕とは眞の石にあらず玉也、たなばたのあふ夜の玉の枕とみえたり

芋の葉の露　(藻鹽草)露取草とは、棚機の歌を書付るに、芋の露にて書也、云云

曬衣裳　星のかし物、かし小袖(四民月令)七月七日麪を作り、藍丸及び蜀漆丸を合し、經書及び衣裳を曝し、俗に習ふこと然り(世說)郝隆七月七日隣人をみれば、皆衣物を、曝す、隆仰き臥して腹を出す人其故をとふ、曰腹中の書を曝のみ○星のかし物、衣裳を曝すも物をかすも、七夕に巧みを乞はんか爲也(貫之家集)世をうみて我かす糸は七夕の、涙の玉の緒とやなるらん「秋きても露おく袖のせばければたなはたつめに何をかさまし　辨内侍(荒野集)七夕よ物かす事もなきむかし　越人

池の坊の立花　洛の六角堂頂法寺雲林院は、三條の南にあり、三十三所順禮の一箇所也近世僧專光、數品の花枝を一瓶のうちにして、山水の景象を摸することを得たり、和俗これを立花といふ、今に至て代々これを玩ぶ、僧俗此弟子となるもの多し、例年七月七日、立花數瓶砂の物等とあり、人爭ひてこれをみる、これを池の坊の立花と云ふ、是も又二星に供するの意なり

伊勢踊　(滑稽雜談)いせをどりなといふむかしより侍ること也○世にいふ松坂音頭なり

生身魂　蓮の飯、さし鯖、閑窻倭筆)本朝の世俗、七月になれば、生る二親を供養して、生身魂と名づく、これも盂蘭盆の修行なり(盆經)願くは現在の父母をして、壽命百年病なく、一切苦腦の患なからしむ、是七月十五日、僧自恣の日、現在の父母の壽命長久を祈る、發願の文なり、是生身魂の修行なり、(和漢四才圖會)刺鯖中元の日の祝用とす但し脊より骨に傍て割開きこれを鹽物にして二枚を一重となしてこれを一刺といふ○同書に云ふ蓮の飯老妣の靈前に供し、又以て親戚に贈

るを禮式とす、これを稱して生靈祭といふ、荷の葉を以て蒸せる糯飯を包み、觀音草を以てこれを縛る、佛名を以て好とするか

稻妻　稻づるみ、もゝかがり（和漢三才圖會）秋の夜晴て電あるは常也、俗傳ていふ、此時稻實る故に、稻妻稻交の名あり、（御傘）稻光は雜なり、（說文）電は陰陽の激曜する也

稻の殿　稻妻に對して、稻の殿といふなるべし（續猿蓑）獨るて留守もするのすごし稻の殿　一東

稻葉の雲　諺に云多く稼如し雲、〇秋風は田面に冬をさそうかと、いなばの雲の露ぞしぐるゝ、中院道茂公〇稻妻のおひ整ひたる景色をいふとぞ

稻の花　（夫木）ゆふぐれはみやまおろしに我家の、門田の稻の花の浪よる　後久我內大臣

糸萩　（大和本草）糸萩は花紅に盛久し

隱元豆　（大和本草）近年中華よりわたる、春子を植秋の末に實多く、花紫也、蔓生す、嫩きとき莢ともに煮食ふ、京都にて陰元豆と云ふ、築索にて南京豆といふ〇此種黃蘗隱元禪師來朝して諸種を持來れる、其一種也、故に隱元豆と名づく

稻春虫　（和漢三才圖會）槃蠡、春黍、和名以稱豆岐、古萬呂俗云稱宜按するに槃蠡、蠡斯に似て小く、長さ一寸ばかり、青色、尖りたる首、兩眼の間廣し、但し蠡斯は兩眼の間狹し、これを以て異なりとするのみ、社人立烏帽子を着たる狀に似たり、故に俗呼て稱宜といふ、小兒兩足を捕ふれば、身を伸して首を俯き仰ぐ、稻を舂形に似たり、故に和名稻舂といふ、古萬呂とは蠡の類の和訓の總名也

稻冬蟲　（本綱）稻蠹は總名なり數種あり、草の上に在を草蠹といふ、冬に至て土穴の中に人夷人炙てこれを食ふ、辛く毒あり、其類土中に乳む、深く其卵を埋む、夏に至て始て出づ〇按ずるに稻蠹方なる首、形蚰雞に似て小く、青白の色、田の稻に生る、夜は株にあり、朝は梢に上り、稻の露を飲む故に稻子と名づく、これを取て炙り、食ふ、味甘く美なり、小蝦の如し、形同うして灰色、田野にありて地に跳る者即ち土蠹也

蝗　（本草綱目）稻蠹集解に云ふ蝗亦蠹に類して、方首に王字あり、冷氣に生ずる所、天を蔽ひて飛ふ、性金の聲を畏る、一たひに八十一の子を生ず、冬大雪のあるときは土に入て死す（和名抄）蝗（和名於保彌無乙）大和本草管子に凶年の五害、水旱風、厲蟲といへり、虫は蝗也、和俗に實盛虫と稱するあり、蠹に似て小也、青色なり、首は兜を着たるが如し、稻葉を食ひて大に害す、夜松明を燈し、鐘皷をならしてこれを送る

芋虫　（大和本草）蝎、又菜の葉にも青蟲を生ず、薯芋に生ずるは、大なる拇指の如く、長さ三四寸あり、芋むしといふ、青色又褐色あり、後に化して鳳蝶となる

蟷螂　時珍曰兩臂斧の如く、轍に當て避ず、故に當郎の名を得たり、又螳螂、首を臞脩を螫ふ、頸脩し、大腹二手四足、髭を以て鼻に代ふ、人の髮を食ひ、よく葉を翳して蟬を捕ふ、深秋に子を乳房を作るに枝の上に粘着す、卽螵蛸也、房の長さすばかり、拇指の如し、其內重々として隔房あり、房毎に子あり、虻卵の如し、芒種の節後に至て一齊出（滑稽雜談）俗に鎌きりといふかの兩臂斧の如し、又鎌をめぐらすが如し、よつていへるなるべし〇時珍曰今人扰を病者往々螳螂を捕へ、これを食しむ、云々いほむしりの和名こゝにいづるなるべし

竈馬　いとゞ、こほろぎ二名一物、この部蟋蟀の部に註す

〔兼三秋物〕居待月　（藻鹽草）十八日也、萬葉に座待月と書り

絲芒　葉細く絲線のごとし長さ三四尺一株に數百の莖叢生す、秋莖を抽て花穗をなす

色草　秋の千草なり

芋　時珍曰、芋花をひらかず、或は七八月の間ひらく者あり、莖を抽で花を生ず、黄色旁に長蕚あり、これを護る、半邊蓮花の狀の如し○粒芋唐の芋、青芋、螺芋、甘薯等の種類あり頭字の部にわかちて註したり

田舍柿　形圓く諸柿より大にして澁し、醂し柿とすいはゆる塔柿か

犬殺梨　（和漢三才圖會）北國最多し、奥羽津輕秋田の産、他國に倍して大なり、周り一尺四五寸、俗呼で犬殺と名づく、狗子樹下に有とき梨落れば撲れて死す故に名づく

稻　（禹錫食經）爾雅云稻ハ徐也

稻苅　（字彙）刈は獲也取也

稻扱　古は麥稻の穗を扱に、二ッの小き管を以て繩を通し、繫ぎこれを握り持穗を挾み扱、近年稻扱を製す、其捷なること扱竹に十倍す

稻舟　（古今）最上川のほればくたる稻舟の、いなにはあらず此月はかり○出羽國最上川、水はやくして、舟を引のほすに、舟のかしらのふれるが、人の物をいふなと言うて、かぶりふるに似たればいふ、又一說に稻をつみたる舟といふ、讀方物をいやといふ心を、稻舟によせてよむなりと（藻鹽草）にみえたり

稻莚　（御傘）莚をしきたる樣に、稻の面の平々とあるを申す、よりて夜明にも居所にもあらず○又新藁にて織たる莚をも、又かけ稻とて木の枝などへ、苅いねをかけわたしたるをも、稻莚とよめり、（萬葉）玉ほこの道行づかれ稻莚、しきても人をみるよしもかな、人丸（新古今）秋の田のかりねの床の稻むしろ、月やどれともしける露かな　定雅○大かた是にて心得べし

鰯引　裂鱠（和漢三才圖會）鱠俗字鰮、和名伊和之、性柔弱、故に俗字弱に從ふ、與和之と訓乃チ相通ス中略群行して至る時、海波稍赤し、漁人豫知て網を下し、これを釆る鯨好て鰯を吸ふ、爲に逐はるゝ者數萬、群をなして浪樓のごとし、これを取て膾に作り、炙として食ふ又脂を取て燈油とす○鰯引とは網を引の義裂膾とは、この魚、刀を用ふるに及ばず、指を以てこれを解、故にいふ、（本朝食鑑）一名御紫或は紫といふ、本朝宮閨の兒名女鰯の賤を忌て御紫といふ、鰯の鹽糟、其肉色紫黑、故に名づくるか

鰯雲　秋天鰯先よらんとする時、一片の白雪あり、その雲段々として波の如し、是を鰯雲と云ふ

【八月】芋名月　つの部、月見の條みるべし

十六夜月　既望（古今）君やこん我やゆかんのいさよひに槇の戸板もさゝすねにけり○いさよふとは、たちやすらふ意也、十六日の月、暮てのちしばしありていづる故也○やす〳〵と出ていさよふ月の雲　芭蕉○此句意は、やす〳〵と月は出たれども、雲のためにいさよひて、みゆといへる曲節なり（蔡氏集傳）日月相望むこれを望といふ、既に望む十六日也

羊肚菜　（和漢三才圖會）羊肚菜、今云ふ兎口蕈、八月の中濕地に多く生ず、其繖の表褐色、端曲り捲、裏は黄白色、細き刻なし、なめらかにして孔あり、蜂の巣のごとし、毒あり

石蕈　（同上）狀木耳の如し、繖柄なく黑色、裏灰白色、峯の頭嚴の

上にあり、得かたし

稲小屋　（同上）守舍禾を看廬なり、○田間に建て猪鹿を追ふ處也

稲木、稲掛、稲干　（多識篇）喬扞（伊奈加計）○稲木、俗稱掛といふ、禾を掛る具也、竹の長短相等しきもの、三莖を取て上に筍を用てこれを縛り、田中に於て、禾を上にかけて、乾すなり

稲束　（和漢三才圖會）稲を苅て束ねて一把二把とす、是なり、又稲塚あり、苅稲を束ねて後、積て堆くす、恰も塚の如し、是を稲塚と云ふ

稲負鳥　（古今）我門にいなおほせ鳥の鳴なへに、けさふく風に雁はきにけり、眞淵翁云ふ、稲負鳥はいたくしりがたき事にて、さま〴〵と論ぜしを見るに、或は鵠也、田夫也、などいふは、此哥をよくも心得すなへてふ詞をもしらぬひが事ともにて、皆ないふに足らず、庭たゝきの事をいふといへるはあたれり、實に秋の半すぎて來鳴ものなり、（綺語抄）あふ事を稲負鳥のをしへずば、人は戀路にまどはざらまし○鶺鴒、稲負鳥、庭たゝき、つゝなはせ鳥、とつぎをしへ鳥等の諸名あり（三才圖會）鶺鴒雀のたぐひ飛ときは鳴、行ときは搖く、大さ鵯のごとし、脚長く尾腹の下白し、頭の下黑く、連錢のごとし、故に杜陽の人これを連錢といふ

色鳥　（御傘）いろ〳〵秋わたる小鳥をいふ、（雲玉）さらに又わたるもかなし山路ゆく、秋や限りの色鳥のこゑ　政爲

桑扈（まはし）　（和漢三才圖會）竊指、青雀、臘觜雀狀、鳩より小さく頂黑く、腹灰青色、羽の末黑く白き斑あり、觜微曲て厚く、淺黃色尾短く好て豆栗を食ふ、故に豆甘美と名づく、俗以て豆廻しと名づく常に鳴て春月よく囀る比志利古木利といふがごとし

伊須加鳥　正字未詳（同上）狀鸛鵲のごとくにして頭背蒼く、又腹臆最赤く紫なり、觜青くして齟齬又をなす、故に事物齟齬を、伊須加の觜といふ

【九月】生玉祭　九日（神社啓蒙）生玉の社は、攝津國東成郡天王寺の邊にあり、祭る神一座、天の生玉の命（社家註進記）明應年中本願寺の僧こゝに來りて、寺院を創し、神地を以て境内に接す、神其不潔を惡みて、彼僧を罰す、僧おそれて神殿を今の旅店の側に遷し、こと〴〵く造營す、其後信長の兵火にかゝり、殿社灰燼となり、纔に神璽を別所に迂す、慶長年中秀吉城廓を築くの日、今の地に迂す○例祭九月九日、神輿一基、遊行流鏑馬あり、社内に十坊あり、その内南坊を別當とす

岩倉祭　十五日八所明神の社は、洛の北、長谷村の西岩倉にあり、王城の四隅に岩倉を置る、これ其一なり（拾芥抄）大雲岩寺倉觀音○親長卿記に云ふ、文明三年三月廿九日、岩倉長谷の觀音に參る、十一面圓融院の御願、日野中納言文範卿草創なり○鎭守、岩倉大明神、所謂八所とは、八幡、加茂、松尾、山王、住吉、春日、新羅、大座是に太神宮、貴船、稲荷、平野を加へて、以上十二社これを十二所明神と稱す、是太雲寺の鎭守にして、土人本居神とす、例祭九月十五日、神輿遊行す、神主は村中の氏子交る〳〵これを勤む、大雲寺衆徒四人、名代として公人法師二人供奉、夜宮に大炬火二ツ立、深更に及て角力五番あり（滑稽雜談）俗に岩倉の尻たゝき祭といふ、夜に入て神供を奉る、一村の内新婦をえらみて、婚禮の服を着せしめ、神供の器を頭に戴き神前にすゝみゆかしむ、一村の老若ちひさき枝木を持、新婦の尻をうつ新婦うたれじとはしるを、立まはりてうつなり、故に尻たゝきといふ。

一宮祭　十五日○河内國交野郡北牧方村にあり、祭る神牛頭天王、八

王子、北野の天神、攝社、帝釋天王、脇立、寄姫大明神、淺原大明神
鎭座年暦詳ならず、例祭九月十五日、今は十六日神輿出す、神樂神
湯等あり、氏子八鄕坂村、小倉村、招提村田口村、甲斐田村、中宮村
禁野村、濃村是社僧神宮寺、及社家岡田氏記す處也、又一說に、一ノ宮
平岡大明神は、河內國河內郡にあり祭る神天の兒屋根命姫大神、香取
神、鹿島神、若宮の社末社十八社、神武天皇の御宇鎭座、例祭九月八
日九日社務水足大炊、下禰宜神子五六輩、皆農民にしてこれを兼務む
といへり

伊勢御遷宮　（紀ノ）凡大社造替毎に陣の裝ありて、時日を定らる勅
使あり、伊勢大神宮、春日の社廿一年を經るときは、必造り替あり、
遷宮の時納る所の神寶、行事官、調進す、この月伊勢參宮の人、多く
京師を出て、十六日の御祭會並に御遷宮にあはんとす、凡參宮の人、
先靈山の國阿の像に詣てその杖履を戴拜す、相傳ふ、國阿深く太神宮
を信じ、時々木履を着杜杖を携て參詣をなす、終に行路の雜なし、故
にその福に倣ひて以平安を祈る也〇二十一年毎に遷宮あるが故に十
五年めに至るとき木引のことあり、三年にして木引成て、又三年木
捧のことあり、材木は木曾山並紀州大杉山より出づ〇內宮御鎭座は、
垂仁天皇二十五年三月、外宮は、內宮鎭座の後、四百八十四年を經て
雄略帝の時垂跡也

色なき風　九月の風なり（新古今）ものおもへばいろなき風もなかり
けり、身にしむ秋のこゝろならひに　久我內大臣

隱君子　菊の異名なり（范至能ガ菊譜ノ序）山林好事ノ者或ヲ以テ菊ヲ比ス君子
ニ其說ニ以テ謂歲華婉孌草木變衰乃チ獨リ燁然秀發傲ニ睨風霜ヲ一此幽人逸士
之操雖ニ寂寥ニ寒而味ニ道之腴ヲ不レ改ニ其樂ヲ也（愛蓮說）菊花ノ隱逸ヲ者也

いなて草　菊の異名なり（藻塩草）長月の九日にさくいなて草花は八

重にて萬代ぞへん

毬栗　其實苞中に在て、未地に墜ざるをいふ、毛毬、和名以加

無花果　（和漢三才圖會）其實柿に似て木窄く、俗に唐柿といふ、一月
にして熟す、故に一熟と名つく、その樹枇杷に似たりといへども、然
らず婆娑として葉蓖麻に似て小く、背色淡く潤ふ、文理隆明なり、
五時を治することを識て、魚毒を治することをしらず

櫟　（わくかせわ）樫に似て花は栗の如し、實は椎より少しく大也、木
硬くして多く船の艫に作る、實を以て秋とす

色見草　（藏玉）秋もはやしぐるゝ頃の色見草ちらまくをしき山風ぞふ
く

色不變松　苟卿曰隆冬を經て凋まず、雪霜を蒙りて變ぜず、其の貞
を得といふべし（新拾）いろかへぬ　友とみるらん　人道前內大臣

岩蓮花　（大和本草）岩蓮花俚俗の名也其草の形葉のめくり恰も蓮花の
開るが如し異名也、或は云ふ佛甲草是なりと非なり

鰯の黑漬　豫州の產なり、宇和鯛と稱す、その製兩鰓を切削て俺と
す、鰯の性腸の中に黑汁あり、塩水に和して其魚黑し、これを黑漬
といふ

《3》【七月】六道參

九日迎鐘、橫賓（山城國名勝志）六道は五條の末北、建仁寺異の角にあり、今の建仁寺大昌院管領す、藥師堂あり、是珍寧寺の本尊〇（雍州府志）珍寧寺は、弘法大師の開基にして、元葬場也、小堂に地藏を安置す、世に六道と稱す、傳いふこの所冥途に通ず、故に小野篁この所より親ら六道に行て歸れりと、是により て、每年七月孟蘭盆前、九日に男女參詣す（紀事）今日諸人六道地藏に

詣て、男女鐘を撞て聖靈を迎ふるといふ、各槇の枝を買て携歸る、又新穀を買て聖靈に供す、是を和と稱す○六道參にまうで槇の枝を買ひて家にかへり、靈前におくは、俗聖靈槇の葉に乘りて來るといふ、是聖靈を迎ふる意なるべし(古事談)珍篁寺の別當、某云ふ、當寺の鐘は、慶俊僧都これを鑄る、慶俊入唐の時、留主する僧にいへらく、此鐘土中に埋三年を經て堀撞べしと、衆僧三年を待に堪ず、縱に一年を過してこれを堀、樓に掛て撞に、其聲唐に聞ゆ、慶俊曰我寺の鐘聲きこゆ、予念ずらく三年を待て是を堀樓上にかくる時は、撞ずして六時に聲あるべしと歎惜す○かやうの所謂にて、聖靈をむかふるため撞ならん是を迎鐘といふ○六道は桓武天皇延暦十三年長岡より今の京に迂らせたまふとき、諸人の葬場と定め給ふよし(迂都記)にみえたり、本尊藥師如來は傳教大師の作、七佛藥師の其一といへり

《は》【九月】初冷

王劉鑠詩云、昊天清ノ且ツ高キ秋風發ス初涼ヲ

墓參　七月朔日より十五日に至りて、名祖考の墳墓に詣る也、これ唐山の人、清明の日、上墳祭掃に同し○源順家集に、七月十五日ほんもたせて山寺にまうつる所『けふのためをれる蓮の葉をひろみ、露おく山に我はきにけり、』是盆の墓參り也(和漢文撰)(前文略之)一家みな杖にしら髮の墓まゐり、まゐるこゝろのかたみながらに、芭蕉評に云ふ故翁伊賀の西麓庵にて、例の文稿をあらたむるとて、今思ふに、白髮の魂祭は、其日の感情は演たれど、發句は祭る姿にあらず、此故に參の字を以て歩行の樣を形容せしに、當季の詞も慥ならず、增て切字の入所もなし、此等や有樣體と云て『まゐるこゝろのかたみながらに』と下の句を云ひ、次て俳諧の歌もしかるべきや云云

蓮の飯　いの部生身魂の條に註す

花燈籠　造り花をもて美しく餝りたる燈籠なるべし

初鳥狩・初鷹　貞德曰、とや出の鷹を、はじめてつかふを、初鷹とも初鳥狩ともいふなり、鳥屋出の鷹とは、夏の羽のぬけたるを鳥屋にこめて羽の出そろひたるを、盆の聖靈の箸をともして夜鳥屋より出すにより、箸鷹とも申といへり○小鷹狩の條をも見合すべし

鳩吹　鳩をとるとて手を合せて、鳩の聲のやうにふきならすなり、(八雲御抄)(歌林良材)(藻塩草)(袖中抄)等說同し(炭俵集)名月や誰が吹おこす森の鳩　洒堂

花火　(和漢三才圖會)燧燧に代ふべきもの也、又夏月河邊の遊興とす(御傘)正花を持也、

萩　(和漢三才圖會)天竺花は、花史にいへるが如し、按ずるに枝葉長く、垂地を蔽ふ、狀糸櫻に似て一極三葉、棗の葉に似て、又南天燭の秧に似て尖らず、柔軟也、秋小花を着、淡紫色、俗專ら萩の字を用ふ奥州宮城野方二里ばかり萩生茂れり、山萩あり、白花の者あり、白紫開分の者あり○或書に宮城野の萩は草にあらず、木萩也、弓などに作る木なり、稍に青き枝生て、その枝に花さくなり、○もとあらの萩、鹿鳴草、古枝草、糸萩、小萩、さゞれ萩等其頭字の部にわかちて註す

萩の錦　錦にみたてゝいふ也(新後拾)いとゞまたおもてぞまさる秋はぎの、花のにしきの露のたてぬき　法皇御製

萩殿、萩の戸　(禁秘抄)萩の戸は常の御所也(大要抄)萩に限らず、色々秋の花これを栽らる清涼殿の西の方貳間の前(五社百首註)菊戸萩戸同しこと也

蓮の實とぶ　蘇頌か曰其菂秋に至て、黑くして水に沈む、石蓮子とす○山谷詩倒レ靭収二蓮菂一云云、これも蓮の子の房中より拔出たる穴を靭と見立し也

初嵐　（和漢三才圖會）山の氣を嵐といふ、醫書に山嵐不正の氣といふ是なり、今初秋以後朝夕山より吹風を、俗に嵐と名つく（連哥新式秘抄）初嵐は七月末より八月中ごろまでの風なり

絡線虫　（わくかせわ）六月の内より鳴初て七月中ごろまで、野叢の中晝盛に鳴く、其聲ギイ、スといふが如し、一二聲の内に、チョンと舌打す、俗是を蛩と云て、小籠に入て市に賣て小兒の翫とすその形蝗蟲に似て大なり、是はたおり也ギイ、といふは機躡の音、チョンは篾打音なり、又ギスともいへり（續猿蓑）夏の附合に砂を這ふ棘の中の絡線のこゑ　沾園

蟿蚤　蟲蠹の屬長さ三四寸、身はなはだ瘦て、方なる首兩額に眼あり目の上に二つの髭あり、翅灰赤色黒點あり、腹の下白く善跳て捕へがたし○今の俗これをばつたといふ

櫨　（和漢三才圖會）黄櫨以て黄色を染む、天子の御袍黄櫨染と稱す、是なり帛を染て上に砥水を用ふ、略染れば黒茶色をなす、其葉小く淺青色、莖微赤し三月小白花を開き、細子を結ぶ、秋に至て紅葉す（わくかせわ）漆の類にして葉柳の如くにして滑也、元山木、今世子を採て專ら蠟燭に作る、依て多く平原の地に植て利とす

〔兼三秋物〕廿日亥中月　廿日の亥の正刻に出る故なり

旗芒　（袖中抄）花芒歟はとなと同じひゝきなり、或は萬葉裏書にはたゞ薄とは、穗出て簇をさゝげたるやうなる薄をいふと、能因申しけるとぞ云云

花野　千草の花の野に咲みだれたるをいふ也、野の花といふときは、花、體となりて野は用たり、花野といふときは、野、體となりて花用たり心得べし

芭蕉　（大和本草）本草に濕草に載す、軟なる地に植て茂易し、春葉を生じ、秋に至て止む、冬根莖枯ず、年々發生す、冬を歷て大なり、黄花を開く、極めて稱也、東鑑に其花を優曇華といふよししるせり

葉雞頭　雁來紅をいふなり、かの部見るべし

薑　（和漢三才圖會）生薑音姜、今俗多く姜字を用ふ剩我の音とす、未其據をしらず、（倭名抄）生薑（久禮乃波之加美）蜀椒（奈留波之加美）蔓椒（以多知波之加美）呉茱萸（加波波之加美）此等を以て考ふるに、往昔波之加美といふものは辛果の總名也

蓮芋　其葉荷葉に似て圓く、其根栗の形の如し、味美なり、或は呼て栗芋といふ、按ずるに水中に種るものを蓮芋といひ、圃園に種るものを栗芋といふか

彈　かの部案山子の條に出づ

班龍　鹿の異名なり

鮎釣　（和漢三才圖會）彈塗魚、俗波世川の末、海近き處に多くこれあり、常に水底を潜行、小鰕を以て餌とす、綸の端鈎を去ること二三寸許の處に、鉛の錘を着、鈎を地に附しむ、微動の響の俟て竿を揚ぐ、秋月貴賤以て遊興の一つとす、形色鯒に似て小く、細鱗體略滑にして口濶く腮大に眼上に向く、斑點微黒を帶ぶ、尾にも又小班あり、虎彈魚、衲彈魚、飛彈魚等の類多し

【八月】八朔　田の實の節、憑の節供、恃怙の節、田面の節（紀事）凡毎月朔は吉日にして、相賀すること中華と同し、今日殊に八朔と稱し又恃怙の節と稱す、又憑の節供といひ、或は田實の節と稱す、又田面の節と號す、中世農民稻の初穗を禁裏に献ず、故に田の實の節といふ、

世に又其訓を借用て、懇の節供と稱す、蓋君臣朋友相依て賴の義に取
君臣朋友の間互に贈答の義あり、今日貴賤各白帷子を着し、互に慶
を修す（公事根源）八朔の風俗、後嵯峨院潛龍の時、外祖源の通方卿の
亭に在しゝに、近習の男女密に斯義をなして、閑素を慰め奉る、後皇
位に卽たまふ爾來嘉事とす

初月夜　或說に、四日五日六日迄をさしていふべきに害なかるべし○
青藍曰、仲秋の月にかぎりて、初月と賞するは、三五の月を待こゝろ
よりいへるなるべし（猿蓑集）粟稗とめてたくなりぬ初月夜半殘

初潮　十五日の潮をいふ、一說に初潮の初の字は、葉月の潮といふこ
と也と云云（五雜俎）海潮八月獨大なるは何ぞや、潮は月に應ずるもの
故に、月望とき潮盛にして、八月の望尤盛也（御傘）伍子胥か死靈、八
月十五日夜に風波をおこすこと也云云

箱崎祭　十五日（神社考）筑前那國珂郡、此社は譽田帝の祠なり、博多
に近し○祭る神三座、中は應仁天皇、東は神功皇后、西は武內宿禰な
り、仲哀天皇三韓を討んと欲したまひ、神功皇后とゝもに、筑紫橿日
の宮に至り給ひ、軍旅を催すの時、天皇崩御なり、この時皇后懷姙臨
月ならんとす、乃ち自ら男子の貌をなし、弓鰐矛鉞をとり、呪して曰
請、征伐の後ち降誕あれと、三韓ことゞく平定し、筑紫に歸りたま
ひて、男子降誕し給ふ、應神天皇是なり、その地を呼て宇彌邑といふ
胞衣を袋に籠めて地に埋み、松を栽て標となす、その地を呼て箱崎と
いふ、醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日、託宣によりて、宮を筥崎の松
原に建らる、例祭八月十五日也○古老傳へていふ、昔この、松原に
○戒定慧三字の讖を埋む、故に箱崎と號す、松をその所に植て標とす、
その松猶在とぞ（緣起）昔白幡四流、赤幡四流、盧空より降、其所に松
を栽て標とす、故に八幡の號あり云云、諸說迭に異なり

花畠　（貞享式）御傘に正花なり春なり、細に穿鑿すれば、種々の理屈
あれど、この分にて置方がよきなりと、如何なる秘事にやしらず、今
按ずるに花槽の花畑も、決して秋に定むべきなり○花畠は草花なれば
なり

初紅葉　初花初櫻といふに同し（新拾遺）たつた山木々の梢のはつもみ
ぢけさのしぐれにまづそおほゆる　宗良親王

薄荷　（和漢三才圖會）薄荷、荻苗、蕃荷菜、等の諸名あり、木綱曰二
月宿根より苗を生ず、清明の前これを分つ、方なる莖赤き色其葉對生
す、初時形長して頭圓し、長するに及て尖る、其莖葉茎に似て尖り長
し、冬を經て根枯ず、按ずるに多く山城より出づ

花紫　（花彙）大和地方多く藝、春種を下す長じて苗の高さ一尺、以來
葉は瓣落金の葉に類して小なり、又俗によぶ琉璃草に似たり、差互し
て生ず、三月花を開く、槍の葉の間にあり、形狀圓く瓣五出にして內
に蕊甚ない、又瑠璃草の花に異なることなし、たゞその色白し、又粉
紅及び黃のものあり、下に長萼ありてこれをうく、實を結ぶ、その
形圓く尖れり、稔に類して大なり、秋に至て熟す、黃白色なり○按ず
るに御傘等の俳書に、花紫を秋とし、若紫を春とす、然るに本草花竈
等の說、三月花を開くといへり、紫草を種て試る人ありて曰、此草
秋種るものは春花を開き、春種るものは秋花さくといへり、御傘に花
秋なりといへるも、亦據なきにあらず○絹帛を紫に染る者此草なり

花芒　ほの部穗芒の條に出づ

濱木綿の花　（大和本草）（和品）濱木綿萬年青に似たり、俗溜おも
ととといふ、海邊に生ず、七八月白花をひらく、莖高く延て只梢に數花
あつまりひらく、卷丹の花の形に似たり、好花にあらず、季秋實る結

ぶ、花咲たる跡に數顆みのる、一顆の大さ、胡桃の如し、内に核なく白肉あり(中略)篤信曰今按に西土にもあり、濱芭蕉といふ、紀州熊野に多し、甚だ雪寒を畏る、宅中に植ては、冬月藁にて厚く包み或はこもを以ておほふべし、しかせざれば枯る、盆に植て屋下の暖き處におくべし、海邊にありては、潮風温にして雪早く消る故かれず、二種あり、一種は葉柔く薄く其莖の皮多く重れり、是百重なすとよみしなるべし、一種は葉つよくあつし、莖の皮重ならず(萬葉)三熊野乃浦乃濱木綿百重成心者雖思直爾不相鴨　人丸　(滑稽雜談)此者未俳書に載ず、然りといへども古哥に多くよめり、尤花を以て季に用ふ

針簟　(和漢三才圖會)鼠茸に似て笠なし、長さ二寸ばかり、灰白色平地に叢生す

初茸　(同上)淺山松樹の陰處に生ず、狀松茸に似て小く、初生より傘はりて内に細き刻あり、内外赤黄色、立秋の初に出づ、柔にして味甘く、諸茸より先に出づ、故に初茸と稱す

白雁　白雁、全體白くして、翅羽黑く、觜と脚と赤色、其肉脂少し、凡中秋白雁先來て雁金これに次、眞雁又これに次て遲し、春は眞雁先て歸り白雁これに次ぐ

初鱖　(和漢三才圖會)鮭は鯉の本字、魚臭なり、正字未詳、狀鱒に似て圓く、肥大たるもの二三尺、細鱗青質赤章腹淡白く肉赤し、細刺あり、脂多く味厚美也、頭の枕骨軟かにして瑪瑙の如し、氷頭と稱す、味亦佳也(大和本草)本邦東北州の大河に多し、南州にはこれなし、和名抄曰鮭和名佐介、鮭字を用ふ非なり

鮞　鮭の子也(同上)其子二胞あり胞中數千粒明透上に一紅點あり、鮞といふ、又筋子甘子と云ふものあり

放鳥　やの部八幡祭の條に註す

【九月】海贏廻　(紀事)この月九日、小兒小石を以て、海螺の殼を穿ち、鉛を鎔して殼の内へ入れ、或は洲濱飴を殼の内へ充て其力を助け、各緒を以て海螺を纏ひ、勢に乘じて臺中に投入れ運轉せしむ、その力つよきものは、其力弱きものを盆外に出す互に勝負を爭ふ也、これを海贏擊といふ、席の兩端を卷てこれを盆といふ、(和漢三才圖會)いづれの時より始る事をしらず、田夫野人の玩ぶ所なり、海螺の殼を用て、頭の尖りを碎き平け、尻の尖りを摩り圓め、糸繩を卷て引てこれを席盆の中に舞す、二三の螺を以て勝負をなす、打出さるゝ者を負とす、その先に入るものを伊加といひ、後に入るものを乃宇といふもし打合て同く出る事あれば、張とこふ、張のときは伊加を勝とす、凡熊野よりいづる海螺厚く堅し

婆利女祭　(はんぢよ)　廿日○婆利女の社は、洛陽高辻の北、室町の西にあり、祭禮昔は七月なりしを、中ごろより九月廿日とす、(雍州府志)の繁昌の社、元針才女を祭る所にして、實は辨才天なり、針才女と繁昌と、和語相近し、依て謬ふるなり、(宇治拾遺)むかし出雲の前司てふ人のむすめ、此所にてうせたりけるに、葬りをさめんとて、鳥部山に具し行ければ、その死骸もとの所にかへりて後は、さらに動かすべくもあらず、せんかたなくて、此所にをさめ侍りしに、その塚のほとり六七間ほどは、人も住つかで、荒地にて有けるを、後に何人やらん、社を建つるよし侍り、故有て辨才天と祭れり、(簠簋内傳)牛頭天王娑喝羅龍王の三女を娶り給へり、その名を婆利女といふ○安藝嚴島の辨才天女、娑喝羅龍王の第三女なるよしいひつたふ、しかれば婆利女を辨天といへるも、また故なきにあらず○大閣秀吉この社を東山佐女牛の八幡宮の傍にうつす、しかれども甚だ祟りをなすによりて、ふ

たゞびもとの所に安置すと也

花の弟　（異名分類）花の弟といふは、もろ〳〵の花におくれて咲ゆゑにとぞ、（夫木）もゝ草の花のおとゝとなりぬれど八重〳〵にのみゆるしら菊　顯昭

榛　時珍曰榛樹低く小にして荊のごとし、叢生す冬の末花をひらく、樸の花の如し、條をなし下に垂る、長さ二三寸、二月葉を生ず、初生は櫻桃の葉のごとし、鋸文多くありて、細き歯及び尖りあり、其實苞をなす、三五相粘、一の苞に一つ、實々として樸の實の如し、下肚に上鋭し、生は青く熟すれば褐也、其殼厚くして堅く、其仁白くして圓く大さ杏仁の事し、亦皮に尖りあり、然れども空なるもの多し、故に諺に十榛九空〇その葉、悉く皺む、依て和訓ハシバミなり、實を以て秋季とす

柞　（わくかせわ）山木なり、高き者二三丈、葉は柏に似て秋紅葉し、冬落つ、城州柞の森名所なり、且奈良の西南に祝園といふ所あり、城州の内也、元柞園也、後祝の字に改む、祝園の神社春日大明神也、此神の森皆柞の木にして秋甚だ紅葉す、他邦には稀なる木なり

番綿、番船　攝州大阪にあり、江戸へ積出す綿也、その廻船に一番二番三番ありて、江戸へ着岸の遅速を以て損益を定む、商賈專ら勝負を爭ふ

初鴨　（貞享式）此名は全く新撰なり、或は賞翫とも加減ともいはん今按するに泰膳式にも雁鴨と並ながら、賞する處は秋冬の差別あり、みれども見聞の姿情を論ぜず、初雁といへば、風雅を思ひ、初鴨といへば風味を思ふ、姿を天眼とも天耳ともいへり、譬ば初雁と音に喚も風味を先に思ふべきや、鴨の冬なるは勿論にて、初の字をそへて秋となすべけん

肌寒　（秋聲ノ賦）其氣慄冽（ソウトシテハリス）砭二人ノ肌骨一

《に》【七月】庭の立琴　（江次第）乞巧奠に御所より箏一張を申下し、東北西北の机上の妻に置く、註に延喜十五年の例和琴を用ふ、裏書に云ふ柱を立るに三樣あり、常に半呂半律を用ふ、秋の調子なり（公事根源頭書）半呂半律とは、樂書に云ふ、黃鐘調大食調は律呂の調也半律の調也（夫木）たなばたのあふ夜の庭におく琴のあたりに引はさかにの糸　寂蓮

新綿　（藥鹽草）にひわたは七月十七日なり、內裏の貢の綿なり〇俳諧には貢にもかぎらざれば、作者こゝろへべし

二百十日　正月の節立春の初日よりかぞへて二百十日といふ、此ころ秋の最中にて、金氣殺伐の氣變動する時也、故に必風雨あり、此時節中稻の花盛とす、その花をそこなはん事を農民恐る、（續猿蓑）翁草　二百十日も恙なし　葛弖

廿六夜待　江戸の俗、今月廿六日の夜、月の出に三尊佛の影向を拜むとて高輪に群集す、此夜陰芝居手踊、或は音曲八人藝、うつし繪等を仕組者あり、是を一夜藝者といふ、酒樓に月を待遊客是を招て興とす、又虫賣菓飴餅いろ〳〵の商人來りて賑へり、土人幷間虎八云ふ土人廿六夜祭と稱す、其由來を尋るに審ならず、むかし近村の民、此處に來り海岸に生たる蔵を苅取、圃産として月のいづるを待しといへり、今聖靈棚に敷たる蔵を敷物に賣は、その名殘なるべしと云々此外田安の臺、湯島の社地、群集すれど、高輪の賑はひに及はず

〔兼三秋ノ物〕似柿　御所柿に似て肥滿、扁ならず、味大に劣れり

【八月】庭たゝき　鵲鴝也せの部みるべし

濁酒　醪の汁滓の酒なり、和名毛呂美今俗濁酒と云ふ

【九月】鬼箭　良安云ふ衛矛和名久曾末由美其葉秋に至て紅葉す、面色丹の如くにして青赤相、集錦の如し、故に俗錦木と云ふ、子を結ぶ、一顆にして尖り、小正にして紅なり、信州野州の山谷に有り

《ほ》【七月】星合星の契　（嬉諧記）天の河の東に織女あり、乃天帝の子なり、機梭に勞役して、容を理るに遑あらず、天帝其獨居を憐みて、將に嫁せんとして、河西の牽牛を夫に與ふ、嫁して後寃に女工を廢す、天帝怒り責て河東に歸らしめ、唯一年に一會せしむ

星祭、星の手向　（周處風土記）七月七日の夜庭を洒掃して、露に兒莚を施し、酒脯、時の菓を設け、香紛を河鼓織女に散し、云々註に云ふ二星辰會するに當て、夜を守る者皆私願を懐く、或云ふ天漢の中を見るに奕奕たる白氣あり、光曜五色あり、此をもつて徵應とす、見る者拜して願ふに、富を乞ひ、壽を乞ひ、子なきは子を乞ふ、唯一を乞ふ事を得、兼求る事を得ず、三年にして是をいふ、頗る其祚を受る者あり○牽牛、犬飼星、織女祭、河鼓、秋さり姫、蚕姫さゝがに姫、百子姫、糸織姫、朝顔姫、梶の葉姫、とも妻、梶の葉、天の川、秋去衣、石枕、九枝燈、庭の立琴、紅葉の帳、火取香、願の糸、衣裳を曝す、芋の葉の露、索餅、銀河、銀漢、雲漢、烏鵲の橋、紅葉の橋、年の渡、二星の屋形、乞巧奠、乞巧針、乞巧瓜、七箇の池、百箇の池、妻迎へ舟、妻こし舟、七種の舟、以上各頭字の部にわからて註す

星のかし物　いの部衣裳を曝すといへる條に註す

【星合の濱】本願寺の籠花　（増山の井）伊勢にあり星の逢ふ所なり　七日（紀事）昨六日の晩、東西の本願寺末流、並家ごとに、花數種を以て船の狀を作り、又槽の形を作り、中に草花數品を建て、御門主に獻ず、これを堂上にならべおく今日（七日）諸人これをみる

盆市　草市、荷の葉賣、蔴から賣、盆太鼓賣（紀事）凡七月街市に太鼓團鼓、大小、加伊羅木、三尺手拭、奇特頭巾、作髷、金銀箔の紋所等を賣、是盆踊必用の具也、又盆前截子燈籠、臺燈籠、金灯籠草挑灯、小行灯を賣、是皆中元の夜點ずる所也、又索麺、秈米乾瓢、茄子、角小豆、空閑梨、木酸柿、鼠尾草、荷の葉、麻から、大小の土器、供養膳破子、かんなりけ等を賣、是民間聖靈會の處用也

穂屋　みの部御狹山祭の條に出づ

鳳仙花　時珍曰其花に頭翅尾足具れり翩然として鳳の形の如し、故に名く、二月子を下し五月再び植べし、苗の高さ二三尺、莖に紅白の二色あり、大指のごとし、中空にして脆し、葉長くして尖り、桃柳の葉に似て鋸齒あり、極の間に花をひらく、或は雜色亦變易す、狀飛禽の如し、夏の初より秋の盡まで、開謝相續て實を結ぶ

木瓜の子　時珍曰其實小瓜の如くにして鼻あり、津潤に味不木なるものを木瓜とす、鼻は乃ち花の落し處、臍蔕にあらず、木瓜灰に燒て池中に散ず、以て魚に毒すべし（和漢三才圖會）世に木瓜と稱するもの、木草の註に合はず、是木桃にして、木瓜にあらず、武州江州より多くこれを出す藥肆以木瓜に充、近頃唐木瓜といふ者あり、人其花を愛す、是眞の木瓜なり

穗掛　（藻鹽草）田舍の稻のとり初め、新らしき藁のすりぬかといふものを入て穗を組合せ、門戸にも倉戸にも掛て神に奉るを、ほかけといふ

〔兼三秋物〕鬼灯　（和漢三才圖會）酸醬、五月小花を開く、絳白惹も亦白色にして蒂は青し、宿根より自ら出す、小兒中の白子を、擊去空殼として、これを舌上に蓄て脈吹ときは音あり、云々〇今の世に女の童のほゝづき吹事は（榮花物語）初花の卷寛弘五年の所に「御色白くうるはしうほゝづきなどを吹ふくらめて、云々（源氏物語）野分の卷『ほゝづきとかいふめるやうにふくらかにて、云々みえていとふるき事なるべしと醒齋いへり

南瓜　時珍曰南瓜の種、南蠻より出つ、三月種を下す、汜汎の地に宜し、四月苗を生じ蔓を引事甚だ繁し、一蔓十餘丈延べく、節々に根あり、地に近て卽着其蔕中空其葉の狀蜀葵の如く、大さ荷の葉の如し、八九月黃花をひらき瓜を結ぶ、正圓して大さ西瓜の如し、皮の上に稜あり、甜瓜の如し、一本に數十顆を結ぶべし、其色或は綠、或は黃、或は紅あり、霜を經て收む、暖處に置けば留て春に至るべし、一種南京瓜一名東埔寨一名唐茄子本草南瓜の下に所謂陰瓜是也

螺芋　形螺に似て大なり、故に名つく

ほど鷄　しの部鳴の條に出づ

星月夜　（わくかせわ）闇に星の多くて明るき夜をいふなり、只秋季なり、（東花式）古抄は、星月夜の名をあけて只秋なりとばかり云ひ捨て月に去嫌の論なれども、是は秋にして月にあらず、發句腦第三までには此名目あるときは、其三句は素秋にして、七句目の月の座に、他の季にて異名をすべし、これらは例の埒なりとぞ、すべては故翁（芭蕉の）遺訓也

【八月】譽申祭　十五日河內國長野山護國寺地藏院の緣起に云、當社は人皇十六代應神天皇の御陵なり、母后神功皇后の御胎內にまして、三韓征伐の後、筑前の國に於て降誕、御腕に鞆の形ある故に譽田別の皇子と號し奉つる、是弓矢の家を守たまふべきこと、此時に顯れたり、治世四十一年仙齡百十一歲の春、大和國豐浦の宮に崩ず、玉體を瑪瑙の棺に納め、河內國藥伏の岡に葬り奉る、三十代欽明天皇の勅によりて寶殿を營み、三所の神明を祀る、所謂中殿は八幡大菩薩左は仲哀天皇、右は神功皇后也、世に神祠多しといへども當社は玉體を納め奉るの靈廟にして、八幡宮の根源威驗深き事しるべし、云々〇神祭八月十五日也、先づ十四日の夜、奥の院の御廟前、本堂へ鳳輦を行幸なし、翌十五日午の剋還幸舞樂あり、四月八日若宮祭申樂稚兒舞隔年にこれを行ふ、放生會は當社にこれなきよし、但し社說の趣を記

す

放生會　やの部八幡の條に出づ

菩薩祭　廿二日肥前國長崎に於て、來舶人船神を祭る、八月廿二日これをほさまつりといふ（和漢三才圖會）舟の神を媽祖娘々といふ、俗これを舟菩薩といふ、唐船長崎に來て、往々祭る所の神是なり（船中の品物を水揚するをほさあけといふ）〇長崎に唐人寺とて四ケ寺あり、福州は石灰町崇福寺、漳州は下筑後町福濟寺、南京は寺町興福寺、この三ケ寺昔は唐僧住す、今は看主持也、外に目付寺とて筑後町に聖德寺といふあり、昔より和僧持なり、事修行あり、本尊は觀音なり、此日ほさ祭の日は和僧も唐裝束にて法體をみんとて、諸人群集すといふ、此日來舶人もその寺院へ參詣す、其美たり、故に名く、また花芒ともいふ也、穗をなしたる形獸の尾に似もいふ、四箇寺みな黃檗派なり

穗芒　花芒尾花芒の穗を尾花といふ

牡丹の根分　（和漢三才圖會）夏月川の圻を採晒し乾し、古き畑の土と細き沙と、以上三品篩和、八九月紅き芽を出すを移し栽べし、こ

れを培ふに糞溺を用ふべからず、冬月油滓を用ひて少し根の傍に入る、或は鮮魚の洗ひ汁を灌ぐも亦佳なり

頬赤鳥　正字未詳（和漢三才圖會）狀雀より小く背の色も亦雀の如し、其頬赤く胸白くして雌鶉の文あり、聲青鵐に似て細く高し、常に蒿間に棲む

畵眉鳥　（同上）俗頬白鳥也狀ち鶯より大く、灰赤色、眉白く畵くが如し、頬亦白くして間黑し、背上に黑點あり、翅尾略黑く、尾の兩端に白毛あり、腹微赤黃色臆下に赤き斑あり、其足赤黑く、其聲圓滑にして多く囀る、小鈴の音ある者、其聲を謂て行鈴、諸鈴の名あり

【九月】星見草　菊の異名なり（藏玉）庭もせにさくてふいろやほしみぐさまがはぬ色をまがきにぞみる　清輔○異名ならても星によせてよむ也（古今）ひさかたの雲のうへにてみる菊はあまつほしとぞあやまたれける

鬼目　鴨上戸（わくかせわ）人家の垣根に自然にも生ず、蔓草也、葉朝顔に似て小白花を開き、秋實を結ぶ、秋季とするものは其實を賞でて也、暮秋その實甚だ紅也、鵯好んでこれを啄む依て名とす○時珍曰白英は其花をいひ、鬼目は其子の形に象る

菩提子　（校量類珠功德經）諸陀羅尼及び佛名を念誦することあり木患子は千倍なり、淨土に生ぜん事を求めば、此珠を受よ、水精は百萬倍なり、菩提子は無量倍也（わくかせわ）昔洛東建仁寺の、千光國師、宋に入此種を得て歸朝し、筑前の香椎報恩寺に植られしより傳てみえたり、後其種を京師の寺々に傳てこれを植、泉涌寺六角堂覺山の西塔等にあり、宇治の興聖寺に予これを見る、一樹に葉二色あり、一つの葉は椋に似て厚く大也、又一つの葉は木犀に似たり、其葉に葦ありて葦より纖なる細枝を出し、それに花さき實を結ぶ、其實淡黑堅硬し

て念珠とす、香氣芬芬たり、興聖寺の僧曰く、是經に說に菩提樹なり天竺此樹下に於て佛成等正覺に給ふ樹なりといふ、樹の高さ一丈ばかり、枝極のふり百日紅に似て甚だ奇樹也

杜鵑草　（大和本草）（和品）葉は紫萓に似て短く小也筋多し、又篠の葉に似たり、莟は筆の如し、花秋開く六出あり、中より蕊出て叉花の形をなせり、蕊ごとに小紫の點ありて、杜鵑の羽の形に似たり、しほり染のごとし、莖の高さ一二尺にすぎず

《へ》〔兼三秋物〕辨慶草　（和漢三才圖會）景天和名以岐久佐俗にいふ辨慶草、本綱に景天極めて種易し、枝を折て土中におく、澆漑旬日便を生ずる也、二月苗を生ず、脆き莖微赤黃色を帶ふ、高さ一二尺、これを折は汁あり、葉淡綠色にて光澤あり柔に厚く狀長き匙の頭及び胡豆の葉に似て尖らず、夏小白花を開き實を結ぶ、連翹のごとくにして小く、中に黑子あり粟粒の如し、人皆盆に盛て屋上に養ふといふ火を辟べし、故に愼火草の名あり按ずるに景天佛甲草に似て大なり、これを折取て擔間に倒に懸るに日を經て凋まず、後地に栽るに亦活する事馬齒莧に勝たり、蓋辨慶は源の義經の家臣にして、女童相傳へて强勢の士とす、故に相比してこれを名づく、以岐久佐も亦活の字訓か

布瓜　時珍曰、六七月黃花をひらく、五出微胡瓜の花に似たり、蕊鱗具に黃なり、其瓜大さすばかり、長さ一二尺、甚しきは三四尺、深綠色、皺の點あり、瓜頭、鼈の首の如し、嫩なる時皮を去る、蒸に充老るときは大さ杵のごとし

【八月】紅蕈　（和漢三才圖會）陰處に生す、其笠紅色裏白く細き莖有て毒あり

蛇簟　大毒あり、故に人近よらず

蛇穴に入　（月令）仲秋月雷始收聲蟄虫抔レ戸三〇和俗春の彼岸に出、秋の彼岸に入といふ

《と》【七月】ともし妻　ともしは乏の字をよめり、稀少の義也、故に織女年に一度まれにあふを、ともしき妻とよみたる哥あり、さるを（増山の井）（学環）すべて活法の書に織女の異名のやうに出せるはわろし、かならず織女のあしらひ有べし

年の渡　織女の年に一度天の川を渡る意なり、（萬葉）玉葛不絶物可良佐宿者年之渡爾直一夜耳

燈籠　（一切經音義）燈籠又爐に作る、火の居所也、凡火を盛の器を爐といふ（紀事）凡中元燈籠を用ふる事、寛喜前後に起て、今に至て相續て故事とす、（定家卿明月記）近年民間に長竿を建て、その末稍に燈籠を設け、紙を貼し灯を棄て遠近ともにこれを見る、流星に似たり、（五雜俎）宋の初に中元下元皆燈を張る事上元の例の如し、太宗淳和年中始てこれをやむ○本邦の俗、中元の夜家々燈を張て廿四日乃至晦日に至る、或は朝日より三十日に至るもあり、又白き提灯を出すもあり○高燈籠、折掛燈籠、花燈籠、禁裡御燈籠、キリコ燈籠、以上各頭字の部にわかちて註す、舟燈籠、影燈籠、舞燈籠、揚燈籠（増山の井）にみえたり其形容未レ考、

燈籠踊　（紀事）洛北岩倉、花園兩村少年の女子、各大灯籠を戴き、八幡の社前に聚りて男子、大鼓を撃管を吹踊をすゝむ、是を灯籠踊といふ、頭上に戴く所の灯籠、踊の女子の家々、春の初よりこれを作り、互に其作る所の摸様を秘す云々

鳥居の火　せの部施火燒の條に註す

鳥屋勝　蜜新毛を生じ羽翼全く備り、鳥屋を出るの時、逸勢特に稀すべし、これを鳥屋勝といふ○去年よりはとやまさりする片かへり狩ゆくすゑの秋ぞかなしき　定家

蜻蛉　秋津虫、かげろふ、ヤンマ、（桑華紀年）神武天皇高きに登て、一此邦の形蜻蛉に似たるを以て、秋津州と名づく、（和名抄）蜻蛉（和名加介呂布）（和訓栞）かけろふのあるかなきかといへるは蜻蛉をいふ、（中略）水邊の木蔭にすみてその飛貌欻々と水に點し、閃々と電のごとくなれば、陽炎に比していへるなり（和漢三才圖會）蜻蛉は總名なり、大にして青色なる者紺繁、一名天鶏、大にして女紺なるもの胡黍、一名江鶏、小にして黄なる者馬大頭、最大にして身綠色、赤辛は小にして赤きものなり

富草の花　（風俗哥）あらたにおふるとみくさのはなてにつみ人てみやこへまゐらん、云々稻の花をいふといへり

頼桐　（大和本草）倭俗、唐桐といふ、高さ二三尺にすぎず、夏紅花をひらく、花繁多にして盛り久し、美にして愛すべし

莨麻（まし）　（わくかせわ）和名唐荏からがしは葉は大麻の如し、甚だ大たり、夏冬の間花穗を抽て色黄也、高さ丈餘に及ぶ實あり大薏ありとぞ

〔兼三秋ノ物〕番椒　天井守（和漢三才圖會）番は南蠻の義なり俗に云ふ南蠻胡椒、今唐芥子二月種を下し、葉柳の如くにして小、亦胡椒の木の葉に似て和く、五月小白花をひらき、實を結ぶ、數品大小長短尖りたると圓きとの種あり、初め青く熟すれば、紅なり、秀吉公朝鮮を伐とき、彼國より渡る故に、俗又高麗胡椒といふ○天井守、番椒の一種、事〳〵く上をむく故に名くとぞ、（猿蓑）（附句）てんじやうまもりいつか色つく　去來

唐の芋　是を連禪紫芋といふ、蘇恭曰毒少し爽て食ふべし、時珍曰連禪芋魁大にして子少し○莖紫色を帶ぶ、味美く栗のごとし

鳥劫　かの部案山子の條に出づ

【八月】富賀岡八幡祭　十五日(名所記)江戸城南深川にあり祭る所鍋が岡に同じといふ、別當大營山永代寺(臺宗)深川第一の大社也或はいふ神體は菅公の作なり、源三位賴政深くこれを崇む、其後千葉家に移り、足利高氏に傳へ基氏持氏に至り、後上杉に傳へて、太田道灌ふかくこれを信仰す、(鹽石集)寛永元年、長感法印靈夢の事ありて永代島に宮居を建立し、同八年成就す○深川の土人本居神とす、祭禮八月十五日放生會あり二三十年に一度正祭を行ふ

豐浦祭　(神社啓蒙)長門國豐浦郡龜山にあり、祭る神、中は應神天皇左は皇功皇后、右は仲哀天皇なり、(二十二社註式)人皇五十六代清和天皇貞觀元年、男山に遷座の時行教和尚行宮を造り、これを勸請す、後土御門院文明年中建立す○今八月祭なし、三月十四十五日の兩日龜山祭あり、海邊に宮あり、これを先帝祭といふ、安德天皇御祭禮なり阿彌陀寺に御陵あり、この祭前後四日の間飛事を得ず、又平家蟹赤間が關の海邊に上る、常はこの事なし、是先帝の御稱月也と里民いへり、又九月十四日十五日放生會あり二三十年に一度正祭を行ふ牽れ競馬あり、是八幡祭にや

鳥頭　蘇頌か曰附子其苗高さ三四尺、莖四稜を作す、葉艾に似て其花紫碧色、穗を作す、其實細小桑椹の如し、黑色本附子、一物を種成熟するに至て四物あり、天雄烏頭、側子、附子是也

黃蜀葵(ずいき)　時珍曰二月種を下し、或は宿き子土にあらて生ず、夏に至り始て長ず、葉の大さ芭蕉の葉の如し、深綠色、岐子を開く、五

の尖りあり、人の爪形の如し、旁に小き尖あり、六月花を開く、大さ椀の如し、鵝黃色、紫心六瓣にして側てり、旦に開き午に收み、暮に落、亦呼て「側金盞花」とす、其長きもの、六七尺、皮を剝て繩索となるべし

木賊刈　禹錫が曰木賊苗の長さ尺ばかり、叢生す根脩に一幹花も葉もなし、寸々に節あり、色青く冬を凌て凋ず、四月これを採○時珍曰木骨を治る者、これを用て磋擦ときは光淨なり、木の賊といふが如し、(和漢三才圖會)物を磋事砥の如し、故に砥草と稱す○木邦秋月これを採る

胡黃連引　千振(和漢三才圖會)苗の高さ五六寸一根に數莖、其莖細くして淡紫色、葉地膚草に似て小く、七月花をひらく、桔梗の花に似て小く、黃色○千振(大和本草)胡黃連は、黃連に似て大也、黃ならず味苦し、此草日本にありや未詳、千振とて、秋白花をひらき、葉細に味甚だ苦き小草山野にあり、たうやくといふ

酴醾醥　(大和本草)酴醾花の條下に云ふ、木邦のは白花千葉菊の如し依て筑紫にて菊いばらといふ、中花には黃色なる者なる者ありと、農政全書に記せり、故に黃色の醥を酴醾醥といふ

唐黍　江戸の俗たうもろこしといふ(春の日)徘『こめ殿を唐黍たかしみおろさん　荷兮

【九月】杼の實　蘇頌曰三四月花をひらく、黃色栗の花に似たり(わくかせわ)山木にて大木あり、葉の大さ七八寸、實は栗より少く大也、餅に作り麪として、凶年の食とす、木は斑文あつて、諸の器につくり箱とす、甚美なり、木曾の山中に多し、是を麪とするに、其粉を熱湯にてこね調へ、温純のごとく棒に捲て、温なる內に急にこれを伸す、冷れば堅く縮つて伸ず、其手廻し甚急なる故に、俗諺に檢麪棒

ふるといふは是なり

罌子桐實（ケシ）（大和本草）荏桐とも油桐とも云ふ、ダモと訓するは非なり、桐に似たり、其實大毒あり、食ふべからず、實に油多し民用をたすく此油をぬりて青漆の如くする法あり○時珍曰罌子桐の實を荏桐と名く、罌子は實の狀罌に似たるに因てなり、荏は其油荏の油に似たる也、（和漢三才圖會）濃州江州多くこれを種、油にしぼりこれを賣る、其功荏の油に同じ、煉成て漆に代ふ、桐油漆と名く、五色を塗事あたはず、又松脂をくはへ、繪模を塗ぬるべし、常の漆は白色を塗事あたはず、又松脂をくはへ、繪模を塗るに水を漏さず、これをチヤンといふ○年浪草に桐油ダモ、同物といへるはわろし

唐柿　撫花果の異名也、いの部みるべし

團栗　（わくかせわ）櫟の子也數種あり、ドングリは椎の一種小柄といふ木の實也、椎に似て大なり、味澁く食ふべからず櫛の形狀なの部みるべし

《ち》【七月】中元

十五日（修行紀）七月中元は、大慶の月、道書に云ふ、七月中元の日地官下り降り、人間の善惡を定む、諸大聖誓く宮中に詣し道士その日夜に於て經を誦し、十方の大聖ひとしく靈籙を錄し、餓鬼囚徒ともに解脫を得せしむ（五雜俎）道經に正月望を以て上元とし、七月望を中元とし、十月望を下元とす、遂に三元三官大帝の稱あり、是俗妄の甚しき也

地藏祭　廿四日（紀事）洛外六所の地藏詣なり、加茂御泥か池、山科、伏見、鳥羽、桂、太奏、これ也凡一日六所の行程十四里也、文德天皇仁壽二年、小野篁地藏の像六體を造り、木幡の法雲山大善寺に安置す、故にこの所を六地藏村といふ、その後保元二年平清盛、六ケ所に堂を造り、これをわかち置く、七月廿四日供養、西光法師、これを與り行ふ、今に至りて七月廿四日諸人六所に詣す、これを地藏祭といふ洛下の兒童も、又各香花か街衢の石地藏に供してこれを祭る、又今日六齋念佛の徒も、又六所の堂に詣て、太鼓を擊鉦を鳴し、以て顯念佛をなす、俗これを六齋太鼓と稱す、洛東光福寺（千菜寺也）の一派なり

ちゝろ虫　きり〳〵すの異名（異名分類）ちゝろむし夜ふく風やさむからんふくればいとゝよわる聲かな

〔兼三秋一物〕茅

ちかや（大和本草）白茅、木艸に蘇頌か云、春芽を生ず、針のごとし、俗にこれを茅針といひ、小兒好て食ふ毒なし、血を破り、血を止む是也

【九月】重陽

（潛確類書）重陽は魏の文帝の鍾繇に與る書に、歲往き月來て忽ち復九月九日、九を陽數として日月竝び應ず、故に重陽と云ふ俗に其名を喜して長久にして宜からんとす、故に宴して高會に享す

重陽宴　（公事根源）九月九日は節日にて侍れば菊の宴、行はるゝ也、これを重陽の宴と申、九月九日は月と日と九、陽の數に叶ふがゆゑに重陽といふなり、むかし天子南殿に出御なりて、節會行はるゝ、上達部、御子達より始て、其道のはみな深韻給はり、文つくり文臺にゐて講ぜらる、十月の旬のみにあらず、けふも氷魚たまふ例あり、又羣臣に菊酒を賜はる、大かたは五日の節會におなじ、御帳の左右に茱萸の袋をかけ、御前に菊瓶をおく、又茱萸の房を折て頭に挿めば惡氣をさるといふ本文あり　下略

千代見草　よはひ草菊の異名なり、慈童八百餘歲の後出て、彭祖と名を替て、長壽の術を魏の文帝に傳へ奉り、文帝百歲の壽を成たまへり、和歌にも菊に千とせの秋を詠する事珍しからず、此意にて名付侍るにや

契草　菊花の異名也（藏玉）陸奥國に兄弟ある㕝の、世にありわびて一木を二つにわけつゝ、戀しからんをりは、たがひに此菊をみてなぐさむべしといひけり、弟筑紫へ行けり、たがひに名殘を惜み別れけるとき、兄庭前の菊をこの菊二に分しまゝに、かた枝ばかりに花咲けるとなん

《り》（兼三三秋ノ物）律の調　索隱曰按ずるに律十二あり、陽六を律とす、黃鐘、大簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射陰六を呂とす、大呂、夾鐘、中呂、林鐘、南呂、應鐘是也、名づけて律といふ〇貞德曰りちのしらべ秋也、しかれば呂の聲は春なるべき道理なれ共、其さたなければ呂は難とす

【八月】龍膽（えやみ草）（和漢三才圖會）其葉、笹の葉に似て厚く九月花を開く、花紫にして鈴鐸の形の如し、上にむく、花中に苓子あり、笹龍膽となづく、（八雲御抄）えやみ草りんだう也云々〇思ひ草（八重垣）龍膽をいふ、また露くさをいふ、道具卿說「道のへの尾花がもとの思ひ草今さらになぞ物をおもはん〇くたに眞淵翁云、こは木丹をはぶきて云ふ字書に木丹は梔子の花也と出る是也、源氏をとめの卷に、四季をいへるその夏の方に、花橘撫子、さうび、くたに、などやうの花くさ〳〵うゑてとあり、是みな夏也、くたにくちなしなる事明らけし〇尾花がもとの思ひ草は、龍膽と定家卿の御說なればしばらくおく、くたにを龍膽といへるは誤としるべし

【九月】鯉魚風　九月の風也（李賀カ詩）門前ノ流水江陵ノ道、鯉魚風起ツ芙蓉老ノ

《ぬ》（兼三三秋ノ物）零餘子　野山藥と革解と蔓葉の形狀混雜して分別しがたし、革解亦零餘子ありて山藥のごとし、故に諸說革解を以て山藥とす、山藥は其蔓紫色を帶ぶ、其葉圓く尖あり、其花白色穗をなして下り垂る、革解は其葉圓くして尖り且稜あり、其蔓青色淡黃の小花をひらく、隨て莢を結ぶ、三稜あり、山藥もまた莢をむすぶ、故に見易からず

【九月】白膠木紅葉　時珍曰櫨木、木の形椿のごとし、五六月青黃色の穗をなす、一枝に累々たり、七月實を結ぶ、鹽膚子と名づく、葉の上に虫あり、五倍子を結び成す

《る》【八月】縷紅（わくかせわ）莖葉ともに細く杉藻の如し、莖より蔓を出し、八月小紅花をひらく、形丁子に似て長さ六七分の花なり、愛すべし

瑠璃鳥　（和漢三才圖會）碧鳥俗に云ふ、留里大さ雀の如くにして頭背翅上翠色、頰頷臆下に至て純黑、胸腹白く脊脚尾具に蒼色、其聲圓滑にして清く囀る

《を》【七月】鬼の洞の念佛　七日より十五日まで（滑稽雜談）洞は八瀨河の西の山中にあり、俗鬼の洞といふ、口狹く中廣し、長さ二丈許、深さ三丈、昔酒顚童子、此洞より丹波の大江山に移りしといふ、或は昔叡山に一童あり、僧徒其美しきを愛す、勤酒交歡の時時人を噉血をとり、酒に和してこれを飮む、一旦魅となりて、此洞に入る云々此話雜山詩集酒顚童子の洞に題すといへる序にみえたり、（雍州府志）每年七月七日より十五日に至り、村中の兒女、此洞に聚りて鉦を鳴らし、大に彌陀の號を唱ふこれを先祖祭といふ

踊　（書言故事）王子醇はじめ聾可を平らけ、軍士にをしへて訝皷戲をなし、遂に世に甚た行はる、子醇西人と對陣せし時、軍士百餘人に命じて訝皷をなさしめ、隙に軍前に出す、虜見て驚き愕く、遂にこれを擊破る、註に云ふ、訝皷戲は、樂人雜劇をなして跳躍をする也、世人皆

これに效ふ○本朝の俗、七月十四日より晦日に至り、毎夜大人小兒衛頭に踊をなす○懸踊、念佛踊、題目踊、燈籠踊、伊勢踊、木曾踊、小町踊、七夕踊等あり、各其頭字の部にわかちて註す

折かけ燈籠　（用捨箱）魂祭にむかし用ひし折かけ燈籠も江戸には絶たり中略（續虛栗）（貞享四年付句刻）「親は鬼子は口をしき蓑虫よ其角「折かけはらん月の文月　野馬中略竹藪を折かけて、その儘垣にするを折かけ垣といふ、此燈籠も竹を折かけてつくる故の名なり、うりものにてはなく、家々にてつくりしおほしく、よく竹をおしたわめたるもあり、又名のごとく折かけて上すほく形のわろきもあり一ツ一ツに異なりしとぞ

麻柯の箸　聖靈祭に供ふる箸也（續猿蓑）かなしさや麻木の箸もをとななみ惟然○時珍曰大麻其稭白うして稜あり、輕虛燭心とすべし

送り火　むの部迎へ火の條に注す

女郎花、荼花（おほとも）（和漢三才圖會）女郎之山麓に生ず、高さ二三尺莖に稜理ありて蒿の莖に似たり、枝兩々對生し、節の間に葉を生ず、其葉三七及前故の葉に似て細く長し、七月穗を生ず花をひらく、最細小正黃色愛すべし、本朝文粹に源順の詩に云、如二蒸粟一俗呼ヲ爲二女郎一者是なり、隨て子を結ぶ、花白き者男陪之と名づく、（大和本草）敗醬藻鹽草に白花なるを俗にをとこへしといふ又オホトチハ女郎花に似て花白きなり、をとこ、をみなの花ともいへり、敗醬と名づけしは、此花葉の臭醬の損じたるがごとしと本草にいへり、今試るに然り○此花を女子の艶姿にたとへて讀事、歌、俳諧ともに同じ、（古今）名にめでゝをれるばかりぞをみなへし、われおちにきと人にかたるな、僧正遍昭（續猿蓑）をみなへし鶴坂の杖にたゝかれな　馬莧

荻　荻の風、荻の聲（大和本草）荻はをきよしといふ、淀川其外處々にあり山野にも水邊にも生ず、中實也、よしのごとし少は其中とほり葦とまりじ生じ似たるもの也水草也○荻の葉に風わたりて音するを、荻の聲とも荻の上風ともいふ

翁草　（大和本草）麥門冬の一種にて、葉は大葉の麥門におなじ、暮春及び夏の初め純白なり、故に翁草といふ、後漸く青くなる、根に門冬あり、尤大葉麥門のごとくにして異草也、（滑稽雜談）按ずるに、和名抄など白頭翁を翁草と和らげたり、然れども本草網目を考ふるに別種也、白頭翁は俗にいふ猫草に略似たり、今云ふ翁草にはあらず、翁草は初生の葉純白なり、秋月紫花をひらく、穗の如し、猶考ふべし、又菊をも翁草といふ、混ずべからず、九月の部に註す

弟切草　藥師草、青くすり（和漢三才圖會）初生地膚子の秧に似たり、兩々相對し、枝に、椏あり、莖葉これを揉めば汁あり、須臾すれば紫色に變ず、六七月小黃花をひらく、單五瓣にして、細き、蘂あり、莢を結ぶ、三稜あり中に細子あり、藥に用ふ相傳ふ花山院の朝に鷹飼あり晴賴と名づく、其業に精しき事神に入、鷹傷を被ふる事ある時は、葉を按みてこれに傳るときは愈ゆ、人草の名を乞ひ問ども秘して言ず、然るに家弟密にこれを露洩、晴賴大に怒てこれを刄傷す、これより鷹の良藥をしる弟切草と名づく○又藥師草と名づく、（慈鎭和尙鷹百首）秋の野にまたかれのこる青くすりかふてふ鷹やさしはなるらん

旋覆花　蘇頌曰二月以後苗を生ず、多く水の旁に近し、長さ一二尺、以來柳葉のごとし、莖細し、六月花を開く、菊花の如し深黃色、七八月に及ぶ

〔兼三秋物〕鬼芒　時珍曰葉茅のごとくにして、長さ四五尺、甚だ快利にして、人を傷る事鋒刀の如し

苧生の浦梨　苧生の浦伊勢なり、和哥にをふの浦梨は、かたえさすよしおほくよめり、(古今)をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはん

小田守・晩稻守　山田守凡田を守り稻を守るは人畜の傷殘事を防ぐためなり

【八月】尾花の粥　(大内記田原康富日記)文安五年八月朔日乙卯云云尾花の粥の事、その由來何事なるや、自然見及ぶかのよし問しめたまふ、いまだ見及ばず、その子細をしらず候よし返答し畢る云々、(海人藻芥)八月朔日、小花の粥、内裏仙洞以下令レ用給ッ良藥、云々彼粥ノ調法、薄ノ黑燒を粥に入合する也(後水尾院當時年中行事)八朔の條に云ふ、夕かたの御いはひ、初献にそへてをばなのかゆ(はきのはし也)供す云々

鬼のしこ草　紫苑の事也しの部みるべし

白粉の花　(和漢三才圖會)白粉草正字未レ詳、春苗を生し、冬枯る、高さ二三尺叢生す、葉淡青にて柔く、白雞頭に似て微小く圓し、其花朝以後萎み夕陽に至て開く、深紅色五出、單葉にて蕚の長さ一寸餘亦紅花の中に紅の蕊を出す、細く糸の如し、蕚の本に子を結ぶ、灰黑色皺胡椒の如くにして中に白粉みつこれを採て婦人の面に塗光澤鉛粉に優れり○中華の書にみえず、外國の物ならんと、大和本草にみえたり

車前子　(蘇頌圖經)春の初め苗を生ず、葉地に布く匙の面の如し、年を累し者長さ尺餘、中に數莖を抽て長き穗を作す、鼠の尾のごとし、花甚細密也、青色微赤き實を結ぶ、蘆草のごとし、今人五月苗を採て七八月實を採る(滑稽雜談)此者苗或は花をいはず、古來より實を以て八月の部にせり、故實に准るべき也

尾花　ほの部穗芒の條に出づ

思草　りの部龍膽の條みるべし

黃蜀葵　ワウスゲ、トコロ二名一物との部みるべし

落穗　詩經此ニ有ニ滯穗一伊寡婦之利、注ニ云ふ帶は遺り棄るの意也、收成の際に滯漏の木穗あらしむ、寡婦これを以て利とする事を得る也、此豐成餘あつて盡く取らず、又繯寡とこれを共にする事を見はす、(列子)拾レ穗ヲ者行、歌ふ

落鮎　澁鮎、下簗(和漢三才圖會)七八月最も長さ尺に近し、此時穌芥子の如き者腹に滿、其背淡斑の文を生す、刀刃の鏽たるが如し、故に鏽鰷といふ、八九月湍の水艸の間に子を生て、後漂泊して流に隨ひ下り死す、是落鮎なり、其下り落るものを待、簗を構て以てこれを捕ふ名づけて下り簗といふ、九月より肉瘦て味甚劣る

【九月】岡崎祭　十五日或は十六日東天王祭、九月十五日、洛東岡崎にあり、(名勝志)九月十六日祭禮云々(紀事)東山岡崎正一位東天王祭、神輿一基鉾七本あり、その内一本の鉾、釼下に埴を以て鷹二連獵犬一疋を造り、彩色を施す、是を犬鷹鉾といふ、其傍に感神院の三字を彫刻す、疑らくは舊感神院の鉾が云々當社は聖護院の杜にあり、故有て吉田の地に移す、然るに同神社亦岡崎にあり、故に東西を以てこれを分つ(雍州府志)犬鷹の鉾は、村人神寶と稱してこれを崇む

豺祭レ獸を　(月令)此記ニス戌月之候ヲ祭レ獸ヲ者祭ニ之於天一、戮レ禽ヲ者殺ヲ之食ッ也

弟草、少女草　菊を云ふ、少女草同前と藻鹽草にいへり、梅の花を兄といひ、菊を花を弟といふ故にや○(古哥)露までもあひおもへかし少女草、あらき風にも花はあてじな

翁草　菊をも松をもいふ、住吉の里に五位の松とて年ふりたる松ありかの松の神やありけん、後には化して翁に成て往けり、常に心をすまして琴をしらべ、又庭に菊をうゑて愛しけり、翁が歌「我庭はきしの松蔭しかぞすむ、翁が草の花もさかなん○此故事によりて、松をも菊をもともに翁草といふよし也

老母草の實　三四月一莖を抽で淡黄花を開く、穗の如し、其莖高からず隨て實を結ぶ、生は青く熟すれば眞紅、累々として天南星の實に似て可レ愛(三才圖會)萬年青、葉芭蕉に似て隆々として、衰へず其多壽を以て萬年青と名く、(大和本草)唐には一切祝儀に用るよし、花鏡にみえたり

落栗　熟せんとして子出て、其苞自ら裂けて地に墜る物是也

遲稻・晩稻　時珍白粳稻早中晩の三收あり、六七月收る者を早粳とす、八九月收る者を遲粳とす、云々是遲稻なり、時珍曰十月收る者を晩粳とす、云々是晩稻なり

落水　(苧環拾遺)田のおとし水といへり、幾内には所々稻を苅て後、田に菜種を植る也、故に兩作所といふ、田の水を落すは菜種を植る用意也

おけすい　(わくかせわ)飫憩の木と舊事紀に載たるもの是なり、秋甚紅葉す、立花を好む者秘藏してこれを挾す

《わ》【七月】早稻　時珍曰、六七月收る者を早粳とす、食に充べし

童相撲　(扶桑略記)延喜元年七月廿八日丁丑、童相撲廿番を御覽、綾綺殿において此事あり、(古今著聞集)延長六年七月六日、童相撲廿番終りて舞を奏す

〔兼三秋物〕木綿取　桃吹(和漢三才圖會)其實桃の如し、四ツに裂て中に白綿を出す、これを桃吹といふ、綿車を以て中の子を繰り去り、竹を以て小弓を作り、弦を牽て綿を彈く、それを匂といふ

若煙草　(和漢三才圖會)煙草、相思草、淡婆姑、淡苞菰羅山文集に、侘波古希施婁、皆番語也、云々　按ずるに天正年中、南蠻の商船始て此種を貢す、以長崎の東の土山に植、二月種を下す、五月移し植、新芽を摘去り蟲を除く事、毎且怠るべからず、高さ三四尺、葉商陸に似て長大、七八月葉を采り、藁莚を覆てこれをねさし、盒一宿して取出し、一葉毎に繩にはさみ、編るがごとくにして晒し乾し、一夜露宿して後、晒し乾す、黄赤色となる、皺を擴げこれを收む、云々若煙草是なり

【八月】楓菌　(和漢三才圖會)これをくらへば笑ひて止ず

渡鳥　此の月諸鳥異國より群飛して、山林江湖に來る是を渡鳥といふ

【九月】度會新嘗會　外宮十六日、内宮十七日、内裏より初稻を伊勢兩宮へ奉らせ給ふ也、大嘗會といふ、御即位の後、日本國中の神々へ御饌を奉らせ給ふをいふ、新米を奉つる、故に早稻米の御祭といふ

吾亦紅　陶弘景か曰地楡其花子紫黑色、豉の如し、故に又玉豉と名く云々是花彙にいふワレモカウ、本名玉豉、一名地楡、比叡山、鞍馬及び近道に生ず宿根より二月苗を生じ、初生地にして獨莖直上、高さ三四尺、對し分て葉を出す、楡の葉に似て稍狹く、細長くしく鋸の齒の狀に似て青色、七月花をひらく、椹子の如くにて紫黑色

《か》【七月】梶の葉姫　棚機七姫の内なり(異名分類)梶の葉姫は八雲御抄に梶の葉にもの書も、皆由緒あるか、云々溪雲問荅に芋

の葉の露を硯の水とし、梶の葉七枚に歌一首づゝ書よしみえたり、是等によるに、皆二星を祭る具、專要の物を以て名付とみえたり

梶の葉　（年浪草）和俗七月六日、市中に穀の葉を賣、明夜詩哥を書て以て二星に供する所なり、又短册に楸の葉を用て詩歌を書く、（和漢三才圖會）和名加知（俗云ふ加宇曾）按ずるに楮の皮今多く紙に造る、又布に織、往昔木綿と稱す、今も亦祭祀の人木綿繦に被る、上古の衣服に象る歟、今二星に供する時、詩哥を穀の葉にかく事、牛女神を祭るの故に、木綿の義に象るか○菅章長（高辻家）朗詠抄に曰、昔余吾の海に天人下り、羽衣を獵師に盜まれ、心ならず獵師の妻となり、年月を經て、羽衣を取得て天上し、再び人界に下りて、獵師と共に天上す、女は織女となり男は牽牛となる、其再び天へ上るの時、梶の木の上より糸をおろし、是に取付て登る故に、二星の手向に梶の葉を用ひ、願ひの糸とて五色の糸を用ふと、云々略して爰に記す、此事淡海志にもみえたり

梶の鞠　あの部飛鳥井鞠の條に出づ

河鼓　しの部二星の條に出づ

烏鵲橋　（藻鹽草）鴉鷺記に云ふ、史記に云ふ瓊に夫婦あり、夫を遊子と云ふ、婦を伯陽と云ふ、偕老を契り、子は二八の候、陽は三四の旬也と、云々此文のこゝろは、遊子十六歳伯陽十二歳より夫婦となる、互に志切也、共に月を愛する事限りなし、夕には月の出るを待て里に行、曉は月の入る事を惜みて高峰に上る、伯陽九十九にして死す遊子深く歎て月を形見とみるほどに或夜伯陽鴉に乘て空を飛ゆきければ、遊子殊に歎きて百三歳にて死せり、天の星となりて、烏に乘て天を飛行て、銀河に望て川を隔てたり、されども帝釋毎日此河にて水をあび給ふ故に、木けがれ有て渡る事を許されず、然りといへども七月七日には、帝釋善法堂へ御參りの日なれば、水をあび給はずして渡る事を許さる、年に一度といへども、人間の爲には一日一夜なり此とき烏と鵲と羽をならべ橋として彦星織女を通す也、是を鵲のはしといふなり云々（大和本草）鵲は畿内東北の國にこれなし、筑紫に多し朝鮮より來りしにや、高麗烏と云ふ、鳩より小くつぐみより大也、羽に黑白あり、尾長し、本草に載たる鵲によく合り

門茶　せの部攝待の條に註す

懸躍　（紀事）十四日より晦日に至て夜に入、大人小兒街頭に躍を催し或は又各同列して相知處の家に至て大に踊躍をす、是を懸踊といふ、掛らるゝ所の家再び踊躍を催して、これに酬ゆ、是を返しと稱す

蜻蛉　との部とんぼうの條に註す

蟷螂　いぼじり鎌切同物也、いの部みるべし

柏ちる　（御傘）柏ちるは夏なり、無言抄に秋と有は僻事かかやうの常盤木の散るは夏也、中略今此國の人の申柏は、初秋に紅葉してちるものといへり、此注につきて無言抄なとにしるされたりとみえたり（增山井）夏の部に、貞德說夏なり、又一說秋也、（貞享式）此柏は御傘に說ありて、論語の松柏を證文とし、畢竟は雜となせれども、爰には散字を結ひて決て秋と定へき也　下略

〔兼三秋物〕桂男　つの部月の桂といへる條に出づ

鴈來紅　葉雞頭時珍か曰雁來紅、莖葉穗子ともに雞冠と同じ、其葉九月鮮紅也、これを望に花のごとし、故に名く、吳人呼て老少年とす、一種六月葉紅の者あり十樣錦となづく○雞頭や雁のくる時猶赤し　芭蕉（增山の井）雁來紅、一說かまつかの花、云々枕草紙にかまつかの花雁の來と書と云へり云々

柿　時珍曰、柿高樹大葉、圓にして光澤あり、四月花をひらき、黃白色、實を結ぶ靑綠色、八九月熟せ○烘柿、酥柿、白柿、胡盧柿、樹練柿木淡柿、似柿、羅伽柿、圓座柿、筆柿、田舍柿、君遷柿、橙柿、澁柿以上各頭字の部にわかちて注す

柿餠　藏器曰柿餠黃柿に米粉を和して蒸て小兒に與ふ食して下痢下血を止む

案山子　彈、鳥却、僧都、添水（和漢三才圖會）藝文類聚云ふ、古者三皇の世には、人死して未棺槨葬あらず裏に白茅を以し、これを中野に投ず、孝子其禽獸の食ふを視るに忍びず、彈を作以てこれを守り鳥獸の害を絕つ、按ずるに俗にいふ案山子、今田圃の中に草偶に弓を持せ以鳥雀を防ぐ也、備中國湯川寺の女婢僧都跡を民間の奴に嘱まして、田に入稻を護以て鳥雀を驚かして務とす、今に至て鳥雀を懼すれば僧都を僧都とす（續古今）今山田守僧都の身こそかなしけれ、秋はてぬとふ人もなし、玄賓（和訓栞）傳燈錄にいふ案山子なりといへり、鹿かゞしなるべし、山田のそほづといへるも是なり、信野にて節分の夜いわし豆がらをさすをやつかゞしといふ、燒かゞしの義也、按囊抄には炙串と名くとみえたり、いわしを焚は魍魎の畏るゝと傳ふる意なり（增山の井）そほづは、添水と書て、水邊にしかけて水のちからを添て音を出す鹿おどし也、中略かゞしとそほづは別の物なれども、女婢の山田守そほづと、僧都にそへてよみ給へる故に鳥おどしの人形と心得て、古歌にもよめる事多し、然れども質は別の物也、（石川丈山覆醬集）竹筒尺餘上短く下脩し、桔槹に竪て、首を下流に矯さする故、尾片石を鼓く、旋轉俯仰「我亘々」の聲を發揮す（連心院云我亘亘は竹筒の鳴聲也）聲韻凡ならず云々是添水なり

鎌帛　（射恒秘藏抄）家の中に纏といふ物を立て、又それに纏といふ物

をたて、菅笠をきせて立たれば、鹿の田をはまぬと也、それを鎌帛といふ歌に「我宿のかましめ立るしるしにやわがに山田に鹿のかよはぬ

鹿火屋　（年山紀聞）說々あれど、山田に猪鹿のつく所に小き家を作りて、慶埃何くれの喚きものに火をくゆらし、烟をたて、鹿をおひやると心得べし、或は香火屋又置蚊火など、字をかりて書る所もあるによりて、まどふ人もあれど、用ふべからず、云々

かせぎ　鹿の異名也（玉葉）山ふかみなる、かせぎのけぢうきに世に遠ざかるほどぞしらる、（赤染家集）朝ほらけしとみをあくとみえつるはかせぎのちかくたてる也けり

肩拔鹿　匡房卿哥「かぐ山のはゞかが下にうらとけて肩ぬく鹿は妻こひなせそ、舊事紀第二に云ふ復命ノ中臣祖天兒屋根命忌部祖天ノ太玉命ヲ內ニ拔天ノ香久山之眞牡鹿之肩ヲ而取テ天ノ香久山之波波加ヲ而令ム占ヘ矣、古事記の說これにおなじ、神代には鹿の肩骨を拔てうらなひける也ははゝかの木は和名抄に云ふ樓（桃和名波々加一名爾波佐久良）延喜式に云ふ凡年中御卜料、波々加木皮は、大和國有封の社に仰て採てこれを進らしむ

片鶉　夫婦相そはず、離れて居るをいふ

駈鶉　（藥鑒草）鷹狩也、これは馬上にて鷹を居てかり立て鳥に合するをいふなり

【八月】菅大臣祭　十六日（雍州府志）京四條の南、綾の小路西洞院の東にあり、南北道を隔て是菅公の宅地也、その內北に菅神の祭あり、是菅神降誕の地也、故に社を建てこれを祭る（神社啓蒙）或人云ふ、此所昔菅家の館也、一夜飛梅の天神といふは是也、今に飛梅の跡この地に存す、又說に文子の宅にして、菅神はじめて遷座の地也、洛

の人阿米神と稱す、例祭八月十六日、社邊の氏子是を祭る、神輿一基童子素袍供奉、社僧これにしたがふ

龜戸天神祭　廿四日○江戸本所の末龜戸村にあり、祭る所筑紫太宰府の神體に同じ、寛永三丙寅年菅家の末葉大鳥居信祐建立す、祭禮八月廿四日、本所の牛御前と隔年也、當社の神寶天國の劍といふあり　この外後水尾院の宸筆安樂寺の瓦硯、もみぢの文臺（大閤秀吉公の文臺也連歌師昭巴にたまふといふ紅葉の蒔繪有り）等神庫に藏、祭の日奉幣神樂等あり、近來正祭なし

貝割菜　まの部間引菜の條に出づ

萱苅　（大和本草）精草、整葉節穗皆蓁の如くして小也、宿根より春苗を生ず、葉に青白のたて筋多くまじりて本末に通ず、四五月穗を生ず中華の書にいまだ見ず、蓁茅の類也、カルカヤともいふ、（新撰六帖）嵐ふく岡邊に茂るかるかやの上葉の露はまづみたれけり、衣笠內大臣○萬葉集に苅萱とよめるは、後世いふ一種の苅萱にあらず、秋苅とりたる萱をいふとぞ、和訓栞に雀麥也といへるはわろし

萱苅、萱草、萱の軒端　（倭名抄）茅（和名加夜）萱（和名加）（大和本草）芒（スヽキカヤ）長短一種あり、短き者を、カヤといふ（御傘）萱草、萱が軒端、植物にあらず、秋にもなまじき道理ながら、かやうの名草は、秋の季大切なる、故に用ふるがよきと也、（わくかせか）御傘編集の時、事甚だ無數によつて如レ此了簡多し、屋根に葺て何十年になるもの、秋季植物には用ひがたし、宜しからざる式なりとぞ、蔦門の徒はこれを用ふべからず

桂の花　木犀（南方草木狀）江南の桂、八九月花をひらく、子なし、此木犀なり（本草綱目）菌桂、巖桂の二種あり、菌桂は葉柿の葉の如くにして、尖り狹く光澤あり、三縱の文ありて鋸齒なし其花に黃あり、白

あり、巖桂は其葉に鋸齒あり、枇杷の葉の如くにして粗蠻める者、俗に丁木犀とす○木犀の花、香氣高く人をして醉しむ

薏草　蘇頌か曰薏草は葉竹に似て細く薄し、亦圓小也、荊襄の人煮て黃色を染む、極て鮮好也、（和漢三才圖會）多く越前より出す、以て染家必用の物とす、按ずるに倭の薏草竹の葉に似ず、芒の類也、江湖大浦の邊山中最も多し

老鴉瓜　王章○時珍か曰王瓜一名土瓜其根土氣を、作し、其實瓜に似たり、故に土瓜と名く、王の字、何の義といふ事をしらず、瓜菴子に似て熟するときは色赤し、鴉喜でこれを食ふ、故に俗赤菴老鴉瓜と名く、三月苗を生じ、其蔓蠻多し、其葉圓くして馬の蹄のごとし、六七月五出の小き黃花をひらき簇をなす、子を結ぶ事纍々たり、熟するときは紅黃の二色あり、（大和本草）其實まるく長し、玉章と云ふ王瓜の實は文をむすべるに似たり、故に玉章といふ

籬豆　本草を考るに、人家の籬垣の側に三月種を下す、蔓生して延繩ひて籬を蔽ふ故に、沿籬豆と名く、又和俗破壞豆といふ、此豆一粒を植れば、豆八升を得ると、破壞と八升と音近ノ　故にいふ

芥菜蒔　時珍曰芥數種あり皆八九月に種を下す

雁　（月令）仲秋月鴻雁來賓○時珍か曰雁の狀鶩に似て亦蒼白の二色あり、今人白くして小なるものを以て雁とす、大なるものを鴻とす、蒼き者を野鶩とす、雁に四德ありて前に鳴て後に和ふ、其禮也、寒きときは北より南の衡陽に止る、熱きときは南より雁門に歸る、其信也、偶を失ひて再び配かず、其節也夜群宿して一奴巡驚す、其義也、蘆を啣て繒繳を避く、其智なり、捕る者これを蒙て媒として、以其類を誘ふ、是一愚也、南に來る時、脅痩て食ふべからず、北にむかふ時肥、故にこれを取べし○白雁、鴻鵠海雁たのむの雁、代かへる

雁二季鳥、以上頭字の部にわかちて注す○はらまだらといふ一種あり目ふち黄にして其外は雁の如し○新方雁は頸長し、關東にあり

雁の書　（漢書）（略文）前漢の蘇武字は子卿杜陵の人、武帝の時、節を持て匈奴に使す、單于これを降さんと欲し、武を幽し、大窖の中に置漢武を求む、匈奴詭て言武死すり、常惠漢の使者に教ていはしむ、天子上林中に射て鴈を得たり、足に帛書を係く、武其澤中にありと、是に由て還る事を得たり（古今）秋風に初かりかねそきこゆなるたか玉つさをかけてきつらん　友則（曠野）落着に荷兮か文や天つ雁　其角

雁陣　（本朝無題詩）鴈陣數行微月冷虹橋一の道遠天晴　茂明

雁金　（和漢三才圖會）所謂鴈金とは鴈之鳴也、萬葉集に多く此三字を用ふ、然ども又鴈鳴者今者來鳴沼と詠ずるときは、自ら鴈の名となるに似たり、遂に鴈金の二字を用ひて本意を失ふ、云々

雁字　山谷詩に云ふ鴈字一行書絳宵○談林派發句阿蘭陀の文字か横たふ天つ鴈

橿鳥　（和漢三才圖會）好工橿樹に棲む故俗呼て橿鳥といふ、又懸巣鳥と名く形鳩より小さし、頭背腹共に灰赤色、眼の邊に白色あり、翮灰黑、其小羽に青黄の斑あり、啄二寸許、稜ありて黑色、脛色亦黑し能鳴て諸鳥の聲をなす、又人の言をなす商家除夜元日に炙り食ふ以て借て取の義を祝ふ

河鹿　（俳諧歳時記）蛙也、好みて山川にあり、夏の季より秋に至りて鳴哥にはかはづとのみよみてかしかとは詠せず、俗傳に西行に哥ありといふものは、臆說にして考ふる所なし、その聲鹿に似たれば、俗呼て河鹿と言ふ

鯖　同書云ふ、正字は黄顙魚、杜父魚の屬也、水底にありて鳴魚なり故に此魚を誤りて河鹿と稱す、諸國にあり、伊豫越前越後加賀近江山城等に多し、その土地によりて名もかはり形も聲も大同小異也石伏、コリ、石クラヒ、石モチ又川才コゼ（伏見）クチナハドンヨ（伊豫）マルコ（嵯峨）ムコ（近江）アラレ魚（越前）この外にも猶あり、近ごろ山海名產圖會てふ書に、委しく論じたればこゝに略記す○青藍云ふ、蕉門の先哲のよめるかしかは蛙にあらず（猿簑）あやまりてききうおさゆる鯖かな　嵐葉

〔九月〕桂の宮相撲　八日（拾芥抄）六條の北西洞院の西、九月八日桂の宮相撲『今昔物語』天暦の御時に、震旦より渡りし僧長莠となんいひける、元醫師になんありける、桂の宮の前に大なる桂の木ありければ桂の宮とぞ人いひける、長莠唐の桂心にまされりといへり、（雍州府志）桂の宮一町云々○神社第宅詳ならず

神田明神祭　十五日○神社江戸湯島にあり、祭る所の神二座（神社啓蒙）大己貴尊鎭座とす、將門の社は本殿と去ると百歩ばかり○大己貴尊は、人王四十五代、聖武天皇天平二年鎭座也、將門の靈は六十一代朱雀帝、天慶三庚子年二月十四日、將門滅亡すその後怨靈しば〳〵崇あるに依て延久のころ一遍上人三世眞教坊、將門の靈を以て神田の神社に合せ祭る、當社はしめは今の神田橋の邊にあり、此所いにしへ芝崎村也、今に至りて祭禮の日、神輿をしばらく此所に留て奉幣あり、祭禮九月十五日、麴町山王と隔年也、神輿二基、引山三十六本踊屋臺太神樂等これに從ふ、この祭の練物に、賴光大江山入の形狀を挨して、二間余の鬼神の頭を造り臺にのせて數人これを荷ふ、（引山の外今は是らの事をとゞめらる）神事に預るの町、内神田外神田大傳馬町、濱町邊、日本橋通り町、前後都合三十六町也、神幸の町々は夜宮より棧鋪を構へ、種々の提灯を出して甚賑へり、神輿渡御の町は、本社より鎌倉町通り、飯田町より田安御門に入、上覽所前、常盤橋十軒

店通り、筋違御門を過て、本社へ還御也、大抵祭式山王祭におなじ、むかへは神事能あり、今はなし神主芝崎大隅守社家五人巫女等あり

上難波祭　廿一日〇攝州西成郡大坂博労町にあり、祭る神三座、第一稻荷(倉稻魂神)第二祇園(素盞烏尊)第三平野(仁德天皇)後三條院延久三年勸請、俗に仁德天皇の祭といふ、毎年九月廿一日神事神湯等あり、氏子醴を醸して互に相贈る也、社說に仁德帝の社は、元大江橋の東上町の內にあり、是いにしへ皇居の跡なり、秀吉公の時上難波に遷す

桂川の御祓　のの部野の宮の別といへる條に注す

かはらよもぎ　(和名抄)菊(和名加波良與茂木又云加波良於波岐)(大和本草)順か、和名抄にかはらよもぎと訓ず、但野菊をるべし

かたみ草　菊の異名なり、(藏玉)めかれせずいつもみまくのかたみ草なれしも秋とおもふ名殘に』此菊は奥州新妻の里にあり、因緣無常也、新妻といふ物語にあり、業平作、是はきくといふにつきて秋に入るゝか、彼物語は十月十五日とあり、然は冬か

榧　時珍曰、其木文木と名づく、斐然として章采あり、故にこれを榧といふ、信州玉山懸の者を佳也とす、中略按ずるに、羅願爾雅翼云ふ榧は杉に似て杉に異也、柀は美しき實あり、て木に文采あり、其木桐に似て葉杉に似たり、絕て長じ難し、木牝牡あり、牡は華き牝は實なり、葉のごとし、其核長くして撒攪のごとし、核に尖る者あり、尖らざるものあり、稜なくして殼薄し、黃白色、其仁生にして食ふべし亦焙り收むべし、一樹數十斛に下らず、(大和本草)其木脊を燒ば、蚊退くカヤリの木也りの字を略せり

櫧の實　時珍曰三四月白花を開き、穗をなす、栗の花のごとし、實を結ぶ、大さ櫸の子の如し、小苞あり、霜の後苞さけて子墜つ

雞冠木　(和漢三才圖會)本草綱目を案ずるに、楓は岐あつて三角をなす霜の後に至て葉丹し愛すべし、雞冠木も亦楓の屬か、然し楓の花白色、實大にして鴈の卵のごとし、雞冠木の花實と迥に異なり、猶朝鮮の松の子大にして常に異なるが如し、雞冠木は數種あり、高き者二三丈、葉尖りて岐あり、蝦蟇の手の如し、大低七八岐、或は九岐、又十三葉の者あり、これを十二重といふ、三四月嫩葉紅色す、滿山に映ず、五六月青葉に復て深秋其葉黃み落つ、歲を經るものは五月小黃花をひらく、狀飛蛾のごとし、梢頭に實を結ぶ、中の子牛房子のごとし、和州龍田、雍州高雄山最多くこれあり、秋に至て葉丹く赫耀たり天下これを賞美す、凡草木、秋紅葉する者多くあり、蝦手の樹の葉勝たりとす、故に只紅葉と稱するは卽蝦手の葉なり

柿紅葉　(八雲御抄)紅葉に詠する木、柿云々是柿紅葉なり、一說に實の赤きを柿もみぢといへるはわろし、(夫木)秋くれば山の木の柿のいかならん園生のは柿もみぢしにけり　爲家

川の紅葉　紅葉の川にうつるをいひ又うきに流るゝをもいふ

枯草の露　枯野枯草は冬なれども、露をむすびては秋なり

《よ》【九月】淀祭　廿三日(神社啓蒙)伊務向の神社は山城國紀伊郡淀の驛小橋の東河中にあり、祭る所の神一座、天遊向津姫尊、(寶基文圖に云ふ天照太神なり〳〵石清水社家說)八幡遷幸の緣によりて、伊勢向と號し、こゝに祠す、〇一說に淀姫の社、祭る所今三座、淀姫の神、千觀內供の靈神、天神以上三座、傳云ふ千觀法師、肥前國佐賀郡、淀姫の神をこの地に觀請す、淀姫の明神は、八幡宗苗の叔母、神功皇后の御妹と云々(紀事)淀大荒木の社祭り廿二日、或は淀水垂淀姫人明神の祭廿三日と、何れか是なるや、土人云ふ淀祭と稱する者是なり、

是淀の鎭守也、神輿一基、淀しよりて跡を先へ振かはりて同じ堤を歸る也、故に跡か先かとは此祭を云ふ也

齢草　ちの部千代見草の條に出つ

夜寒　（御傘）夜寒秋也寒き夜寒み夜の寒き皆冬也

《た》【七月】織女祭　○牽牛　或書に云ふ牛女の天河に會ことは此流俗の雜書に出て、是を經史に尋るに、未典據することあらず、詩經に皖彼牽牛、跂彼織女といへるを說者以爲、二星名ありて實なし、夏小正に言く、七月初昏織女正ニ向レ東ニ十月織女正ニ向レ北ニ（五雜俎）牛女の事齊諧に始り、武丁の妄言に成り、博物志に成る、槎に乘の浪說、千歲の下に婦人女子傳て口實とする事可なり、文人墨士、乃習て常語とす、天上の列宿をして橫に汚蠻を被らしむ、亦怪むべきの甚しきにあらずや、云々然とも詩哥連俳の道、浪說といへども、用ひずんば有べからず

薫姫　織女の異名なり（異名分類）公事根源に乞巧奠に机の上に火とよによもすがな空燒物ありと云々

短册竹賣　むかしは七月六日市中穀の葉をうる、明夜詩哥を書て二星に供す、或は短尺に楸の葉を用ひて詩哥を書り、今は民間の兒女、五色の紙を剪て短册とし、これに古哥を書きさゝの葉に結ひ、高く屋上に出すこれ竹竿の五絲糸に換るものか、昨今市中短册竹賣多し、又近來五色の短册紙を賣ありく也

七夕踊　小ᵒ町踊（還魂紙料）正保の頃の畫卷に、七夕踊の圖を載せたる其詞書に云ふ、さても七月七日は、中略乞巧奠とて、人みな今宵は七夕祭するもなまめかし、こゝに七ツ八ツばかりなる小姫たち、美しく出立、太鼓を手毎に持つれ、面白くうたひ踊まはるも、みな是七夕をなぐさむる事、昔今に變らずとかや云々七夕踊とて別にあるにあらず、小女の人情に盆をまちかねて、七夕よりをとる故の名なるべし、愚案問答にいふ（享保十七年著）七月七日七夕を祭る中略面白く歌をうたひ大內かた町かた小路々々友達のかたへゆき踊をかけたり、むかしより小町といへば、人每の美人のやうに思ひ名つけて、小ᵒ町踊と名付たり云々〇七夕踊を小町踊もといひし也、小街踊といへる說はわろし

題目踊　洛北修學寺村の老嫗法華の題目を唱へ踊をなす、是を題目踊と云ふ、松か崎も同じ

高燈籠　（用捨箱）昔々物語（新見翁著）に昔は死去して其年より、七月高燈籠といふものをたつる、七回忌までたつるもあり、立やうは六月晦日長さ五六間の杉丸太、上に三角のいらかを結び、杉の葉にて包四手をきつて付、燈籠は辻番の行燈の形にちひさく作、上ひらき下すぼませ、屋根も板にてこしらへ、玄關と臺所の間の廣みに建て、七月朔日より晦日まで、每夜暮六ツより明六ツまでともす、一向宗にはみえず、他宗はみな〳〵かくのごとし、哀にみゆるなり』とあり、是享保十八年に記されしなれば、既に當時在家の高燈籠の絕たるは明かなれと、いつの頃までありしかしらず下略（猿蓑集）高燈籠ひるはものうき柱かな

靈祭　靈棚、佛經　那　千那　掛索麵、麻柯の箸、枝豆、枝豉豆、根芋、青薯蕷、米、瓜、茄子、此類聖靈を祭る意あらば秋たるべし青藍云ふむかしは在家に佛檀を飾りおく事なかりし故に、七月十二月二度魂棚を飾り設け、聖靈をむかへ祭りしなり、しかるに邪宗門御改の砌我家は何宗なりといへるあかしに常に、佛檀を設くる事とはなれり（四季物語）魂祭る事は一年に二度あるものからわきて此月の祭は年のはりよりも、いやそひてかなしうおもはる（徒然草）十二月晦日の夜の事をいへる條に、亡人の來る夜とて、魂祭るわざは此頃都にはなきを

あつまのかたには猶する事のあり、しこそ哀なり（枕草紙）ゆづり葉を師走の晦日にも、ときめきてなき人の喰物にしく云々○棚經菩提寺の僧來りて牌前に誦經す、これを棚經といふ○うの部孟蘭盆會の條かよはしみるべし

大文字の火　せの部施火の條に出づ

鷹の塒出　（和漢三才圖會）四月羽毛を易んとする時、草綿を解き去り、鳥屋の內に放つ、日を逐て脫落して還新毛を生す、七月中旬に舊のごとし、これを片鳥屋といふ、二歲毛を易るを兩鳥屋といふ、三歲を兩片鳥といふ○鷹ははやもろかたかへり過ぬなん今いくとせかとやをかはまし　定家

鷹の山別　或鷹書曰、鷹の山別は七月廿五日也、鷹の巢を立父母に別るゝをいふ、（下學集）鷹は猛惡の鳥也、子生じて巢にあり、其子成長するときは親を食ふの養あり、父これを畏て居に巢より一尺枝を去て子を養ふ、ゆえに一尺量を呼で鷹秤といふ

鷹打　凡七八月嫁を以て鷹を取るを呼て鳥屋待といふ、鷹、雛、巢を離て飛翔りて自食を、求る時、常に絕崖斷巖の喬樹を度る、其巖窟の邊に小茅を結びて居り、鷹の至るを窺て羅を樹間に張、死鳥を、以て嫁として、これを捕ふ、此を阿賀計といふ、或は網掛に作る、是を鷹打と云ふ

鷹祭鳥　（月令）鷹ヶ乃祭レ鳥ヲ處暑候七月之中也

玉みつき　（大和本草）其實は梅嫌に似たり、立花をこのむ人、七月七日花瓶にその葉を去り、其實をのこして多く挾む、此時其實粗熟す

〔兼三秋ノ物〕龍田姫　（岷江入楚）龍田姫、これを按ずるに、春は佐保山の神より事おこり、さほ山の霞の色に寄て春をそむる神といひ、秋は龍田山の神より事おこりて、紅葉を詠ずる故に秋をそむる神といふ也、又共に神の名也

玉兎　つの部月の蟾といへる條に註す

立待月　（のつもち）　（新撰六帖）我門をさしわすらひてねるをのこさぞたちまちの月もみるらん衣笠內大臣○十七日の月也、山の端いづる月を立やすらひてまつ心也とぞ

鷹の羽芒　白き彪ありて鷹の彪に似たり

樽拔柿　是醂柿なり、關東の俗これを樽拔といふ、酒樽の中に入置て澁を拔の謂なり

田の色　許愼が說文に曰稻二月好生八月熟、云々しかる時は七月は青黃半熟ずる時なり、故にこれを田の色と云ふ

田の庵　（御傘）田を守る時ばかり作りて居る庵なれば秋になる也（後撰）秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

【八月】田の實の節、恃怙の節　はの部八朔の條に出づ

端正月　（昌黎ヵ月ノ詩）三秋端正ノ月、今宵出ニ東溟一（事文類聚）前置中秋の月を名づけて端正の月とす○季吟云ふ端正の月は圓滿なるをいへり

竹の春　（竹譜）竹は八月を以春とす○季吟云ふ端正の月を以春とす（筍譜）竹は八月これを小春といふ熱去んと欲し寒來んと欲す、故に小春といふ

檀特花　（吳響集）容又曰、檀特花といふものあり、花炬火の如し、これも亦芭蕉の類にや、荅て曰是亦芭蕉の別種ならん、（和漢三才圖會）高さ三四尺、葉芭蕉に似て小く、甚柔ならず、又蕉苡に似て大く甚硬からず、長さ尺に餘り、潤さ三四寸、冬枯れ春生ず、七月莖を抽んで花を開く、深赤色、形穗書も愛すべし、子を結ぶ、圓く黑色、甚硬く

用て念珠を作る、本西南外國の草、性最　寒を畏る

龍舌草　（多識篇）龍舌草（今按多豆乃之多）（大和本草）水中に生ず、葉は車前のごとし、水中に花を生ず、花白く蓑のごとくにして大なり、處々にこれあり、本草水草の類に載之、西土の方言にみつほこりと云ふ、水かわけは葉枯る、又水葵と云ふ、葵の葉にも似たり、花は三出なり、八月にさく、實は三角あり細也

煙草花　（花鏡）烟花一名淡把、始初て海外に出づ、後種を障泉に傳へ今地に隨てこれあり、木莓不老に似て葉、菜より大なり、紫白の細花をひらく（和漢三才圖會）八九月莖の頭に菜梗をいだし、小白花を開く、赤色を帶ぶ、略紫苑の花に似たり、子を結ぶ、內に細子あり黃褐色

玉章　かの部王瓜の條に注す

蓼の花　**蓼の穗**　（和漢三才圖會）二三月繁茂し、秋に至て穗をなす、細花をひらく、紅白色數品あり、花穗をなし實を結ぶ、俗にこれを穗蓼と云ぶ

種瓢　凡瓢の種子とすべきものは採收て是を檐の下に釣る或は火爐の上に釣て水氣を去り、乾き過して褐色となる時、種子をとり出し蓄へおく

種茄子　時珍曰、茄中に數あり、數の中に子あり、諸茄老に至つて皆黃なり

茸狩　木の子取（爾雅）菌は形蓋に似たり、木菌土菌石菌あり○茸狩や鼻の先なる歌かるた　其角

大根蒔　（和漢三才圖會）蘿蔔大抵八月種を下し彼岸に苗を出す

たのむの雁　（伊勢物語）みよしの、たのむの鴈もひたぶるに君かかたにぞよるとなくなる（八雲御抄）基俊は賴狩として東人隣家相ともに鹿狩事也、俊賴は田面の雁也といへり、諸抄雁を用ふ、田の雁の事なり

太刀魚　時珍曰鱘魚、江湖の中に生ず、魚の形物を劑裂笞刀の如し、故に鱘魚鮒魚の名あり、常に三月を以て始て出づ、肥狹くして長し、薄くして削れる木片のごとし、亦長く薄くして尖る刀の形の如し、細鱗白色、吻の上に二の硬き髯あり、腮の下に長き鬚あり、麥芒の如し、腹の下に硬き角刺あり、鰓の下に硬き髯あり、麥芒の如鬚あり、肉中に細き刺多し（大和本草）木草綱目に載たる鱘魚に相似て同じからず

【九月】高きに登る　きの部菊酒の條に出づ

醍醐祭　九日○山城國宇治郡小野の南、深雪山醍醐寺にあり（紀事）九月九日醍醐天神の祭能あり、又昨日夜に入て、清瀧權現の社前に於て能三番あり、これを夜宮能といふ○神輿三基、第一長尾大神、第二清瀧權現、第三勝間明神、以上三社也、當寺緣起に云ふ、祭る所清瀧權現は、沙迦羅龍王の第一女也、長尾天神は、延喜帝の御願によりて御願寺となる、故に勸請なり、勝間明神は神緣社說詳ならず（糸切歯）例祭九月廿三日に記す誤り也、廿三日は同所笠取祭なり、當寺の伽籃は、山上山下にありて上醍醐下醍醐といふ、土人長尾天神を以て本居と崇む

寶の市　すの部住吉相撲會の條に出づ

旅夷祭　廿日、洛東建仁寺の門前にあり、今九月廿日これを祭る、相傳ふ、建仁寺の千光國師榮西歸宋の日、船中暴風の難あり、たま〳〵蛭子の像波濤に隨て漂ふものあり、榮西これを收めてこれを祭る、

風やみ、波靜りて恙なきことを得たり、榮西寺に歸りて社をたつ今の夷の宮是なり、今に至りて西海に赴く人、此社に詣て風波の難なからん事を祈る故に旅夷と稱す、祭禮の日宮川町邊の居民、練物造物等を出す神輿一基持鉾これに從ふ

大般若　菊の異名也、黃大般若萬重にして、花葉凡六百葉故に大般若六百卷になぞらへて名づく、白色の者又おなじ

だもの實　（大和本草）方土によりダマともダモとも云ふ、漢名しれず、桂の類也、二種あり、一種は白クブと云ふ、葉は桂樹に似て香氣すくなし冬赤き實なり、ツヾノミといふ、鳥好んで食ふ、其實の大さ木梔子よりやゝ小也、肉を去れば其内に圓き實一ツあり、一種クスタブと云ふ、其葉白タブに似たり、最よく桂の葉に似たり、桂葉〇クスタブの葉はたてすぢ本よりわかる、凡他木は其葉のすぢ中に一條あり、桂葉は三條あり、本草にも如此いへり、クスタブの葉も桂葉と同く三すぢあり、白タブは中のたてすぢより又枝すぢ處々わかる、クスタブの實は冬熟して黑し、これも肉を去れば其内に實あり、クスタブの葉の形は桂と同じ味も桂に似て香氣やゝすくなし、白タブよりは香あり、味辛し木理クスの木に似たり良材也白タブ、クスタブともに大木あり、中略白タブクスタブの實いづれも火にいれよくもゆ、油多ければ也、ともに肉を去中の實の油をとりて蠟燭に作る〇荏桐をダモと訓ずるは誤なり

橙　秋の部に載たるは黃熟するを云ふ也、正月の部に載たるは喜祝に用ふる故也、委しくは正月の部に注す

《れ》【八月】荔支　時珍曰錦荔枝、本名苦瓜一名瀨葡萄皆實及び莖葉相似たるを以て名を得、五月實を下す、苗を生ず、蔓を引、莖葉卷鬚並に葡萄の如くにして小也、七八月小黃花をひらく、五瓣椀の形の如し、瓜を結ぶ、長き者四五寸、短き者二三寸、青色皮の上に痱瘰及ぶ荔枝穀の形の如し、熟するときは黃色、自ら裂け内に紅の瓤ありて子を畏む、瓤の呀甘くして食ふべし、形扁にして瓜子の如し、亦痱瘰あり南人青皮を以て肉及塩醬に煮て蔬に充、苦く澁くして青氣あ

連雀　（和漢三才圖會）今處々にあり、形雀の大さのごとし、頭脊胸赤色、翅黑し、黃白の圓文あり、羽尾の端略紅、其尾短くして黑し、頂の上に毛冠あり、眼頷の邊り黑く常に林に棲むに群をなす、形美しきを以て人これを樊中に畜ふ、或は尾を披き舞ふがごとし、略孔雀の形勢に似たり、但し聲好からず、比伊比伊といふがごとし、蓋練鵲と字同音にして物異也

【九月】例幣　凡九月朔日より十一日に至て、伊勢例幣の諸家門前に注連を引、門外に標木を建て僧尼及び輕重服の輩門内へ入べからずの字をしるすこれを前齊といふ、十一日の朝幣使發足也（公事根源）例幣とは伊勢大神宮へ御幣を奉らせ給ふ、毎年の事なれば例幣とは申す也（續日本紀）孝德天皇天平始て伊勢大神宮へ幣帛使を製せらる、詔して今より以後、中臣朝臣を差して他姓の人を用ふる事を得ざれと命じ給ふ、依て大中臣（藤波家）祭主としてこれを掌らしむ、最上所を神祇官代とする也

《そ》〔兼三秋物〕爽氣　（連哥新式）漢和の篇に云ふ、爽は秋の事也さやけしともよむ也（增韻）爽は清快也、さはやかは卽ち清く快きの義也、（蔡松年詩）爽氣染出す千林の赤

袖の露　袖の時雨などいふが如し、袖の瀧つ瀨は涙也袖の露は涙にも限るべからず

添水　かの部案山子の條に出づ

【八月】獻胙　せの部釋奠の條に注す

蕎麥の花　時珍曰、蕎麥、一名收麥、莖弱く翹然として長し易し、收め易し磨て麥かごとくす、故に蕎といひ荍といふ、麥の名を同しうする也立秋前後種を下し、八九月收め苅る、性最も霜を畏る苗の高さ一二尺、赤莖綠葉、葉鳥拍樹の如し、小白花をひらく、繁密粲々然として實を結ぶ、纍々として羊蹄の實の如し、三稜あり、老る時黑色

【九月】蘇我菊　菊黃をいふといへり、蘇我といふ名の說あれどたしかならず、（拾遺集）雜「かのみゆる池邊にたてるそが菊のしけみさえだの色のてこらさ」よみ人しらず○しけみさえだは、繁き小枝也、いろのてこらさは色のてりこきさまをいへり

袖の霜　（增山の井）（獨稽古）（糸衣）等に出したり、この部衣打袖の霜といへる條に注す

《つ》【七月】机洗ひ　硯あらひ兒童七月六日に机硯をあらふこと、北野の神事にならふなるべし、北野の社において、六日に松風の硯に梶の葉を添て供す、兒童の手跡を學ぶもの專ら北野を崇信す、故に机硯を洗ひ淸め、北野の神に梶の葉など手向るなるべし、又二星に手向るものを書寫ともいへり、前說によるべし

妻迎舟、妻こし舟、妻送舟　（萬葉）ひこほしのつまむかへぶねこぎ出らし、天のかはらにきりし立しは（新勅）天の川うきたつなみにひこほしのつまむかへぶね今やこぐらん（新六帖）ひさかたの天の川門は明にけりつまおくりぶねいまやいづらん（續猿蓑）舟なりの雲しばらくやほしの影東湖

辻相撲　公事にあらず、いづかたにもあるをいふ、譬ば禁裏御神樂に付て民間にあるを、里神樂といふがごとし、神社等にある常の相撲なれども、禁裡の相撲にならひて秋とするなり

衝突入　十六日（滑稽雜談）昔は諸國にてつと人とて、家々秘藏せる

物或は其家の嫁娘妾妻まで、常にみたきと思ふものを、客殿居間に限らず深く入て戀に見し也、近頃まで勢州山田にありしゆゑ、世人山田のつと人といひ傳ふ、むかしは諸國にありしとなり、總て家財の類を畜ふるは貧欲の道なるゆゑ、これをこれを懺悔のためにみせしといふ、今世は絕てなき事なり

爪紅　鳳仙花をいふ、ほの部みるべし（大和本草）女兒鳳仙花と酢漿草の葉を、もみ合せて爪を染む、紅色となる云を故に名く

〔兼三三秋一物〕露　露けき露の玉（月令章句）露は陰液也、釋て露となり結びて霜となる○增山の井に出せる波の露は、なみだの露の誤にや○白露、袖の露上露、以上頭字の部に注す

露の身　露の身とは、露のごときはかなき身といふこゝろ也、（曠野集（附句）露の身は泥のやうなるものゝおもひ荷分

月　（物理論）月は水の精、潮に大小あり、月に虧盈あり、（說文）月は日の照す處より生ず、故に從に又哉生魄といふ、日に當る時は光り盈つ、日に就ときは明靈○桂

男、さゝらえ男、照月次、新月、弦月、三日月、玉兎、銀兎、玄兎、在明、哉生明既望、既生魄、いさよひ哉生魄、暉素、金波、夕月夜、曉月夜、夕月日、朝月日、立待月、居待月、臥待月、くだり月、廿日亥中、更待月、常蛾、眞如の月、心の月、胸の月、盃の影、しまほし朔日ごろの月、ねまちの月、以上各頭字の部にわかちて註す

月の霜、月の雪　杜甫ノ仲秋ノ詩ニ云滿月飛二明鏡一歸心折二太刀一、轉ノ遙ヲ行レ地ヲ遠シ、攀テ桂ヲ仰レバ天ヲ高シ、水路疑二霜雪一林棲見羽毛ト、此時瞻ニ王兎一、直ニ欲レ數ニ秋毫一ヲ、

月の桂の花紅葉　桂平（西陽雜俎）月中に桂あり、高さ五百丈、

下に一人あり、常にこれを斫る、樹創ふに隨ひ合す、其人姓は吳名は剛仙を學ぶ過ありて謫せられ、樹を伐らしむ○桂男は吳剛を云ふ也（八雲御抄）月の桂は光をいふ也、（古今）久かたの月の桂も秋はなほもみぢすればやてりまさるらん忠峯（冬の日）（附句月）西南に桂の花のつほむ時　羽笠

月の桂の子　（蘇詩注）杭州の天竺寺、八月十五夜常に桂子ありて落つ（本草圖經）江東の諸處多く街路の間にて桂の子を拾ひ得これを破れば辛香也、古老相傳ふ是月中より下る（御傘）桂はみのる三五の秋と詩にも待れば實をば定めたきもの也

月の鼠　（仙說譬喩經）黑白の二鼠あり、互に樹の根を嚙む、乃至樹根は命に喩へ、黑白の二鼠は晝夜に喩ふ（奥儀抄）舞常の喩に、人虎に逐れて、野中の井の陷らんとして岸の草をひかへ、底をみれば、毒蛇口を開きてのまんとす、又黑白の二鼠かはる〳〵この草の根を食ふ、せんすべなくて、毒蛇の爲に害せらるゝと也是虎は平生造惡の罪業、黑白の鼠は月日の過る也、毒蛇を地獄にたとへたり、是を月の鼠といふ樓炭經の文なり

月の劍　三日月の狀を刀劍の形にたとへたるなり

月の都　月宮殿（太平廣記）羅公遠ニ傳に云、ふ中秋の夜時に玄宗宮中にて月を翫ぶ、公遠奏して曰、陛下臣に從ひ月中に遊んや、否や乃ち柱杖を取、空に向ひ擲つ、化して大橋となる、其色銀の如し、帝に請て同く登る、約するに行事數千里、精光目を奪ひ寒氣人を侵す、遂に大城闕に至る、公遠か曰此月宮也、仙女數百、皆素練寬裳にして廣庭に舞ふを帝問て曰、此何の曲ぞ、曰霓裳羽衣の曲也、玄宗密に其聲調を記して回る、顧れば其橋步に隨ひて滅す

月の蟾、月の兎　王兎（五經通義）月中に兎と蟾とあるは何ぞや月は陰也、蟾蜍は陽也、兎と並び明也、陰、陽に係る也○杜甫詩云搗藥ヲ兎長生ヲ○白居易詩ニ云照ノ地ヲ幾許ノ人斷腸ス金蟾王兎遠ノ不レ知○蟾は月中三足の蛙、これを玉蟾といふ

月の蝕　（しよく）（天經或問）星月皆日の光を借、日は月天の上にあり、月は日天の下にあり、朔日月行事日天の下に在て、日の光を掩ふ、人地面の上に在てこれを仰ぎ視ときは、其月の日に掩ふをみる、こゝにおいて日光なきが如し、然も寔に常を失はざる也、人其光こみざる故にこれを日蝕といふ、月蝕は朔より望月に至る、一向八十度にして日月望む、中間に正對するとき、地球障隔す、月地影の上にあり、日地球の下にありて日光これを燔さず、故に月其光なし是を月食と云ふ

月讀男　（拾穗抄）月よみ男、月讀、月夜見皆月の名也、日本紀にみゆ、月は男神故に男といふ

月の出潮　（性理大全）余襄公安道云ふ、潮の漲退は海に增減するにあらず、蓋月の臨む所に則水往てこれに隨ふ、日月は右に轉り、天は左に轉る一日一周して西極に臨む、故に月卯酉を臨むときは水東西に漲る月子午に臨むときは、潮南北に平かなり、彼竭き此盈て往來絕ず、皆月に繫る也

月の秋　（御傘）夜る也、花の春として植物になるに同じ

月の宿　（御傘）露水などに結ばねば、月をみる宿の事也、居所なり

月をあるじ　（御傘）人倫にあらず、月のあるじは人倫なり

月の友　（御傘）人倫也、但し勾體によるべし、月を友、人倫にあらず

朔日頃の月　（源氏浮舟の卷）ついたちごろの夕月夜、云々（炭俵集）細々とついたちごろの宵の月利牛○月のはじめをついたちごろといひ、月のをはりをつもごりつごろといふ、一日三十日にかぎらず

月の舟　半月をいふなり

月かゞみ　滿月をいふなり

蔦　蔦紅葉、蔦かづら時珍曰蔦は松柏の上に寄生、女蘿は是松の上に浮蔓す○地錦(大和本草)葉は衣の紋に付るツタに似て、冬月も葉おちす、皆本草にいへるがごとし、和俗壁生草といふ、秋は紅ゐ也、又常のツタは是に似たり、冬は葉おつ(和漢三才圖會)烏蘞莓(俗云豆太)本綱に捲塹の間に多し、藤柔にして稜あり、一枝一鬢凡五葉、葉長くして光り、踈齒あり、面青く脊淡し、白蘞の葉のごとし、故に烏蘞と名づく、七八月苞を結び簇をなす、青白色、花の大さ粟のごとし、黄色四出實を結ぶ、龍葵の子の如し、生は青く熟すれば紫也、内に細子あり、云々是大和本草にいく夏蔦也、秋に至て葉深紅愛すべし

甘藷　(和漢三才圖會)佛掌薯葉、薯蕷の葉に比すれば圓く頗黄獨の葉に似て細小し、其根の狀佛手柑に似て肥り、大く攫溲者の如し、故に名づく、鎭江府志に所謂佛掌薯これなり

粒芋　其莖に紫の理あり、子小く圓くして味美也

白柿　澁柿を以て枝を連ね曝し乾す、或は糸に繫て晒し乾す、初蕎麥稻藁を用て包宿してよく霜を生ず、豫州西條の產甘美也、備州これに次ぐ濃州の及び尾州の產は、長さ三四寸ばかり

妻梨　具さには軒のつまなしといふ

【八月】綵雀　ゑの部繪行器の條に出づ

敦賀祭　十日氣比大明神は越前敦賀郡にあり、祭神仲哀天皇(風土記)氣比の神宮は宇佐同體也、八幡は應神天皇の垂跡氣比は仲哀天皇の鎭座なり、例祭八月十日○今月二日より十日まで、近國廿里四方の諸商人、放下師狂言師等來り集り、二日神輿洗あり、敦賀紙屋町といふ所より、例年紙細工の家臺燈籠を出し、京の祇園噺しを摸す、三日神事四日を後宴と稱し、町々の氏子東番西番とわかれ、引山を出し、地車にて町中を引廻る、山の上に一丈ばかりの松を立、四方錦繡の慢幕水引等、洛の祇園祭の山の如し、上に武者人形を飾る、山の數或は五ツ或は六ツ、祭禮當日にこれを出す、天神の森といふ所、御旅所にして神輿遊行

鶴が岡八幡祭　十五日相州鎌倉にあり、一名は雲井が峯、上の宮三座、中は應神、東は神功、西は妃大神也(姉神)下の宮四座、仁德天皇東は久禮宇禮の二神、西は妹比咩也、後冷泉帝の御宇、伊豫守源賴義朝臣、安部貞任を伐時、丹祈の旨ありて、康平六年八月石清水の神を相州鎌倉郡今の下若宮の地に勸請す、永保元年二月成就、義家朝臣修覆を加ふ、治承四年十月右大將賴朝卿、小林の鄕に遷し給ふ、これ今の鶴が岡なり、毎年八月十五日放生會並に祭禮奉幣洗鎬馬角力等有り

司召　(敎隆卿記)司召は秋の除目なり京官除目と號す、春の除目は縣召と號す、各拜任の輩これを召、春は大政官の廳、秋は外記の廳に於てこれを召御司召と稱す○司召定考同儀かといへり、猶この部定考の條をも見合すべし

月見　名月、今宵の月、けふの月、芋名月、望の月、十五夜、三五の夜、月華(事文類聚)歐陽詹翫月詩序云月之爲翫冬則繁霜大寒、夏則蒸雲大熱雲蔽月霜侵人蔽與侵俱害翫秋之於時後夏先冬八月於秋季始孟終十五之於夜又月之中稽於天道寒暑均取月數則蟾兎圓況埃壒不流大空悠々蟬娟徘徊博華上浮昇東林人西林肌骨與之疎冷神氣與之清冷○名月(湖東問答)

去來云ふ三五十五夜おしなべて名月といへり、そのうちいづれの月かしらず、名月といふ故ありとき、ぬ然ども今日名月の詩哥を作らんに、あながち故實に限るべからず、尤故實によらば佳なるべし、又明の字を用る事は、和漢ともに三五の清光を賞し來る故に、明と名と通ひたるをもつて通用すべし○今宵の月、今日の月、以上十五夜の月に限りていふことば也、且けふ、今宵と賞するころ、句中にあらざればとのはず(續猿蓑)ふたつあらばいさかひやせんけふの月　智月○芋名月(御湯殿記)名月御祝三方に芋ばかり高盛り(歲時拾遺)浪華の俗、十五夜を芋名月といひ、十三夜を栗名月といふ○三五の夜、白樂天か詩に三五夜中新月の色○月華(五雜俎)人いふ八月望月華あり、或はいふ夜半、或はいふ必八月のみならず、秋後の望ともにこれあり、或はいふその五采鮮明旁照數十丈、金線の如きもの百餘道、或は但紅雲これを圍み繞るのみ、臨川吳比部揚謙少かりし時一度これを見る、その景象鮮妍千態萬媚、眞に人間いまだこれを見ざる所の奇也

月草、露草　時珍曰、鴨跖草花を碧蟬花といふ、三四月苗を生ず、葉紫にして葉竹に似たり、嫩き時食ふべし、四五月花をひらく、蛾の形の如し、兩葉翅のごとし、碧色愛すべし巧匠其花を採り、汁を取て畫色を作す、青碧にして黛の如し、(倭名抄)鴨跖草(和名都岐久佐)(仙覺抄)鴨跖草、月草と稱す、月草は露草也萬の花は朝日影にこそ咲くを此花は月影に唉けば、月草といふ也

土菌　(和漢三才圖會)土中より生ず

月夜茸　大毒あるゆゑ人近よらず

燕歸る　(格物總論)燕春社に來り、秋、社に去る、故に是を社燕といふ

鶺鴒　(和漢三才圖會)百舌、反舌、鶺鴒、馬鳥、俗に云ふ眞豆久見狀塑鴻のごとくして、灰黑色京師除夜毎にこれを炙り食ふを祝例とす

【九月】津村祭　廿七日○津村の御靈社は、攝州西成郡大坂津村にあり、祭神鎌倉權五郎景政が靈と云ふ(攝陽郡談)昔津村何某專ら武勇を勵み、諸國を巡行して軍術奥旨を極む、相摸の國に至りて一夕景政の社に詣て神殿に通夜す、時に神選が武勇を感じ託して云ふ、攝津の國難波の勝地に祝ひ祭れ我將に汝を擁護せん、答云ふ何を以てか證とせん、日枕上に神幣あらん、明旦さめてみれば、はたして神幣あり、みずからこれを負ひ、津村に歸りて、叢祠を造り神幣を納てこれを祭る御靈の宮これ也、元祿の頃御靈の大明神と贈號あり、毎年九月二十七日、神奈神湯の式あり、津村の土人本居神とす

椿の實　(和漢三才圖會)海石榴その實圓く無果花に似て、老て枯るときは殼四ツに裂け、中の子海松子のごとし、皮を剝仁を取搾て油を取但千瓣の者は實を結ばず

露時雨、露霜、露寒　(古今)『みさふらひみかさと申せみやきの』暮秋の露のさかんなるをつゐ時雨といふ、露霜、露寒は露の氣の凝んとするを云ふなるべし

《ね》【七月】願の糸　(公事根源)乞巧といふこともろこしより事おこれり、七夕祭ともいふなり、香花をそなへ供具をとゝのへて、庭上にふみをおきて、さをのはしに五色の糸をかけて、一事を祈るに三年のうちに必叶ふといへり、此ゆゑに乞巧と申す也(朗詠)憶得少年長夕乞巧、竹竿頭上願糸多シ、白居易

念佛踊　洛北川合村一乘寺村に念佛踊あり、念佛を唱へをどりをする故に此稱あり

〔秉三秋ノ物〕ねまち月　(新六帖)秋の夜のひとりねまちの月

かけに身を吹とほす庭の松風　衣笠内大臣（八重垣）ふしまちの月也、十九日の月也、一說に子待也、廿日の月也

【八月】蘆菰蕈　（和漢三才圖會）俗に云ふ鳳茸、杓木及び老樹の根上に生ず、九十月盛に出、一根庳をなし數十叢生ず、纖圓く泡頭釘に似て、長さ二寸、蒸細く柔軟なり、纖の內外灰白色凡て灰白色なる者を呼て鳳色とす此物淺鳳色なり故に鳳茸と稱す

《な》【七月】七日の御節供　（日本紀）持統天皇五年七月七日公卿を宴し、朝服を賜ふ（紀事）今日武家並に地下の良賤、各白帷子を着慶を修す、家々索餅を喫、又互に相賄る

七箇池　百箇池（事林廣記）祓夫人傳云ふ、高祖漢宮七夕に百子の池に臨み、五綵を以て相繩す、これを相憐愛といふ○七箇の池とは、星を祭るに、七ツのたらひに水を入て、鏡をつけてほしの影をうつすをいへり、百箇の池は天の川をもいふ、もこ姫とは棚機をいふ、又百のたらひに水をたゝへて手向るをいふともいへり

刀豆　時珍曰、莢の形を以て名を命ずる也、案ずるに投成式、西陽雜俎に云ふ、樂浪に挾劍豆あり、莢横に斜にして人の劍を挾めるが如し、即此豆なり、三月種を下す、蔓生し、引て一二丈、葉豇豆の葉の如くにして稍長大、五六月紫花をひらく、蛾の形のごとし、莢を結ぶ、長き者尺に近し微早莢に似、扁して劍脊三稜宛然たり

棗の實　時珍曰按ずるに陸佃埤雅に云ふ大なるを棗といひ、小なるを棘といふ（大和本草）夏芽を生ず故になつめといふ○花の形、春のなの部棗の花といへる條に註す

（兼三三秋ノ物）梨子　時珍曰、梨樹の高さ三四尺、尖りたる葉光膩あり、細き葉あり、二月白花を開く、雪の如し○犬殺紅瓶子梨、觀音寺梨、棗梨、松尾梨、水梨、圓梨、空閑梨、鹿の梨、をふの浦梨、山梨等の種類多し、各頭字の部にわかちて注す

鳴子、鳴竿　（射恒秘抄）棹の先に鳴子をつけて、片山里に粟といふものを作り猿を追ふ也○秋の田畑による鳥獸を驚かす具也

【八月】長き夜　夜の短き至りは夏至に過ず、夜のながきいたりは冬至に過ず、然れども秋の夜を以て長夜とする所以は、秋分黃夜等しく、初て夜の長きをおぼゆ、夏の短夜に對して秋を長夜とするか

名の木散　龜文曰按ずるに、櫨櫪柞等のたぐひにて、櫨ちる柞ちるといふべきを、略して名の木散といへるならん、然るを未練の俳士おしまかせて發句にするはよろしからず、名の字によせて假用ふるはあるべし、千梅も此事如何のよしいへり

滑煤莖　（和漢三才圖會）榎の樹より生ず、大なる者傘すばかり、小なる者三四步、大小叢生淺褐色を帶、內刻あり、甚滑、其莖煤黑色、奈女は滑也、須々は煤色なり、木は莖の上略也

中稻　（和漢三才圖會）凡八九月苅收るを中稻とす

中拔大根　（和漢三才圖會）八月に種を下し、彼岸の中に苗を生ず、稍長しくして鼠の尾の如きを中拔大根といふ、霜の後肥太る

菜種蒔　註に不及、

中汲酒　半酒半濁の稱なり

【九月】鳴瀧祭　福王子祭廿八日鎭守の社、洛西仁和寺の西北、鳴瀧にあり（諸神記）（王城守護三十番神右白虎八神）高雄の麓鳴瀧川の邊りにこれを封ず、內朱雀より西洞院に至りて九町の擁護神也（擁州府志）福王子の宮は西山鳴瀧にあり、これ此邊の御主の神にして仁和寺の鎭守とす、兩社ともに土人本居神として同日に合せ祭るか（紀事）鳴

瀧福王子祭九月二十八日神輿一基、鉾五木御室の御所の庭に入云々○福王子の宮、祭る所斑子皇后也、皇后は桓武帝の孫女にして、史部倘書仲野親王の女也、光孝帝立て皇后となる、宇多帝を生給ふ、此邊の地主神と崇め奉り、仁和寺の鎭守とす(滑稽雜談)俗に五器洗ひといふ、是一年中の諸社の祭祀の終にて、又當月の外に神祭なき故也、毛吹草に鳴瀧祭廿八日と記す、近來の俳書外に福王子祭と並へ載たり、同社の祭を誇りて再び出すか

楢

(和漢三才圖會)倭名奈良、俗に古奈良、樹の高さ丈ばかり、花實櫪柞の輩のごとし、秋月紅葉する時、人これを賞す、(大和本草)櫪を大奈良といふ、葉栗の如し、秋冬枯て落ず、四五月花ひらく、栗の花に似たり、實は椎の如く大也、其苞牛づゝむ、又小楢小木なり、材木とすべからず、實の苞あり、半をつゝむ、これ卽圓栗也

南天の實

蘇頌曰南燭株、高三五尺、葉苦楝のたぐひにて小なり、冬を凌て紅子を生ず、穗をなす、人家如く庭除の間に植、俗に南天燭といふ○夏のなの部南天花の條みるべし

《ら》【七月】蘭

宗奭曰、葉麥門冬のごとくして潤し、且軟なり長二三尺四時常に靑し、花黃綠色、中間瓣上に紫の點あり、春芳しき者を春蘭とす色深し、秋芳しき者を秋蘭とす色淡し、開く時滿室盡く香し、他花と又別也○山谷曰一幹一花にして香餘りあるものを蘭とす一幹數花にして香足ざるものを蕙とす(大和本草)是世俗に花を玩賞する蘭也、眞蘭にあらず、今の蘭は本草にこれを出さず、蘭草集解正誤に載す

《む》【七月】迎へ火

送り火七月十三日黃昏に及びて、郡鄙ともに靈聖を迎へるの義あり、此時門前において、必麻柯を焚てこれを迎へ火といふ、十六日又これを行ふ、これを送り火といふ(報恩經)七月十四日卯の時なり、次の日十六日午の時に飯る(五雜俎)閻人最も中元を重ず、家々猪陌冥衣の具を設け先人の號位を列ね祭てこれを燎く、女家、則父母の冠服袍笏の類を具し、皆紙に爲る者これを籠るに紗を以す、これを紗箱といふ、父母の家に送る、女死すれば婿亦代りて送る、宮中に至るときは、則淸晨陣設くる事甚嚴也、子孫冠服を具し、揖讓磬折し神てを導き以入る祭畢て復送りてこれを出すと云々

迎鐘

ろの部六道參の條に出づ

虫送

(紀事)年に依て田螟害をなす時、民人鉦鼓を擊野外に送る、これを虫送といふ、凡旱歲に五穀の枯萎むを燒るといふ、茄の根の枯るを舞といふ、瓜の蔓の枯るを上るといふ、是民間の詞也○いの部螟の條かよはしみるべし

木槿

時珍曰此花朝に開き暮に落、故に日及と名づく、橫といひ葬といふ、猶僅榮一瞬の義なり○其木李の如く其葉末尖りて極齒なし、其花小にして艷也、或は白く或は粉紅、單葉千葉の者あり、五月始てひらく

室の早わせ

『(古今六帖)津の國のむろの早わせいでずともしめをばはへよもるとしるがわね』此哥夫木集には、きの國の室の早わせとして入たり、紀伊國に牟婁郡あれば、夫木のかたにしたがふべし、さて牟婁郡の早わせといふ事にて、古說にさま〴〵いへるはみな杜撰なるべし

〔兼三秋物〕虫、虫籠

(爾雅)是あるを虫といひ足なきを豕と云ふ(雍州府志)下賀茂の社司の婦人、松虫鈴虫を養ふ籠を作る、其式繊細竹を刳て籠を造る、內に一つの小筒を安き土を盛り、苔を敷き露草少しばかりを種、倭俗に所謂露草は鴨跖草なり、紫白の糸を以て藤花の形々

作り、籠の上より下に垂る、其體觀るに堪たり、秋に至て虫を入、槇の下に掲、或は簷外に掛く、晝はこれを見て目を悦ばしめ、夜はこれを聽て耳を娯しましむ

虫合　虫の聲のよしあしを合せて遊ぶをいふ

胸の霧　思ひの晴やらぬことをいふ

胸の月　（萩のしをり）胸の月、胸のうちの曇らで清きなるべし、猶深意も待るにや

【八月】紫の花　花紫としてはの部に出づ

椋茸　（和漢三才圖會）椋の木の上に生ず、形狀榎茸に異なる事なし

椋鳥　漢名未詳（和漢三才圖會）椋樹に棲故に、俗呼で椋鳥といふ、形小鳩の如くして、頂白く背灰黒色、下腹に至て倶に白し、翮の上灰黒色、背の下黒白層て、眉淡黄領の以下灰黒色の斑あり、翅の本微白し、羽黒白交れり、觜黄色鼻の邊微黒を帶、脚脛黄、その聲　鵯に似て喧く好んで群をなす、又小椋鳥あり、狀相似て小也

【九月】撰ノ虫　（公事根源）是はあながちに式ある事にはあらず、殿上の遊遙とて、殿上人ども遊びて、嵯峨野などへむかひて虫を籠にえらゐ人て奉る云々

木槿子　蘇恭曰槿華、此樹葉木槿に似て薄し、細き花黄にして槐に似て稍長大也、子殻酸漿に似て其中に實あり、熟せる豌豆の如く、圓く黒くして堅硬し、數珠とするに堪たる者是なり、五六月花收むへし、南人以て黄を染蕉だ鮮明なり

椋の實　時珍曰無患子樹葉廣大、枝葉みな椿の如し、特に其葉對生す五六月白花を開き、實を結ぶ、大さ彈丸の如し、狀銀杏及び苦楝子の如し、生は青く熟すれば黄、老るときは文皺あり、黄むときは油煉の形の如し（中略）實中一の核堅く黒くして正圓、珠の如し

剝栗　穀を去て仁とする者、搗栗の類なり

《う》【七月】烏鵲の橋　かさゝぎの橋としてかの部に注ず

盂蘭盆會　（日本紀）齊明天皇三年七月始て、盂蘭盆を設け、同五年勅して盂蘭盆會を諸國に下し講ぜしむ（釋氏要覽）盂蘭盆は是釋氏の孝を述恩を報ひ苦を救ふの要たり、目蓮の母をすくふを以て始とす、梵語には盂蘭盆此には倒懸といふ、盆は此方の器也（事文類聚）盂蘭盆經に云ふ目蓮比丘その母の餓鬼中に生ずるを見て、即鉢を以て飯を盛り往てその母に餉す、食いまだ口に入らず、化して火炭となる、終に食ふ事を得ず、目蓮大に叫びて馳還り、佛と白す、佛の曰汝が母罪重し汝一人の力いかにともする所にあらず、當に十方衆僧の威神方をもむべし、七月十五日に至り、當に七代の父母、現在の父母厄難の中にあるもの、爲に、百味五菓を具へて以て盆中に着て十方の大德を供養すべし、佛衆僧に勅して皆施主のために七代の父母を呪願し禪定の意を行はしめ、しかして後食を受よと、このごとき目蓮の母、一劫餓鬼の苦を脱する事を得たり、目蓮佛に白す、永く來世の佛弟子、孝順を行ふ、者又盂蘭會を奉し、しかする事を得せしむべし、可ならんや、佛言く大に善し、故に後代の人これに因て廣く華飾をなす、乃チ木を刻み竹を割、結綵剪糸花果の形をなし、工巧の妙を極るに至る

鬱金の花　時珍曰鬱金二種あり、鬱金香是花を用ふ、根を用ふる者は其苗鼈の如し、其根大小指頭のごとし、外黄内赤く、人以水に浸し色を染む、又微香氣あり、又曰四月の始め苗を生ず、蕾黄に似て花白く實紅なり、末秋に莖心を出して實をなす、嶺南の者には實あり、赤豆に似て噉ふに堪ず

馬追　（わくかせわ）江東の俗スイトといふ其聲スウイといふがごとし いなごに似て小なり、色純青し、尻に劍あり、又なきもあり、雌雄の異なり、中元の時夜盛に鳴、其聲紡車を捲がごとし、關東の俗言に馬追といふ

〔兼三秋物〕上露　（嘉元御百首）風かよふ野はらの草の上露は　頓覺落て下葉にまたむすびけり

鶉　（和漢三才圖會）被ずるに處々の原野に多くこれあり、甲州信州下野最多し、畿内の産又勝れたり、黄赤に白斑の彪あり、珍き彪のごときは人甚これを賞す、其聲知地快といふがごとし、數品あり、嘩々快を上とす、夙に早旦日午夕暮に鳴、凡春二三月始て鳴芒種に至て聲を止む、六月又更に聲を發し、中秋に至て聲を止む、人是を養ふ、其雌は小く足卑く嘴らず、呼て阿以布といふ○月鶉、鄙鶉、各頭字の部にわかちて註す

鶉憊　鶉を取る獏なり

鶉衣　荀子曰、子夏之衣懸結として鶉の如し云云、（御傘）只侘人の短き着物をいふ、然とも秋の季もつゆゑ、生類に二句去也○一説に衣の据の破れて鶉の毛に似たるをいふなり

鶉の床　（御傘）新式をみるに、夜分にあらざる物の處に、鶉の床とばかり出せり、此道理を了簡するに、余の鳥とかはりてさらに空を翔らず、壹も草のうちにのみあるにより、此鳥ばかりを床としても、夜分にあらずと定たるとみえたり云云

鰻簀　（和漢三才圖會）鰻鱺此物冬春は泥穴に蟄し五月に至て游ぎ出づ此時味勝り子を生ず繊くして長さ三四寸、性滑にて利く、泥中を潜る故、捕へがたし、江州勢田城州宇治名を得たり（紀事）秋月鰻鱺魚流に從ひて下る、是を落鰻鱺といふ、簗を以て、これを捕るに、流に從て簗の中に落入、故に捕へ易くして魚店に多くこれを賣る

【八月】宇佐宮祭　十五日○豊前宇佐郡築紫にあり、欽明天皇三十一年豊前國厩の峯菱形の池の上の民家の兒に託して曰、我は是第十六主譽田天皇廣幡八幡也、我を護國靈驗威身大自在王菩薩と名く、迹を諸州に神明に垂る、今顯に此地に在すと、よりてこれを奏す、勅して祠をたつ、八方に八色の幡を立り、故に託宜して八幡と號す○社說に當社禰宜奏して云ふ、大神の託に宜く、我无量劫よりこのかた、三有に化生して善行方便を修し、諸の衆生を濟度す、我名を大自在王菩薩と申せと也、帝叡聞ありて、これを許したまふ（公事根源）八幡を垂跡の號、後に豊前國宇佐に鐵り給ひしが、聖武天皇東大寺建立の後巡禮し給ふべきよし託宣あり、依て彼寺に勸請申されき、されど勅使などは楢宇佐に參れり○宇佐宮祭いにしへは勅會也、放生會等此地を始とす

宇治の花園　（山城風土記）兎道とは輕島那の宮の御宇天皇の御子、宇道の稚郎子桐原の日桁の宮をつくり宮室としたまふ、これによりて御名を宇道といふ（年浪草）三除齋云ふ、兎道の雅郎子崩御の心を、新勅撰「昔みし人のなみだや露ならん世を宇治山の秋の花園」これをもて思ふに、宇治の花園は、桐原の日桁の宮を花園也、故に慈鎭和尚も、稚郎子崩御のこゝろをよみ給へり、千梅、春耕、ともに賴通卿の花園と記せり、稚郎子の崩御のこゝろを詠る哥に、臣下の花園をとり合せて詠る例なし、殊更慈鎭は宇治の關白賴通公より五代後法性寺兼實公の子也、その先祖の花園をしりたまはざらんや

薄紅葉　薄色のもみぢをいふなり

梅嫌　（和漢三才圖會）梅嫌木（心字未詳）葉圓く尖り、微小き鈍齒あり

野梅の葉に似て小く、冬濕み、春芽を生ず五月小白花を開く、略南天の花に似て子を結ぶ、初は青色、十月葉落て子紅に熟す、枝幹に添て多く美也、一種白き者あり、異として珍とす、然ども赤き者にしかず

漆の花　韓保昇か曰漆樹高さ二三丈餘皮白し、葉椿に似て花に槐に似たり、その子は午李子に似て本心黄也、六七月刻て滋汁を取る

茴香の實　（和漢三才圖會）倭名（久禮乃於毛）本綱茴香は宿根より深冬に苗を生じ叢をなす、高さ三四尺、肥たる莖、葉糸の如し、五六月花開く、蛇狀の花のごとくして色黄、實を結ぶ、大さ麥粒のごとし輕くして細き稜あり、俗呼て大茴香とす、今惟寧夏より出る者を以て第一とす、他處より出る小き者これを小茴香といふ、按ずるに懷香を大茴香とすと雖、今唯大茴香と稱する者は八角茴香也、（本朝未有レ之）小茴香と稱する者卽悪香也和多く、これを種て用ふ、高さ三四尺肥たる莖粉青色細き葉淺絲糸の如く柔勒夏小花をひらく、淡黄色、子を結ぶ形秕の麥に似て小く、筋稜あり、中の子は皮と同色にてみえがたし、飛散る處に苗を生ず

鶺鴒　（わくかせわ）一切の國史章史和名抄等に此名あるものをえず、草花卑に尋るにしらず、或補師に尋ね侍るに粟の異名なりといふ、さもあるべきにや

海雁　（大和本草）海に在て其大なる者常の雁に比すれば徹小なり、色灰色の如し、嘴及び足黒し、其頸に環の如き白色あり、翅短し江戸に有り

【九月】太秦の牛祭　十五日（紀事）山城國太秦の廣隆寺は常盤村の南、山の内村西北にあり、桂の官院内に伽藍神あり、大辭の神社と號す祭る所の神秦の始皇帝なり（元亨釋書）聖德太子九つの伽藍を造る四天寺王、法隆寺、元興寺、中宮寺、橘寺、蜂岡寺、（廣隆寺の別號）池後寺葛城寺、日向寺云云（紀事）上宮王院の庭において牛祭を修す、寺僧各集會す、相傳ふ慈覺大師歸朝の日、順風を摩多羅神に祈る、歸山の後此神を叡山の麓に勸請す、赤山太秦もまた此社あり、故に今宵寺中の神事も摩多羅神を祭る者也、寺中の行者紙衣を着、牛に乘りて上宮王院の前に出づ、祭文を讀誦す、是悉く懺悔の詞にしていにしへは寺僧かはるゝ〳〵これをつとむ、しかれどもその懺讀に近きを以て近世行者をしてこれを修せしむ、法令畢つて門前に角力あり○寺說にこの會は大念佛會と稱す十一日の曉開闢十三日の曉に至ての結願也云々下略

雲州橘　（大和本草）温州橘其葉蜜橘に似て薄く小也、其實肥蜜橘に似たり、大さも亦同し

漆掻　漆樹の注は八月の部漆の花の條にみえたり、（わくかせわ）漆の木の枝梢迄に悉く鋸を以て挽目を附、其挽目より脂を發す、是則生漆汁也、奥羽及び下野和州尤多し、中國にも所々あり、其脂を掻取諸國皆六七月也とぞ、九月に出せるは違ならん

裏枯　（御傘）草葉の外色づきてかるゝ事也、うらがれとばかりはせず園野澁原、庭などの文字を入るゝ也、植物に二句也、草の名草の字あらば植物に三句也、連に裏枯過て秋草の句にかるゝといふ字もはやせざれば俳には今一つ有べし、云云○青藍云云、木の梢の枯たるをもうら枯とこゝろうる者あれど、わるし、御傘の文體にて草に限れることをしるべし

梅紅葉　梅の木の葉の紅葉せしなり

うそ寒　秋の寒さなり

《ね》 いの部に併せ出す

《の》【七月】残る蚊 残る螢 残る蠅 （貞享式）残るといふ字は、其季より此季に残らねば、残るといへる道理なし、中略譬へば殘菊は重陽に殘るとも、殘る當は何に殘るべきや、殘るの字は總て其季の次に取りて、此論を殘るの字の例とすべし○青藍云ふ（年浪草）（俳諧歳時記）等殘る蠅を（通俗志）に從がひて六月の部に出したれども通俗志は椎派の書にして、蕪門の式にあらず、故に今改て秋季とす

殘暑 （しゃ）秋暑、（山谷詩）西風挽不ㇾ來、殘暑推不ㇾ去、○俗まで來てゐる　支考

後の藪入 春の部に注す後の字斷らすとも、秋季に連たらば秋たるべし、發句も秋季のあしらひ有れば後の字に及ばす

【八月】野口念佛 十五日播州加古郡教信寺にありこれを野口念佛といふ、清和天皇の御宇、教信といふ者あり、姓氏詳ならず、或はいふ南都興福寺の住僧永西坊の弟子なりと、加古の驛舍の北に草庵を結び、常に西に向ひて稱名念佛す、性仁愛にして旅人の荷を助け勞を救ふ、貞觀八年八月十五日完粟の鄉において、盜賊のために殺されぬ首は教信が庵に贈りぬ、骸は其地に葬る、毎年八月十五日僧徒多く歡信寺に集りて佛事念佛す○釋書の略に云播州勝尾寺に僧あり、勝如と名く、八月望の夜一僧來りて門を敲く卽迎へ入る、容僧いふ吾は播州加古の教信也、念佛の功力によりて、今宵極樂に往生する也、尊僧は必翌年の今宵往生すべき也、といひをはりて去る、時に空中音樂きこえ、明年八月十五日の夜果して死せり

後の彼岸 春秋の彼岸は、晝夜等分にて長短なし、佛道は中道を崇ぶ、この時節まことに中道の辰也、故に佛事を修す、提謂經幷淨土三昧經に、八王子に善を修する事みえたり、八王子とは、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至、是也、天神の諸神陰陽交代する時也、この日梵天、帝釋、鎭臣三十二人、司命、司錄閻魔大王、八王使者、悉く出て四方を巡り見、人民の善惡を按へ錄すといへり、故に善事を修すべき也、（善導大師觀經釋）念佛して西方往生の斷行をなすには、冬夏の兩時を取す春秋の二節をとる、仲春（一月）仲秋（八月）兩時は正東より日出て眞西に沒る、彌陀佛の國眞西日の沒所にあたる、故に彌陀の在所を衆生に指示して往生をとけしむる也

後の出替 （紀事）寛嶮類要に云ふ、秦の人本家婢を得て一子を生む妻是を惡み乞て隣家に與ふ、鄰家大に富貴也、本家貧し、後二月二日を以て取歸す、後復本家富隣り貧し、和俗二月二日を家僕の交代の節とする事、元此に本くか、後二月二日八月二日とす

野分 （月令）仲秋ノ月 盲風至ル注ニ盲風ハ疾風也（倭名抄）暴風漢語抄云ふ（八夜知又乃和木乃加世）

野山の色 （御傘）あかくなる事也、秋也、植物に二句也中略又枯野も色の字そへば秋なり、枯野とばかりは冬なり

野菊 （わくかせわ）野原に自然と生ずる菊を云ふ也、花葉ともに菊に似て小也、褐紫の花多し、稀に黃花ありとぞ、是上古より本邦にある菊也、小毒あり食ふべからずと云り、今人家に植て翫ぶものは、唐土より來る、上古は野菊の外なし

揭 （和漢三才圖會）按するに俗に云ふ野雁也、頭頸灰白色、背の翮黑く、其背に黃赤紫の豹文あり、翮深黑腹正白、脚掌蒼黑にして後の趾及蹼なし

【九月】後の雛 （滑稽雜談）和國の女兒雛遊をなす事古き物語にも

出たり、上己の節に擔あるよし、今又九月九日に賞する、女兒多し、源氏物語には常にも雛あそびすとみえたれば、重陽にもてあそぶ、左もあるべきか、俳諧是を名づけて後の雛祭とす、後とは上己に對して謂るなり

後の月　しの部十三夜の條に注す

野の宮の別　桂川の御祓山城國葛野郡小倉山の下椿原に、いにしく伊勢の齋宮、始め此所に栖たまふによりて、伊勢太神宮を勸請す、此所嵯峨野也、故に野の宮と稱す（延喜式）凡齋宮の親王定り畢りて、宮城の内使りよき所をトして、初齋院とし、祓禊して乃ち入る、明年七月に至りて此院に齋す、更に城外の淨野をトし、野の宮を造り、八月吉日をトして河に臨みて祓禊して、卽ち野の宮に入、云々○野の宮の別とは、齋宮爰に籠らせ給ひて、二年めの九月伊勢へ參りたまふとき、天子へ御暇乞に參内し給ふ也、此時天子御手づから由豆の爪櫛を齋宮の御頭へさしたまふと也、これを別の櫛と申とぞ、是によりて伊勢齋宮に移りたまふ也、故に野の宮の別と申也（此爪櫛は素盞烏尊稻田姫にかつけ給ひし因緣を以て齋宮にかつけ給ふとぞ又別の御櫛由豆の爪櫛ともいふ）（日本紀）（第四）崇神天皇六年、天照御神を豐鋤入姫の命に詫して、大和國笠縫の邑に祭り、給ふ云々（同書）（第六）垂仁天皇廿五年三月天照太神を豐鋤入姫尊に離れて倭姫の命に託し給ふ云々（同書）（第七）景行天皇二十年、二月五百野の皇女をつかはして、天照太神をまつらしむ、云々いにしへ三代かくのごとくなる故に、代々皇女を伊勢へ奉り宮仕させ給ふ也天皇卽位の後親王の内處女をえらみ太神宮の御給仕と定め給ふ、これを卜定といふ、内親王なきときは、諸王の姫君を卜定する例あり、いづれにても定め奉り、二年めの八月より翌年の九月迄、野の宮にまします、此間三度の神事三度の祓あり さて土御門院承元二年、四十一代の齋宮、後鳥羽院の皇女隷子内親王の後、此事斷絶たりとぞ○凡齋宮群行は九月十七日也、其前日桂川において祓禊を修すこれを桂川の御祓といふ桂川は山城國葛野郡にあり

殘菊（ざんぎく）（菅家文章）黃花之過二重陽一世俗謂二之殘菊一○重陽以後の菊をいふ殘菊の宴ば十月五日也、冬の部みるべし

殘草　菊の異名（藏玉）に載たり、按ずるに萬花におくれ殘る故の名なるべし

野山の錦　くの部草の紅葉の條に併せ注す

《お》　をの部に併せ注す

《く》【七月】化生　（五雜俎）歲時記に云ふ七夕に俗蠟を以て嬰兒を作り水中に浮べ以て婦人子に宜しきの祥とす、これを化生といふ、王建か詩に云ふ、水拍ツテ銀盤ヲ弄ス化生ヲ、是也、今の人泥塑嬰兒或は銀範を以てする者、化生をなす之をしりて七夕の戲なる事をしらず

苦丹　苦丹を龍膽といへるは誤なり、龍膽の條に注す

觀音草　（わくかせわ）草花肆にあるもの、葉、蘭に似て少く狹く短し、石菖に似てしのぎなし、六七月莖を抽で小花をあらはし、穗をなす、淡紫其莟とき愛すべし、然るに大和本草には、觀音草無花無穗といへり京師の俗中元の日、此莖を以て蓮の飯を縛る、觀音草の名義によるか

常山花　（和漢三才圖會）根を常山と名け、葉を蜀漆と名く和名久佐木處々にあり、其葉甚だ臭し、高さ丈、許葉梓楸の葉に似て圓く尖り略皺みて澤あらず、六月細花を開く、白紅雜攢る

常山の虫　（同上）蟲は此木株の中にあり、蝎也木の心を蝕ふ、六七月株を破てこれを取用て疳の藥に入る、或は炙て小兒に食しむ、凡蝎を取の法、蟲ある木は株に必小き穴小り、管を以て水を中に入

るれば、虫首を穴より出す輙木を剪兩端を縛りこれを探り得る

粟奴　（和漢三才圖會）粟の苗に穗をなす時、黑き煤を生る者粳の奴麥の類の如し

鑪蟲　（和漢三才圖會）轡虫（俗字）正字詳ならず、按ずるに此虫莎雞のたぐひ翅青く腹黃色、前脚長く疾走り跳る、毎に穴に出入する故に獲がたし秋鳴聲馬の轡の音に似たり因て名づく

蛁蟟　時珍曰秋月鳴て青紫ある者蟪蛄とす

〔兼三秋物〕降り月　（滑稽雜談）師說にいふくたり月は、十六七夜の既望すぐる月をいふ、然れば居待月の頃より、廿一二夜迄の月次第に魄を生ずるを、望くだりともくだり月ともいふべし、藻鹽草の傾くの義も捨べからず

葛、同根を堀　眞葛が原、眞葛（和漢三才圖會）其葉靭薄く楮の草に似て面青く背白し、風至ればよく飜る恰も掌を反すが如し、婆娑として聲をなす、故に哥人葛の葉の裏見と稱し、人の恨にたとふ（大和本草）根を冬月或は春いふだ苗を生ぜざるとき堀て用ふ長きは數尺乾かして用ふ葛根是也、云々古式八月の季とす不審○眞葛の眞はほむる辭也、眞葛が原は京師知恩院山門の南にありといへども只葛の生ふる原をいふなるべし

花壇　（貞享式）今按ずるに花壇も花畠も決して秋に定むべき也

草の花、草の實　諸草のたぐひ春夏に花を開く者あれど、秋多き故無名の草花を秋とす、實もまた然り（古今）みどりなるひとつ草とぞ春はみし秋はいろ〳〵の花にぞありける

栗芋　はの部蓮芋の條見べし

觀音寺梨　近江國芦浦觀音寺より出づ、微赤く甚だ大ならず、漿多く味甘し、口中に消るがごとし

九萬疋　鰐一名九萬疋といふしの部鰐の條に注す

【八月】桑名祭　十八日、春日大明神の社勢州桑名の城下にあり、祭る神四座別當佛眼院說に云ふ、經津主命は、神護景雲元年下總香取の宮より勸請す、又武甕槌命は正應二年八月十八日常陸國鹿島の宮より勸請也、天兒屋根命姫大神は永正二年八月十八日伊賀の名張より勸請なり、毎年八月十八日を以て祭辰となす事、正應永仁の月日を以これを修すといへり○先十七日、社前の南北に車一輛ツ、飾、夜に入て試樂あり、翌十八日祭禮のとき、件の車を南北へ引渡し音樂を奏す明和十年の春回祿以前は兩社六座とし、北三崎の神社三坐、南春日の神社三坐、共に往古は春日鎭坐の日を以て祭る、回祿後祭禮延引す、三崎大明神は土地の神なり、鎭坐の年月詳ならず凝洲崎烏洲崎、泡の州崎、合せて三崎といふ、又七月七日の神事あり、氏子員辨川に於て石をとり來て兩社に献ず、これを石取の神事といふ、此日囃練物を出す○此八月祭を天武天皇の祭禮と記せる書あり、日本紀に天武天皇元年九月朔車駕還伊勢國桑名宿り給ふ云々今驛中に神社あり、よりて誤り記する

苦參引　時珍曰苦は味を以て名く、參は功を以て名く（和漢三才圖會）其花莖の梢に穗をなす、七八月開く莖根葉ともに藥用とす、故に根を連ねこれを採る

藥堀　秋野山に出て藥草をとる也、茯苓突なと句によりて秋となるべし

虞美人草　（大和本草）名花譜に云ふ、花四瓣色艷罌粟に類して小也園史云ふ吳俗呼で虞美人草とす、云々是は四五月花をひらく者也（花彙）美人蕉（紅蕉花）此芭蕉の一種（類說）褒斜山谷の中に虞美人草あり

形鷄冠のごとく、大にして花なし、葉皆相對す或は虞美人の曲を唱ふれば兩葉撫掌して頗る節拍にあたるが如し○鷺水が新式に口決ありといふもの何れの草をいふぞや

栗茸　（和漢三才圖會）山原に生ず、高さ寸に過ず、繖四五分圓く卷正色、剝たる栗の肉のごとし故に栗茸と云ふ

下簗　をの部落鮎の條に注す

【九月】茱萸の袋

きの部菊酒の條に注す

栗の節供　きの部菊の節供の條に併せ出す

九日小袖　菊襲（清嚴正徹記）九月衣類菊襲（面白裏紫かさねあるべし）○地下良賤今日縹色の小袖を着し、互に相賀す、是を九日小袖と云ふ

鞍馬祭　（九日諸神記）鞍馬寺由岐の社天慶年中勸請す、神社啓蒙靭の社は山城國愛宕郡鞍馬山にあり、祭る所の神一座、大己貴命○此社は天子不豫世上騷動の時、靭を此神前に懸く、故に山木の號、蓋大己貴命少彦名ともに疾病を療し、天下を治るの神也、こゝをもて五條天神及當社に靭をかくるの遺法たり、或說に祭る神素盞烏尊とす、例祭九月九日なり、八日の夜氏子の男女供物を旅所に献ず、當日神輿本社に入、

勸學會　十五日三月九月十五日一年兩度行なはる三月の條見あはすべし（公事根源）勸學院かの大學の南に此院を立られしかば、南曹とぞ申める、冬嗣大臣遠き慮りおはしけるにこそ、子孫親族の學問すゝめんために建立云々

吳服祭　あの部穴織祭の條に併せ注す

胡桃　（庖厨本草）此木うるしに似て最も大なり、其實核圓く太く、色淡く皮厚く硬くして破れがたし仁脂多く味最も美し

榠柤の實　蘇頌曰榠柤の本葉花實酢く水瓜に類す、木瓜に比すれば大にして黃色、是を辨ずるに惟蒂の間をみるに重蒂乳のごときものあり、此則榠柤也（大和本草）花は林檎又海棠に似ておくれて開く、實は秋熟す

九年母　（大和本草）俗に九年母といふ、名義未詳、木は密柑より長しやすく早く實る

栗　（事類合璧）九月霜降て乃ち熟し、其苞おのづから裂て墜者久しく藏むべし、苞裂ざる者腐易し○落栗、毬栗、燒栗、栭栗、柴栗、剝栗打栗、出落栗、三度栗、山栗、錐栗、搗栗、各頭字の部にわかちて注す

熊栗架を搔　時珍曰熊石巖枯木に在を山中の人これを熊館といふ性よく木に上り好で栗を食ふ、故に攀緣て梢に至て、枝を折て並へ鋪て居所を設く、是を熊架といふ、熊館の類也

茱萸　（和漢三才圖會）胡頽大抵三種あり、其葉と實少し異事あるのみ一種春月に當て苗を種る時實熟す、大さ小棗の如き者これを苗代胡頽子と名く、一種、五月實熟す大さ棗のごとく莖長くして下り垂る、一種九月實熟す、小く其大さ櫻の子の如くして簇りなる

草牡丹　（大和本草）葉は牡丹に似たり、單白花をひらく、實牡丹に似たり、宿根より生ず、又實をまきて生ず、是又牡丹芍藥の類也

草の主　菊の異名（堀川百首）かばかりの匂ひはあらじ菊の花うべこそ草のあるじなりけれ　匡房

草の紅葉、草の色　草の錦　野山の錦草木の紅葉を錦にたとへていふ也（新續題林）織いだす錦とやみん秋の野にとり〴〵咲ける花

の千種は　邦忠

崩魚簗　下り簗の破壞たるをいふ魚簗の形狀春の部上り魚簗の條に注す

暮の秋　暮て行秋をいふ、秋の暮に混ずべからず

九月盡　九月の晦日をいふ

《や》【七月】柳散

（晋史）蒲柳の質秋に望て先づ零つ

八幡安居の頭　十五日（紀事）凡安居の頭は大經營也、故に三年以前その頭人を指點す、先前年の十二月朔日より翌年の十二月十五日に至りて八幡山下の鄕家安居の頭を勤む、鄕家は村里中の長をいふ、その土地の中にて姓氏ある者なり、又十二月八日石清水安居頭人の宅において達所小綱の神人長史の補任を授け、これを指部といふ、又十二月九日頭人の宅に鄕家衆を饗應し、能拍子等あり、これを古那志といふ、是小習禮の訛りか、又十二月十二日頭人夫婦杉山不動堂の前にて垢離を修す、これを精進入といふ、又十二月十三日頭人淨衣を着し、七所の社に參り奉幣あり、頭人の婦も又これに從ふ、並に鄕家烏帽子淨衣を着し奉供す、その行粧甚だ古風なり、放生川に橋二ツあり、一は安居橋と名く、是安居當人の渡る橋也、常に不淨の人を禁ず、頭人これを渡れば、今日山上相知る所の社僧の坊に止宿して精進潔齋する也、この間西郊桂の里の女子孫夜叉、白布を以て頭髮をつゝみ、來りて桂飴を捧ぐ、是を桂帽子と稱す、今京の童謠にいふ桂帽子是也、十二月十五日安居願人夫婦社參、本社の前に大なる松一本建て、白布二疋をその上下の技にかけ、人をして假に猿のまねをしてその松に登せそのかけ布の枝を伐携て頭屋に歸り、後代修頭の效とす（增山の井）今は十二月十五日也云々

煸米　（本朝食鑑）今製する燒米は、青稻を以て稃糠を去り、炒り過してこれを舂き扁米となす、此を燒米と稱す、甚佳味也、勢州莊野の市上にて燒米を造る、青麥艸を以て俵子を作り、これを包みて四方に送る

藥師草　弟切草也をの部みるべし

益母草　ぬはじき也めの部みるべし

炙花　（わくせかわ）嫩なる蔓草小白花をひらく、內微紅也、兒童其花をとり唾にてしめし、莖付方を上にして、手足或は頰に貼るにさながら炙のごとし依て名とす○是和產也、其蔓葉女青に似て七月葉の間に箇咲の花をひらく、五瓣にして少しく瞿麥の形あり

やんま　との部蜻蛉の條に出

〔兼三秋物〕薯蕷　（和漢三才圖會）和名夜萬都伊毛、俗夜萬乃伊毛、今云長芋、其根の長さ尺ばかり周り二三寸灰黃色肉白し、煑て食ぶべし（救荒本草）薯蕷溪の邊に端を出し時時風水に感じて鰻に變ず半變ずる者をみる人往々なり○此者薯蕷といひ、薯藥といふ、又山藥といふ、初め唐の太宗諱を蕷といふ、因て辟て薯藥と改む又宋の英宗の諱を薯といふに因て山藥と改む

【八月】燒帛

（躬恒秘藏抄）燒しめとは馬などの尾髮をきりて、はさみてその餘りを燒て田に立る也、其髮をかぎて鹿のはまぬ也それを燒しめといふ

八幡祭　放生會、放ち烏八月十五日諸國此事ありといへども、男山の神事を以て京師の人八幡祭或は放生會といふ、社頭美豆の南八九町にあり京を去る事四里餘、男山石清水と號、或は雄德山鳩の峯と種す、欽明天皇三十一年冬肥後國菱形の池の邊、民家の兒三才の時、神託し

て云ふ、我は是人皇十六代譽田天皇也と、是によりて豐前國に鎭座し
て八幡太神と稱す、傳へいふ眞觀元年秋七月、八幡太神鳩の巢に移る
はじめ釋の行敎南都大安寺に居る、この僧姓は武內大臣の裔也、曾て
眞觀の初め、宇佐の神祠に詣づ、一夏九旬、晝は大乘經を說、夜は密
呪を誦す、一夕夢中に太神告て云ふ、師王城に歸らば我も又隨ひ行王
城に居して當に皇祚を守るべしと、行敎やらやく山城國山寄に至る、
その夜太神又夢中に告て云ふ、師我居る所を見よと、覺めてこれをみ
れば、東南男山鳩の巢に光を現す、行敎これを奏して宮殿と成る○正
殿三座中は八幡宮（應神）東は氣長足姫尊（神功）西は比咩大神（玉依
姫）後嵯峨天皇源の姓を諸皇子に賜ふ時、八幡宮を氏神とし、此社を
以本朝第二の宗廟としたまふ每年二月十一日初卯の日神樂あり、御神
樂に准ぜらる、八月十五日放生會あり、養老四年九月征夷の事あり、
大隅日向の兩國逆亂す、よりて宇佐の宮に祈請せしめ給ふ、その稱宜
辛島勝婆豆米の神軍を辛てかの國を征し、敵を討て利あり、大神託し
て曰、合戰の間多く殺生をいたす宜く放生會を修すべしと、諸國の放
生會を修すべしと、諸國の放生會こゝに始る○（紀事）今晚神を輿中に
遷し奉り、神幸を促す左右の馬寮御馬二疋を奉、召使、官掌、外記、
史、左右兵衞の府、辨參議、上卿左右兵衞府、上﨟、前駈等絹屋殿に
參り向ふ、神輿猪の鼻を下り、宿院頓宮に至りて行列行幸に准す、こ
の次後三條院延久二年より始る、當社の祭式甚だ繁多也故に略す

八束穗　豐年の稻の穗のしなへのいと長きをいふ

山雀　（和漢三才圖會）狀雀眉烏に似て、頭黃白に赤色を帶ぶ、眼領の
邊に黑き條あり、背灰赤色、嘴胸尾ともに黑く腹淡赤く、性黠巧よく
囀る、好て胡桃を食ふ、紙燃の輪を作り籠中に設くる時は飛て其輪を
潛る別に箱を籠の隅に安き宿處とす○此鳥藝をよくす、山雀に藝をし

へて放ち鳥　乙由

敗荷　注ニ不レ及ヘ

【九月】山口祭　中の巳午の日周防國吉敷郡仁壓の神社、九月中の
巳午の日祭禮を行ふ、これを山口祭といふ、山口の古名は仁壁の庄故
に、仁壁の神社と號す、祭る神住吉三神を以て本社とす、合せ祭る神
二神、味鋤高彦命下照姫の命、各一社、以上王殿三社、すべて仁壁
の神社と號す、又稻宮とも稱す、衣食の事を主り給ふ神なるによりて此號あり、祭禮のはじめ織機の神事あり、次の日
神幸神輿三座、本社の西、神幸の地に出し奉る、流鏑馬あり、皆國主
よりこれを執行せらる、有司かはりて國主の拜禮あり又、六月御田の
祭あり鎭守の年月詳ならず、人王十一代垂仁天皇の御宇、勅幣を奉ら
る、その傳記失散す

八幡花の頭　廿日（記事）山城國八幡山の社僧、九月廿日花の頭を
修す、先六月より撰はじめて花葉を造る、これを地盤刻といふ、我俗
板を割を片といひ、又刻といふ、是板を刻て臺を製するの義なり、花
の頭とは社僧の弟子髮を剃、衆僧の列に加るのとき、社僧を饗すに彩
箋を以て、草花を製し、臺を神前の廻廊に飾り、酒宴の興を催す、故
に花の頭と稱す

山路草　菊の異名也○ふるとほき山路のきくは斧の柄のくちぬるのち
も猶殘るらん　前內大臣實繼

燒栗　燒たる栗也

山粧ふ　（臥遊錄）秋山明淨にして粧ふが如し

破芭蕉　芭蕉翁移二芭蕉一詞に云ふ唯この蔭に遊びて、風雨に破れ安き
を愛するのみと云々

漸寒　次第に寒きといふ事にて秋の末の寒さを云ふ

《ま》【七月】槇賣　ろの部六道參の條に出づ

曼珠沙華　（大和本草）金燈花、鐵色箭とも云ふ・月令廣義に曰冬春葉茂り、夏月花を生して葉死る、花葉相衝らず云々此花下品也、其葉石蒜に似たり一類也、此花を國俗曼珠沙華と云ふ、翻譯名義に曰、曼珠沙は此に柔軟又赤華といふ、西陽雜俎曰金燈草、俗人家にこれを種る事を惡ふ、一名無義草と云ふ、花あるときは葉なし、葉ある時は花なし　○俳書には曼珠沙華、石蒜同物とすといへども、篤信翁の說に從ひ、石蒜はしの部にわかちて注す

松虫　（和漢三才圖會）蟋蟀の類褐色にて長き髭腹黃也、野草及び松杉の籬に在り夜羽を振て鳴聲知呂林、古呂林といふがごとし、甚だ優美也凡松虫鈴虫畫は得がたし、夜燈火を照す時は、光りを慕ひて來るを捕へて籠中に畜ふ○今俗にリンリンと鳴を鈴虫と云ふはわろし、是松虫也といへり、鈴虫はチンチロリと鳴を云ふといへり

〔兼三秋物〕眞夜中月　廿三夜也、子の刻に出て午の二剋に入る

十寸穗の芒　（無名抄）穗の長さ一尺ばかりあるをいふ、彼ますかがみを萬葉に十寸鏡と書るにてこゝろ得べし

眞蘇宇の芒　（同上）眞の蘇枋也といふ心也、眞蘇枋の芒といふべきを、詞を略したる也、色深き芒の名なるべし

麻苧穗の芒　まそほの糸（同上）眞麻の心也、是俊賴朝臣の哥によみて侍る、ますほの糸をくりかけてと侍る、糸などの亂れたるやう也云々（堀川百首）花すゝきますほの糸をくりかけてたえずも人をおもほゆるかな　俊賴○まそほの芒とは穗の赤きをいふ、ますほ、まそうな

どいへるはみな語の轉じたるにて、もとは赤赫の意なるをわきまへず して、各別種に注せるは誤なるよし清水濱臣の考あり

松尾梨　形觀音寺梨に似て雪のごとく漿少く甘し、奥州會津の中、松尾の産也、今洛の人家所々に接得て頂妙寺柿と一双とすといふ

圓梨　青梨の種類にて大きく、皮薄く色青くして甘美也

【八月】待宵　八月十四日夜孫明復詩、云、銀河無レ聲露暗垂、玉蟾初上欲レ圓時、情樽素瑟宜先賞二明夜陰晴一未レ可レ知○待宵とは翌の夜の晴曇り計りがたければ、先今宵月を賞する也、（三潮草）待とは翌の夜の月を待義なるべし云々

松茸　（和漢三才圖會）凡松蕈は山城の北山の産最も佳也、赤松の陰所秋の雨濕の爲に釀されて生ず、初め落葉を藏きて見がたし、漸く長ずる者二三寸、頭圓く柄あり、蕈の傘を發く、外の色黃白紫を帶、內白く細く深く刻みあり其柄太き者柔にして味良し八九月の交盛なりとす

舞蕈　（同上）濕處或は朽木に生ず、纖柄なし、一株片々と叢生す、火炎茸の如くして、上黑く元白く味脆く甘し

間引菜　貝割菜、摘菜、小菜（和漢三才圖會）凡蕪菁蘿蔔の類、大抵八月種を下し、彼岸中に苗を生ず、其繁きを抜て羹食ふ、摘菜間引菜是也、云々又曰苗を生じ地を出る事一二寸、漸く萠て二葉なるを蔬とす是を具割菜と號す

猿子鳥　（和漢三才圖會）正字未詳、狀大さ雀のごとし全體灰黑胸腹淡赤し、羽灰色にして黑き彪あり、尾の下兩端に白者二つ、其背短くして赤黑く脚黑く頂灰黑、頭より胸に至て淡赤にして白き圈あり、千葉菊花の紋の如し、猿ましこ照ましこ大ましこあり

豆鳥　豆甘美、豆廻いの部桑戸鳥の條をみるべし

【九月】豆名月　八月十五日の月を芋名月といふに對して、十三夜の月を豆名月といふ

升市　すの部住吉相撲會の條に出づ

鞠花　菊異名也(藏玉)にみえたり、麁文曰按ずるに菊の字本鞠に作る鞠に從ふ、鞠は音キク訓マリ又鞠の如き形をいふにや

椙桲　藏器曰樹林檎の如く、花白綠色(わくかせわ)此種蕃邦より渡て此訓は則蠻語なり、今京師に多し、梨子の如く風味も又梨子に似て少しかろし、かせいたといふ菓子は、これに砂糖を和して製したる也

豆引　(和漢三才圖會)歩(俗作レ菽ニ角を莢といひ、葉を藿といふ、莖を萁といふ、本綱に莢ある穀の總名皆歩といふ、大豆に黑白黃褐青斑の數色あり、大抵夏至十日以前種を下し七月花をひらき九月莢を結ぶ

正木の鬘　眞淵翁云ふまさきのかづらはもと常磐なるかづらをすべていふべし、しかればいといにしへ神社によりて用ひなれしは、さま〴〵あるべき中に、襷とし鬘とせしは一種有けん、古今集に深山にもあられふるらし外山なるまさきのかつらいろづきにけり、とよみしはすべて常磐なる草木も、冬のはじめには去年の古葉色づき落るものなるが、山の岩木などにまとへるとこはかづらの葉は、南天燭に似て黑みあるが、冬のはじめにえもいはずもみづるあり、是ぞ山行時もはら目につきてみゆれば、右のごとくはよみつらん云々○眞淵翁の說によるときは、定家蔓に似たり俳諧に秋季と定めたるは、古歌に色づくとよみたるによりてなるべし

冬青の實　(和漢三才圖會)冬青其葉冬もまた正青く光澤あり圓長にして尖らず、輭なる鋸齒あり、夏小白花をひらき、秋實を結ぶ、生は青く熟すれば紅ゐ、おのづから裂て中に白子あり、枝をさして活易し、藩籬とするに堪たり

まてばしひ　(大和本草)櫧の一種也、葉は櫧に似て厚く大也、色深青也、面に光澤あり、屋材とし器を作り舟の櫓とす、其用櫧と同じ、一類別種也實は櫧より大也、餻とす民用を助く○實を以て秋とす

檀　(和漢三才圖會)其實棟の子の如くにして小く、簇りなる、生は青く熟すれば淡赤し、裂て內紅、子三ツ四つ粒あり、其葉秋に至て紅なり

松の實　しの部松子の條に注す

《け》【七月】今朝の秋　立秋をいふ

牽牛　しの部二星の條に出づ

夏解　夏書納　夏は四月十六日入、七月十六日解、是を夏解といふ、一夏九旬の間、他の化益の爲に聖經及び名號題目を書寫し、夏終るの後是を堂塔伽藍に納め、三界萬靈に回向す、是を夏書納といふ在家も亦此に效ふ

夏解草　(釋氏要覽)僧尼解夏の日綵を以て節を束ねて檀越に遣る、これを夏解草といふ、今この草を詳にするに、已に五分法身の座とす故に吉祥草と名づく(漳州府志)四時一色泉石の中に生ず、山村の人瓶に挿みて先を祀る、陰字にありといへども葱翠にして凋まず、家に吉事あればおのづから花開く、故に吉祥草と名づく(字彙)節は伊刄反音印、草の名也(大和本草)夏解草は麥門冬の大なるもの也

〔兼二三秋一物〕玄兎　月の異名也○謝莊月ノ賦ニ云引ニ玄兎帝臺ニ○つの部月の兎の條かよはし見るべし

月宮殿　つの部月の都の條に出づ

雞頭花　時珍曰雞冠の花の形を以て名に命ず、春苗を生じ、夏に入て高き者五六尺、短き者纔に數寸、中略六七月梢の間に花をひらく、紅白黄の三色あり、中略花最も久に耐たり、霜の後始て焦る

黄獨　（鎭江府志）莖も蔓も花も實も山藥に類す、葉大にしてや、圓く根は芋の如くにして髭あり、味微苦し〇俗に何首烏玉といふ者是也

枳椇　正字白石李盍枳椇は實の名のみ、その實大さ大豆の如し、これを喰へば少しく梨の味あり、小兒疱瘡鼻穴閉がるものこれを以て其鼻穴を穿つ

【八月】けふの月　つの部月見の條みるべし

毛見　（紀事）土民年の貢を納る凡秋來收納するの法、晩秋に縣吏先て田地の立毛の善惡を巡檢す是を毛見といふ草を毛といふ故に稻未刈穫ざる亦立毛といふ

罌粟子蒔　（月令廣義）八月十五日夜罌粟子を種れば花盛にして繁しせの部施火燒の條に出づ

《ふ》【七月】舟形の火　其

古枝草　萩の異名也（藏玉）宮城野や露も色ある古枝草ことしの秋も花はさきけり　西行

藤袴　（和漢三才圖會）高さ二三尺、葉女郎花の葉に似て切叉なし六七月細き白花を開く、云々以今云ふ藤袴是也、（倭名抄）蘭（和名）木草云ふ布知波加萬、新撰萬葉別に用三藤袴ノ二字ヲ一（大和本草）眞蘭和名藤袴又アラヽギといふ古歌にらにとよめり、八雲御抄にも蘭をふじばかまといふと書給ふ、葉は麻に似て兩岐あり、香よし、乾て彌香し、是眞蘭也、野にあり秋紫白の花をひらく、若葉はゆがきて食すべし、其芳香美味凡菜に勝れたり、詩經楚詞などに詠ぜし蘭是也（和訓栞）花の色をもて藤と稱し、其纖の筒をなせるをもて袴と稱せり〇袴になぞら

へ讀事哥俳諧ともに同じ（古今）何人かきてぬぎ掛し藤袴くる秋ごとに野べをにほはす（曠野）藤袴たれ窮窟にめでつらん　芭蕉

筆津虫　蟋蟀の異名也（異名分類）古き筆の化してなるといへり『ふでつむし秋も今はと淺茅生にかたおろしなる聲よわるなり

〔兼二三秋一物〕臥待月　（八雲御抄）子待臥待廿日月なり（桂明抄）永德の頃、爲軍卿廿日月といふ題にて「かぞふればはつかの月の臥待も猶宵の間はすきて出にき」臥待月は八雲に廿日月と遊され候へども望月によりて廿日月に詠んは不審なく候へども、月の百首などには十九日の月也〇一說に臥待月は十九夜の月也又寢待月ともいふ

更まち月　（藻鹽草）廿日の月なり

筆柿　形小にして長し

蒲萄柿　猿柿（本朝食鑑）俗蒲萄柿と稱す、或は猿柿といふ、味佳なりといへども用をなさず

【八月】匏　ゆの部夕顏の實の條に注す

木芙蓉　水に出る者これを草芙蓉といふ、荷の花是也、陸に出る者これを木芙蓉といふ、時珍曰此花醮しく荷の花の如し、故に芙蓉木蓮の名あり、八九月始めて開く、故に拒霜と名く、中略冬凋み夏茂り秋の半始て花を着く、花牡丹芍藥に類す、紅、白、黄、千葉の者あり、最も寒に耐て落ず實を結ばず

蒲萄　時珍曰春月萠苞を生じ、葉顆る括樓の葉に似て五の尖りあり、鬚を生じ蔓延數十丈を引、三月小花をひらき穗をなす、黄白色實連り着く事星の如し、七八月熟す、紫白の二色有り

蒲萄酒　時珍曰蒲萄、酒に造るべし、これを醉飮すれば陶然として醉ふ、故にこの名あり

袋洗　（山海名産圖會）伊丹にて新酒成就の後、猪名川の流に袋を濯ふ　そのころを待て近郷の賤民この洗濯をぞふ、其風味薄き醪の如し、是又他に異なり「賤の女や袋洗ひの水の汁　鬼貫○青藍云ふ鬼貫の先吟もあれば秋季として子細なからんか

二季鳥　雁の異名也（藏玉）いづかたを古里とてか二季鳥としにふたゝび行かへるらん　忠峯

【九月】不堪田奏　（江次第）不堪佃田の申文（九月七日或は五日）つきて租稅を三分二など免し給ふ事あり、こまかに諸國より坪付帳を奉れば、大臣陣につきてさだめ申て、諸國に施行ありし也、作るに堪ざる田といふこゝろにて不堪田と申なり

二夜の月　しの部十三夜の條に注す

福王寺祭　なの部鳴瀧祭の條みるべし

佛手柑　（和漢三才圖會）其樹柚に似て刺あり、全く柚柑の類に似ず、稍大く淡青色、筋理顯然として略多羅の葉に似て尖らず（大和本草）昔本邦にこれなし近世來る

綠豆引　（大和本草）綠豆一年の內に二度實る故に八重生といふ○苅収るを引といふ

佛甲草　（大和本草）京都及び諸州に一夏草といふもの是也、又根なし草と云ふ、根鬚なし、葉は細長くして尖れり、莖を折て土に挾めば能生す（滑稽雜談）或說にその葉の形指の爪に似たり、故に佛甲草とも佛指甲の名あり、此草の葉生ひ出て石地にある形、蓮花の如く故に岩蓮花といふ、篤信は非也とす○岩蓮花にあらず、とせば佛甲草雜物にや

冬を待、冬を隣　注ゝ及たの部七夕踊の條下に出づ

《こ》【七月】小町踊　十八日御靈の社は上は京都の北西にあり、下は京極の西出雲寺の北にあり、上下御靈の社、每年七月十八日御出、八月十八日祭禮あり、神輿二基也、御靈八所は崇道天王、伊與親王吉備の聖靈、藤原の大夫廣繼藤原の夫人、橘逸勢文屋の宮田丸、火雷神也、世に火雷神を謂て菅家の靈とする者は誤也、傳云御靈所八の內四所は、桓武天皇の御時これを勸請す、下の四所は、仁明天皇の御宇これを勸請す○上出　雲寺を上御靈の神宮寺とし下出雲寺を下の御靈の神宮寺とす、傳教大師の草創にして今兩寺ともに絕たり、寬文年中慈眼大師の遺誡によりて久遠壽院の准后山城國宇治郡山科の鄕に於て出雲寺を再興し給ひ毘沙門天を安置し給ふ御靈の社あり、是古を存するの遺意なり、上御靈の御旅所は京極通り中御靈にあり、下御靈の御旅所は年々その所を定めず、その年神事頭屋の家內に安置す、御旅所に在すの間を以て御旅と稱す

ことり使　すの部相撲の條にいづ

小鷹狩　（滑稽雜談）初鳥狩、小鷹狩、少しかはりめありといへども萬葉新點によらば差別なし、小鷹を秋とするは、鶉雲雀その外秋の小鳥狩なり、大鷹は冬として、鶴鴈鴨の類を狩也（わくかせわ）凡て鷹は冬に至て小鷹の分は秋也、その種類多し、刺羽といふは小隼也、朝鮮より來る雀鷂、雀賊、つみの雄也兄鷂、鶻、このりの雌也、鵰うち也、巢このりといふは秋巢より取をいふ也、凡て鷹はたかの總名なれども、別しては大たか也、鵰は小たかの總名也

紅梅草　仙翁花也、せの部みるべし

浮薔　一名澤桔梗（わくかせわ）葉は葵の形に似て、滑なるところ那岐に似たり夏の末より秋碧花をひらく、花こなぎと云ふ也、水草なり是を水葵とおぼえたる輩多し、水葵は莕也、花黄なり○腥し小なぎの上の鮑の腸　芭蕉

竈馬（ぐい）　（酉陽雜俎）竈馬狀促織の如し、俗にいふ竈に馬あれば食に足の兆（大和本草）蟋蟀に似てひけ足ながくせい高く頭尾さがりてするど也、竈のあたりに穴居す筑紫の方言に井ヒゴ○海士が家は小鰕にましるいとゞかな　芭蕉

〔兼三秋物〕心の月　（秋の枝折）心の月とは清き心をいふ

氷の輪　月を見立て云ふ（東坡詩）氷輪横海潤

氷の鏡　同じく月をいふ

午房引　注におよばず

胡盧柿　一名豆柿即乾柿也、淡霜を生ず

樹練柿　形鳥の卵の如し、攝津丹波に多し所謂鷄の子柿歟、京師にて御所柿を以木棟柿といふ

御所柿　大和の御所村より出づ、樹淡の上品なる物

紅瓶子梨　瓶子の形にて赤く其肉白し

空閑梨　肥前の產微赤色、極めて大なり、其味圓梨に亞

小瀑江鮒　（和漢三才圖會）鯽小き者を鮒江と名く、或は名吉或は伊勢鯉或は口女又伊奈洲走小瀑江鮒といふ、中略八九月稍長じ、大さ六七寸、江海の交にあり此時泥味なく脂多くして愈甘美、色黑を減して瀑し洗ふが如し故に小瀑江鮒といふ

【八月】小望月　十四日の月をいふ

今宵の月　つの部月見の條にいづ

駒牽、駒迎　望月の駒、きり原の駒（江次第）本は八月十五日なり、朱雀院御國忌に依て、十六日に改め用ふ、云々頭書云ふ、信濃勅旨の牧十五ヶ所、延喜式に載る所の一也、天皇南殿に出御ありて御馬を分ち取らしむ、出御なきときは建禮門の前の大庭に於てこれを牽分しむ云々裏書に云ふ、上野九牧、延喜式に廿八日と云々七日甲斐の勅旨の牧十七日甲斐穗坂の牧、廿三日信濃望月の牧、廿五日武藏勅旨の牧、又十五日信濃勅旨の牧廿八日上野九牧、以上六個日延喜式にみえたり、この外承平官府十三日武藏秩父の牧、廿八日同小野の牧の御馬これを貢（公事根源）公卿以下次第に御馬を給る、馬の差繩をとりて御前にすすみ、一拜す、取殘したる馬をは引分の使とて、次將を以て院東宮などしかるべき所々へまゐらせ給ふ（新葉）秋の田の穗坂の駒を引ひれてをさまれる世のかひも有けり御村上御製（金葉）東路をはるかに出るもち月の駒にこよひやあふ坂の關　仲正（拾遺）相坂の關の岩かど踏あらし山たち出るきりはらの駒馬遠（猿蓑）一の戸や衣やぶるゝ駒むかへ去來

御靈祭　十八日八所の御靈祭也（八所神の名七月の部御靈の御出といへる條に注す見合すべし）（紀事）午後に神輿二基中の御靈の離宮を出て幸の鉾八本、凡鉾を床上に建て、棒二本四人を以てこれを荷ふを幸の鉾といふ、神寶の內特にこれを尊敬す、又强力の人鉾を帶の間に立、兩手を以これを捧け行、これを祭鉾といふ、又一人竿の先に道祖神の假面をかけて神輿に先だつ、此假面の鼻長大也、俗これを王の鼻といふ、別當及び氏子供奉御旅所より西のかた今出川下烏丸を歷て、長者町より室町を過り、本社に入、上御靈の社は京極通筋違橋の乾二